戦闘員、派遣します!
3
暁なつめ
NATSUME AKATSUKI
戦闘員、派遣します!
COMBATANTS WILL BE DISPATCHED!
ILLUSTRATION
カカオ・ランタン
KAKAO LANTHANUM
角川スニーカー文庫

戦闘員
3
派遣します！
「はい、ここに血判を押してね。
……ねえ、十年後って長過ぎない？
もうちょっとまからないかしら」
グリム
GRIMM
大司教だけど
ものすごく重い人。
この巻のメインヒロイン
ROKUGOU'S VIEW
婚姻届もそうだけど、
約束破ったら呪うからねって
感じが本当に面倒臭いな！
そういうところが重いんだよ！

ラッセル
RUSSELL
水のラッセルの
異名をもつキメラ。
戦闘員たちのアイドル兼
お母さん的存在となる。
「トラ男さん、
俺ヤベーっス。俺おかしいっス。
なんかドキドキして
きたんですけど」
「お前は元からおかしいが、
今のお前はおかしくねえにゃん。
可愛いもんは可愛い。
それでいいじゃねえかにゃあ」
ROSE'S VIEW
すいませんラッセルさん、
その格好であたしを同族扱いするの
やめてもらっていいですか？
これでも真面目に生きてるんです。
男の娘でも幸せになれるアンデッド祭り

「はい、そこのお兄さん！　おっぱいあるよおっぱい！
どう？　今ならおっぱいが四つもあるよ」
ここは街の繁華街。
アリスに借りた金を使い、
祭りの間だけ小さな店をレンタルした。
「いやだなお兄さん、おっぱいって言ったらおっぱいだよ。
プニプニしてて、見てるだけで幸せになれるヤツ。
みんな大好きおっぱいです」
「みんな大好き……」
「おっぱいです」
この街にはキャバクラというものがない。
もっと直球な風俗店なら一応はあるのだが、
綺麗なお姉さんを侍らせてお酒を楽しむという行為は、
長期に渡る戦争で男の比率が低いこの国で、
あまり需要が無かったのかもしれない。
俺はニギニギと揉み手をしながら笑みを浮かべた。
「一時間銀貨五枚ポッキリで可愛い女の子と遊べちゃう！
どうです？　美味しいお酒とおっぱいで心も体も癒やされませんか？」
「癒やされます」
こういった客引きに耐性が無いのか男はアッサリ承諾した。
気が変わらないうちに店の中へと案内する。
「いらっしゃいませお客様、
当店のナンバーワンことスノウです」
スノウ
SNOW
スラムのみなしごの身から
ぼったくりキャバクラで
ナンバーワンとなって働く努力家。
最近は騎士としての何かを
失いつつある。
ALICE'S VIEW
おっぱいが二つしか見当たらない？ おっ？
何だお客様、喧嘩売ってんのか？
このサイズが運動力学的に
最高スペックを発揮するんだよ。分かったか？
悪党でも幸せになれるアンデッド祭り

「不死はゼナリス様の専売よ？
やる事と言ったら決まってるでしょう？」
《今のオレは強烈な怒りを覚えている。
浄化するのは大変ダゾ》
猫ぐるみ
NEKOGURUMI
??????
事件勃発アンデッド祭り

CONTENTS

COMBATANTS WILL BE DISPATCHED!

口絵・本文イラスト／カカオ・ランタン
口絵・本文デザイン／岩井美沙（バナナグローブスタジオ）

戦闘員、派遣します！３

暁　なつめ

角川スニーカー文庫

21549

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

CONTENTS

プロローグ

『と、いうわけだ六号。分かったかい？』
「ちっとも分かりません」
その日の夜、俺はモニター越しにわけの分からない事を説明された。
画面の相手は黒のリリス。
ちっとも理解を示さない俺に、リリスは困ったヤツだと言わんばかりに息を吐く。
『六号、君はアホだが小学生並みの知能はあるはずだ。もう一度言うよ？』
自称天才科学者の僕っ子は、やれやれと首を振り。
『戦闘員六号。君は現在、制裁対象になっている。強引なデストロイヤーの

転送により、君の悪行ポイントは大幅なマイナス状態だ。これにより、武装転送システムに制限を掛ける事にした』
「そこですよ、分からないのは。だって俺、こんな僻地で命懸けで同業者と戦ってるんスよ？　デストロイヤーは必要経費みたいなもんでしょう。むしろよくやったと、ボーナスの一つもくださいよ」
秘密結社キサラギが誇る、多脚型戦闘車両、通称デストロイヤー。
目の前の画面に映るのが作った、キサラギの制圧兵器。
魔王軍の幹部を撃破するにあたって、無理やりソイツを転送したのだが……。
『地球では現在も激戦が繰り広げられているんだ。本来なら君みたいな下っ端戦闘員の手も借りたいぐらいなのに、貴重な主力兵器を送ったんだよ？　なのに、商売敵の操る兵器に傷を負わされて[illegible]』

よ？　なのに商売敵の操る兵器に傷を負わされただなんて……！』
「そりゃしょうがないっスよ。アリスいわく、兵器のスペックは向こうの方が上だったらしいですから。製作者がポンコツだからデストロイヤーが傷を負ったんですよ」
『ポポポ、ポンコツ⁉　この僕がポンコツ⁉』
　日頃天才天才と持てはやされていたリリスにとって、ポンコツ呼ばわりは応えたらしい。
「スペックで劣っているにも拘わらず向こうの兵器をスクラップにしたんですから、むしろ褒めてくださいよ。まあ、そんなのはどうでもいいんです、問題は新しい指令の方です」
『ちっともどうでもよくないけど今は一旦置いておこう。新しい指令というと、アジトの建設の事だね』
　キサラギから出された新たな指令。

それは、この星に俺達の前線基地となる要塞を築く事。

「前回は侵略地の確保で今回はアジトの建設。ちょっと働かせ過ぎじゃないですかね。こっちは悪行ポイントの使用も止められてるんですよ？　重機も使えないのにどうやって建設するんスか」

『アジト建設に必要な物のみ、ポイントの使用を許可するよ。でもこれ以上のポイントのマイナスは認められない。物資が必要な場合は頑張って悪行に励みたまえ』

なるほど、武器の類いでなければいいのか。

なら、エロ本や娯楽品なんかもアジト建設には必要だと言い張り、送って貰おう。

『浅はかな君の行動は予想が付くよ。大人の本や漫画なんかは送らないよう言っとくからね？』

「楽しみの一つもないと、こっちに拠点構えて反乱起こしますよ」
『そんな事になったらアスタロトに出張ってもらうからね。ただでさえ最近イライラしてるんだから』
　リリスはなぜか楽しげにアスタロトの近況を語ってくるが。
「なんスか、アスタロト様は生理かなんかっスか？　俺からのプレゼントって言って、生理用品渡してやってください。そんで、クソ任務ばかり寄越さないでマシな待遇考えてくれって伝えといてください」
『き、君は本当に……。アスタロトがイライラしてるのは、ここしばらく誰かに会えないせいなんだけどね。……まあいい。戦闘員六号、君は現在悪行ポイントがマイナスだ。本来であれば制裁部隊がそちらに向かうところだが、僕が色々と手を回し、制裁は先送りにしておいた。今のうちに悪行を重ね、ちゃんとポイントを貯めたまえ』

ちゃんとス[illegible]ーを貯めたら？』
リリスはそう言って、クスリとイタズラっぽく笑みを浮かべると。
『これは貸しにしておくからね？』
最後にそう言い残し、モニターを切ろうと……。
「貸しはこっちの方が大きいですよ。大した説明もなく無理やりここに送ってくれた事、もちろん忘れてませんからね。地球に帰ったら泣くまで揉んでやりますから」
『…………えっ？』
「泣くまで揉んでやりますから」
『それでは戦闘員六号！　新アジトの建設は任せたよ！　また会える日を楽しみに』
「泣くまで揉んでやりま」
『本当にごめんなさい！　今度キチンと謝るから、お願い許して！』

一章

アンデッド・フェスティバル

1

秘密結社キサラギ、グレイス王国支部。

「トラ男さん、俺ヤベーっス。俺おかしいっス。なんかドキドキしてきたんですけど」

「お前は元からおかしいが、今のお前はおかしくねえにゃん。可愛(かわい)いもんは可愛い。それでいいじゃねえかにゃあ」

支部というのもおこがましい、郊外(こうがい)に買った家の中で、俺は怪人(かいじん)トラ男と

世界の真理に触れていた。
「だって、だって……！　コイツは男じゃないっスか！　なのに、なんでこんなにドキドキするんスか！」
「俺だって別に男の方が好きってわけじゃねえにゃあ。単に、可愛ければ些細な事は気にならねえってだけだにゃー」
「俺にとって性別は、些細な事じゃ済まないんスけど」
俺達の目の前では、無理やりメイド服を着せられたラッセルが、そんな会話を黙殺しながらせっせと窓を拭いていた。
——不幸な行き違いから友好国トリスとの戦争に突入し、その際に魔王軍四天王の一人、水のラッセルを捕らえたのがこないだの事だ。

当初は反抗的だったラッセルも今ではすっかり従順になり、その特性を活かして水の生成を担う事になった。
そして現在。
なぜかコイツは、トラ男の希望でキサラギのメイドとして働かされていた
——
俺とトラ男は這いつくばると、ラッセルのスカートの中身を下から見上げ。
「トラ男さんどう思います？　俺、メイド服に黒パンはＮＧじゃねえかと思うんスけど」
「バッカ、おめー分かってねえにゃあ。メイドさんってのはシスターに次ぐ神聖

な存在だろ。それが黒パンってのがいいんじゃねえか、ギャップや背徳感ってヤツだにゃー」
　なるほど、分からん。
「なんスかトラ男さん、難しい言葉使えば賢く見えるとでも思ってんスか？　よく分かんないんでもっと簡単に言ってくださいよ」
「これ以上ないぐらいバカにも分かるように言ったんだがにゃあ。なら、これなら分かるか？　おめえの後輩の戦闘員八号っているだろ。アイツ、非番の時はペットショップに入り浸ってるんだぜ。本当は飼いたいらしいが、ペットが死ぬと立ち直れないから飼えないそうだにゃあ」
　戦闘員八号というのは、俺と違って最新の改造手術まで施されたガチのエリート戦闘員。
　クソ美人でモデル体型だが、冷たい目をした取っつきにくい後輩だ。

「マジっスか、アイツ、普段クールビューティー気取ってるくせにそんな可愛らしい一面あるんスか。今度会ったらからかってやります」

「おう、そん時は俺も交ぜろにゃん。アイツはちいちゃくないから好みじゃねえが、真面目系クール美女が赤面するのは大好物だにゃあ。まあ、ギャップってのはそういう事だにゃー」

なるほど、ちょっとだけ分かった気がする。

俺達二人は、何の反応も見せないラッセルのスカートの裾を摘まみ、マジマジとそれを眺めながら。

「そう考えるとメイドに黒パン、有りって気もしてきますね」

「だろ？　メイドさんは白ってヤツもいるが、俺は断然黒派だにゃあ」

と、俺達が理解し合えたその時、部屋のドアが開けられた。

「家長、グリムが呼んでます。緊急事態だから、すぐにお城へ来て欲しいそう

「隊長、グリムが呼んでます。緊急事態だからすぐに城へ来て欲しいそうで……」

　現れたのはロゼだった。
　グリムが俺に一体何の用だろうといぶかしむも、肝心のロゼはラッセルのスカートを覗く俺達を見て固まっている。
　俺はスカートの裾を摘まみ上げたまま促した。
「あいつは一体なんだってんだ？　悪いけど今ちょっと忙しいんだ、後にしてくれ」
「ラッセルさんのパンツ覗く事の何がそんなに忙しいんですか!?　いや、そうじゃなくて！　ええ……!?　いや隊長、何してるんですか!?　トラ男さんも何してるんですか!?　そもそもラッセルさんは男なのに、なんでこんな大変な事になってるんですか!?」

混乱した様子のロゼが早口で捲し立てると、それまで黙々と窓拭きにいそしんでいたラッセルがため息を吐いた。

「……ボクだって好きでこんな格好してるわけじゃないよ。トラ男が、この服を着て仕事するなら解放を早めてくれるって言うからさ。……キミは確か、ボクと同じ戦闘キメラだろ？　人間って本当にバカだよね。特にここの連中はバカばっかりだ……」

　何か達観したようなラッセルに、

「そうは言ってもラッセルにゃん、毎晩俺の抱き枕になってる時は、毛皮が暑苦しいんだよって憎まれ口叩きながら、案外満更でもなさそうだにゃー」

「…………勝手に言ってろ。お、おい同族、その目はやめろよ！　違うぞ、抱き枕にされてるだけで変な関係にはなってないからな！　一線は越えてないから!!」

ドン引きのロゼの視線を浴びラッセルが慌てて言い訳する。
「トラ男さんは紳士っスね。もうとっくにアレな関係になってると思ってました」
「ちいちゃい子を泣かせるのは好きじゃねえからにゃあ。ラッセルにゃんがデレる時をジッと待つにゃん」
疲れた表情のラッセルは、ため息を吐きながら首を振る。
「そんな日は絶対に来ないから諦めてよ。……ね、ねえキミ、ボク達は同族なんだからその目はやめようよ。好きでこんな目に遭ってるわけじゃないんだ、その反応は傷付くんだけど……。それより何か用があったんじゃなかったの？」
ラッセルの言葉にロゼはハッと我に返ると、
「そ、そうですよ！　ラッセルさんの特殊な趣味に動揺してる場合じゃない

んです！」

「待てよ同族、特殊な趣味ってなんだよ！」

涙目で食ってかかるラッセルを押しのけながら、ロゼが真面目な顔で言ってきた。

「グリムが、ぬいぐるみを買ってきて欲しいそうです」

「……………」

俺はラッセルのスカートをめくる作業を続行した。

2

「隊長って本当に女の人の方が好きなんですよね？　ラッセルさんみたいに

特殊な趣味は無いんですよね？」
「さっきからしつこいぞ、アレは一時の気の迷いだ。あんまり疑うのならお前の体で証明してやってもいいんだからな」
城へと向かう道すがら。
疑惑の目を向けられた俺は、ロゼに抗戦の構えを見せた。
「わ、分かりました、信じます。信じますから手の動きを止めてください」
俺の構えにジリジリと後ずさりロゼは警戒を露わにする。
威嚇の構えを解いた俺は、ふと思い出した疑問を口にした。
「そういやお前、ラッセルに自分の素性を聞いてないらしいな。あれだけ自分が何者かを調べてたクセに、なんで？」
その言葉にロゼはピクリと眉を動かすと……、

「その……。急に同族が現れて、ちょっとだけ怖くなったっていうか……。ラッセルさんは凄（すご）く人間を憎んでるじゃないですか？　だから、あたしも自分の素性を知っちゃうと、今までと同じ生活は出来るのかなって考えちゃって……」

　そう言って、不安そうな顔を俯（うつむ）かせ……。

「やっべえ、あそこの屋台見ろよ！　モケモケだ！　モケモケの串焼（くしや）きが売ってるぞ！」

「聞いてくださいよぉ！　今凄く真面目な話をしてるのに！　しかも、隊長から話を振ったクセに!!」

　なんだよもう、構ってちゃんかよ。

「俺、最近モケモケにハマってるんだよ。アイツ見てくれはでっけえザリガニのクセに、えらい美味（うま）いんだもんよ。しかも高級食材らしいじゃん」

「隊長はついこないだまでモケモケの事、友達だの何だの言ってたじゃないで

すか！　この短期間で一体何があったんですか⁉」
　ロゼがよく分からない事を言ってくる。
「なんで俺がザリガニなんかと友情築かなきゃならないんだ。お前、たまにおかしな事を口走るよな。おっちゃん、モケ串二つ。タレと塩の二種類な」
「その言葉はそっくりそのまま返しますよ！　忘れたんですか⁉　忘れたんですね⁉　隊長ってどんな記憶力してるんですか⁉」
　やっぱりよく分からない事を言い募るロゼに、俺は屋台で買った二本の串焼きを突き出しながら、
「タレと塩のどっちがいい？」
「タレで。……ごまかされませんよ？　あたしはそんなに安くないですからね？　モケ串の一本ぐらいじゃ――」
――二時間後。

——二時間後

俺達が城の訓練場に着くと、そこでずっと待っていたらしいグリムが声を上げた。

「遅ーい！　緊急事態だから急いでって言ったじゃない！　ぬいぐるみは⁉　ねえ、ぬいぐるみは買ってきた⁉」

一体何の儀式なのか、グリムは訓練場で暴れる人型の土くれに、ペタペタと札のような物を貼り付けていた。

いやいや、ええ……。

「お前、何それ？　なんかウネウネ動いてるけど……」

「悪霊よ！　野放しになんてしておけないから、こうして土くれで作った依り代に閉じ込めてるのよ！　それより隊長、ぬいぐるみは⁉」

いつになく必死なグリムの言葉に、俺は懐からおもむろにソレを取り出し……、

「秘密結社キサラギのマスコット、八つ裂きミート君だ。背中のボタンを押すと喋るんだぞ」

『コンニチハ、ボクミート！　ヒーローハヤツザキダ！』

「気持ち悪っ！　なに、この愛らしさの欠片もない人形は！　私が買ってきて欲しかったのはぬいぐるみ！　悪霊を詰め込んでも怖くないよう、可愛いのがいいの！」

そうは言っても足下で蠢いている物体を見るに、ぬいぐるみの中にコレが入っても怖さが倍増しそうな気がする。

「隊長、グリムが要らないって言うのなら、ミート君はあたしにください。よく見ると結構可愛いです」

「この子一体どういう感性してるの!?　……ねえロゼ、あなた口の周りにタレが付いてるけど何してたの?」
　俺からミート君を受け取ったロゼは、口元を隠すようにミート君を抱き上げる。
『コンニチハ、ボクミート!　イキオクレハヤツザキダ!』
「ロゼ、その人形寄越しなさい!　セリフに悪意があり過ぎるでしょう!　あとなんでボタン押したのよ!!」
　と、その時だった。
　ミート君を取り上げようとするグリムの足下で、土人形がブルブルと震え始める。
「なあ。コイツ、なんだか様子がおかしくねえ?」
「えっ?　……ああっ!?　マズい!」

焦りの声を上げながらグリムが俺の背中に回る。
それと同時に土人形が、乾いた破裂音と共に爆散した。
その直撃を受けた俺とロゼは、土まみれになりながら。

「……ロゼ、グリムを取り押さえろ」
『コンニチハ、ボクミート！　ムノウナブカハヤツザキダ！』
「隊長、まずは私の話を聞いて？　ロゼも落ち着きましょう？　二人ががかりは反則よ？」
　グリムはにじり寄る俺達に怯えた視線を向けながら。
「もうすぐアンデッド祭りが始まるのよ？　私がいないと大変な事になるんだからね⁉　隊長ごめんなさい、お願い待ってえええええええ！」
《悪行ポイントが加算されます》

「――そういえばこないだもそんな事言ってたな。アンデッド祭りがどうたらこうたら」

　ひとしきり制裁を行い溜飲を下げた俺は、未だグスグスと鼻を鳴らしているグリムの隣で、ロゼに説明を受けていた。

　魔法が当たり前にあるこの星では、アンデッドという連中も存在する。

「アンデッド祭りは、毎年この時季になると行われる、亡くなったご先祖様をお迎えする儀式ですよ。お祭りになると美味しい物がタダでたくさん食べられるので、あたしは好きです」

「なるほど、俺の国で言うお盆みたいなもんか」

　日本のお盆と違うのは、ここでは本当に先祖の霊が帰ってくるところだ。

　しかもその霊達は、依り代という物を用意しないとそこらの死体に取り付いて、街中を闊歩するらしい。

「グスッ……。そ、それで、不死と災いを司るゼナリス様の大司教である私が、毎年アンデッド祭りを取り仕切っているの……。さっき土人形が爆発したのは、仮の依り代だったから耐えられなかったのよ」

「……まあ、なんとなく事情は分かった。それで、取り憑いてた悪霊とやらはどうなったんだ？　俺はもう帰っていいのか？」

　グリムは俺の言葉に、真剣な顔で首を振る。

「アンデッド祭りまで後一週間。それまでに帰省するご先祖様達の依り代を用意しなきゃいけないの。隊長には、依り代人形の材料集めを手伝って欲しいのよ」

「めんど臭そうだから遠慮しとく。ロゼ、串焼きだけじゃ足りないだろ。帰りに何か食っていこうぜ。食べたい物のリクエストはあるか？」

『コンニチハ、ボクミート！　セントウインナラニクヲクエ！』

「お願いよおおおおおおお！　手伝ってくれるのなら、おねーさんが色々とサービスしてあげるから！」

その場を去ろうとする俺の腰に、グリムが泣きながら縋り付く。

「サービスも何も、軽いセクハラぐらいならいつも挨拶代わりにやってるし……」

「そうよ、さっきだって私のスカートまくり上げて色々やってくれたじゃない！　手伝わないって言うのなら責任取って養いなさいよ！」

逆ギレ気味に開き直ったグリムに向けて、

「仕方ねえなあ。じゃあサービスとやらを期待してるからな？　俺達はもういい大人だって事を理解しろよ。いつかのスノウみたいにお礼のキスだとかし

よこにい事言い出したら、象くくらいじゃ済まないからな」

「……ねえ隊長、やっぱりちょっと考えさせて」

3

アジトに戻った俺は、アンデッド祭りを手伝う事をアリスに報告。

「つーわけで、変なお祭りの手伝いしてくる」

「……その祭りを妨害してえな。何がアンデッドだバカにしやがって、アンドロイドの自分に喧嘩売ってんのか」

話を聞き終わったアリスがアンデッドというワードに不快を示す。

現代科学の結晶であるコイツとしては、非科学的な現象全般が許せないらしい。

[illegible]

「おい阿呆、お前はただでさえ騙されやすいアホなんだから、ゲームのヘラン
に惑わされるなよ」
「逆に、何でお前は頑なに超常現象を信用しないのかを聞きたいんだけ
ど」
　と、相変わらず口の悪いアリスに、俺はさっきから気になっていた事を尋
ねてみた。
「……で、なんでコイツがここに居るんだ？」
　椅子に腰掛けるアリスの横で、額に汗を浮かべたスノウがせっせと何かを
作っていた。
「魔剣のローンの支払いで本格的に金が無くなったらしくてな。真剣な顔で
体を売ろうか悩んでいたから、借金を肩代わりして弾丸作りの内職させて

るんだ」
「俺はどっからツッコめばいいんだよ」
ユニコーンを騎馬にしている騎士のくせに、体を売ろうとした事か？　子供にしか見えないアリスに借金した事、もしくは素人に火薬なんて扱わせている事か？
「アリス、出来たぞ！　また一つ弾が出来た！」
「借金があるウチはさんを付けろと言ったろ」
「アリスさん、出来ました！」
「よし、まだ作りが甘いが上手くなってきたな。その調子だ」
指先を火薬で黒くして、スノウが屈託のない笑顔で言ってくる。
弾を受け取ったアリスに褒められ、スノウは実に嬉しそうだ。
ちょっと前までは近衛騎士団の隊長だったのに、今では子供に敬語を使

ちょっと前までは近衛騎士団の隊長だったのに、今では子供に荷詰を使い、弾作りの内職をするまでに落ちぶれたのか。
「なあ、コイツも一応は俺の部下なんだ。こんな憐れな姿見たくねぇよ……」
「お前の悪行ポイントはマイナスなんだ。ショットガンの弾だって武装にカテゴリーされてんだから、現地で製作するしかねぇ」
　スノウは囁き合う俺達に目もくれず、弾を生成する機具から次弾を取り出す。
「アリスさん、出来ました！　今度はなかなかの自信作です！」
「おっ、良いじゃないか。この品質を保ったままもっと早く作れれば、時給を上げてやるからな」

「やった！」

無邪気に喜ぶスノウの姿に、俺は目頭を熱くする。

「……？　なんだ六号、いやらしい目で私を見るな。お触りしたら金を取るぞ」

…………同情の感情はあんまり湧かなかった。

4

その日の夜。

「さあ隊長、準備はいいかしら？　ほらほら、ロゼもしっかり車椅子押して！」

やたらとテンションの高いグリムに、俺はロゼと共に呼び出されていた。

「なあ、今から人形の材料を集めるんだよな？」

「……なお、今から人形の材料を集めるんだよな？」

「そうよ？　……ほらロゼ、もっと速くよ！　風になるの！」

「危ないよー、飛ばすとグリムが落ちちゃうよー。それにあたし、晩ご飯をお腹(なか)いっぱい食べたから、だんだん眠(ねむ)くなってきて……」

ロゼがしょぼしょぼした声で訴(うった)える。

「これだからお子様は！　夜はまだ始まったばかりでしょう？　ほら、大人の私が素敵(すてき)なナイトライフを教えてあげるわ！」

カラカラと車椅子を押されながら、グリムが声高(こわだか)に宣言した。

「いや、ナイトライフはいいんだけどさ。なんで街の外に出る必要があるんだ？　材料集めに行くんだよな？」

「そうよ？　人形の材料を取りに行くって言ってるじゃない」

……………………。

「ちなみに、材料って何を使うんだ？」

「魔の大森林の植物よ」
　俺とロゼは二人揃ってUターンした。
「ねえ待って！　か弱い乙女が一人で大森林に行ったらどうなると思ってるの!?　あの森には蛮族だっているんだから、美味しそうな私を見たらどうなる事やら！　隊長は可愛い部下が傷物にされてもいいって言うの!?」
「そんなんだからいつまで経ってもモテないんだよ。もうその辺の蛮族でちょちょっと済ませて大人になれよ。結婚願望の強い行き遅れの生娘なんて地雷じゃん」
　俺の適当な対応にグリムの眉が吊り上がる。
「何ですって、幾ら隊長でも許さないわよ！　モテないわけじゃないんですうー！　私はゼナリスの大司教！　いい？　司教っていうのはね、清い体のままじゃないと……」

「おっ、あそこになんか飛び跳ねてるぞ。ロゼ、捕まえて食ってみろよ」
「アレはミピョコピョコです。あんなの食べたら口の中で爆発しますよ？」
「聞きなさいよおおおおおおおおお！」
　車椅子の上でグリムが暴れるが、既に街の外なのだから静かにして欲しい。
「それにしても隊長、この暗いのによくあんなの見付けますね」
「俺は改造手術で簡単な暗視能力が付いてるからな。そういうお前もやるじゃないか。俺にはなんかが飛び跳ねてるぐらいにしか見えないからな」
　グリムが構って欲しいのか、俺の背中をペシペシと叩きながら、
「ねえ隊長、私も暗視が出来るわよ！　なにせ不死を司るゼナリス様は夜を支配するお方ですもの、大司教である私にも加護があるの！」

「すごいね」

「どうして私だけおざなりなのよ！　あんまり雑だと呪うわよ！」

　と、遠く暗闇の中で何かが大きく飛び跳ねる。

「また何か飛んだけどあれもミピョコピョコか？」

「アレはムピョコピョコですよ！　捕らえて煮ましょう！」

「ピョコピョコピョコピョコピョコうるさいわよ！　二人とも、話を聞いてぇ！」

　追いかけようとするロゼを引き留め、グリムが大声で泣き喚く。

「もうアイツ捕まえて帰ろうぜ。そんで、アジトで鍋パーティーをやろう。大体、もう夜も遅いしさ」

「夜じゃないと意味が無いのよ、月が出ている夜にしか咲かない花が要るの！　その花は死者が正式に地上に留まるための許可証になるわ。帰ってきた霊達を悪霊にしないため、絶対に必要な物なのよ！」

ロゼの尻尾を引っ張りながらグリムが必死に訴えかける。
「ねえ隊長、お願いだから帰らないで！　依り代がないと大変な事になるわよ!?　この国の人達だって困るの、日頃の行いが悪い隊長が善い事するチャンスじゃない！」
「……はあ。グリムがここまで言うんですから助けてあげましょう？　確かに隊長の日頃の行いを振り返る、良い機会ですし」
　とうとう折れたらしいロゼがそう言ってため息を……。
「お前らに一つ言っておくが、俺がこんな性格になったのも親の教育方針のせいなんだぞ。子供は親を選べないんだ。俺だって好きでこうなったわけじゃない」
　俺の言葉にグリムとロゼが、ハッとする。
「ご、ごめんなさい。隊長も、苦労してたんですね……」

自らも育ての親の爺さんに苦労させられた事を思い出したのか、ロゼが顔を俯かせた。
「俺の親は昔から、人の嫌がる事は進んでやれってよく言っていてな。俺はそれに従って生きてるだけだ」
「親御さんに謝ってください、解釈が間違ってますよ！」
食って掛かるロゼを聞き流していると、グリムが何かを取り出した。
誰の物かは知らないが、大切に使い込まれたであろう短剣だ。
コイツが武器を振るえるとも思えないので、呪いを掛ける際に必要となる何らかの思い出の品だろう。
「……ねえ隊長、覚えてる？　隣国のトリスの王子が、私の呪いで不能になってしまった事を……」
「ねえグリム、ちょっと待って。あたしそれ聞いてないよ。知らない間になんて

事してんの？」
　ロゼにユサユサと揺さぶられながら、グリムが不敵な笑みを浮かべてくる。
「私が穏便に済ませている間に手伝う事をオススメするわ。さもなくばどうなるかは分かるわね……？」
　さすがは邪神崇拝者、考える事がえげつないな。
　だが今回は相手が悪い。
「悪の組織の構成員を脅すとは良い度胸だ。だが俺達は、仕事柄舐められるわけにはいかないんでな。脅しには脅しで対抗するぞ」
「隊長、悪の組織って何ですか!?　あたし、それ聞いてないです。あたしって確か、勝手に戦闘員に認定されてましたよね！」
　ユサユサと揺さぶってくるロゼを押しのけて、俺はグリムに身構えた。

「お前がその呪いを掛けたなら、泣いて謝って呪いを解くまでセクハラする
砂漠を横断してる時、瀕死のお前にやった事以上のすごいヤツだ」
「ねえ隊長、どういう事よ。私、砂漠で寝てる間に一体何されたの？　何を
したのか説明なさいな！」

5

グレイス王国の傍に広がる大森林。
謎の蛮族や魔獣がひしめき、この星の連中では開拓もままならない魔境
である。
　ひとしきり争った後大森林に着いた俺達は、目当ての花を探していた。
「二人とも、あの白い花がそうよ。か弱い私はここで待ってるからお願いね」
「舐めんな」

森の前でグリムがふざけた事を言い出した。
「仕方ないじゃない、車椅子じゃ森の中に入れないし」
「前々から思ってたけど、お前歩けるんだから車椅子に乗る必要ないだろ。靴が履けなくても何かあるだろ？」
コイツが靴を履けないのは呪いの反動のせいらしいのだが、どうしてそんな呪いを掛けようとしたのか気になるところだ。
「車椅子って色々と便利なのよ。自分で漕がなくても誰かに押して貰えて楽ちんだし、それにパッと見た感じ、儚気な病弱美女の印象を与えられるでしょう？」
「お前、本当に足を悪くしてる人に怒られるからな」
呆れながら言う俺にロゼがくいくいと袖を引く。

「隊長、グリムはこのままでいいですよ。昼間は大体寝てるから移動が面倒（めんどう）臭（くさ）いですし、それに目を離（はな）すとちょこちょこ死ぬので、こっちの方が運びやすいです」
「いつも思うんだけど、私が死んでる時の扱（あつか）い、もうちょっと良くならないかしら」

俺とロゼは月明かりの下、グリムの指定した花を摘（つ）んで回った。
まだ森の入り口だというのに時折何かの鳴き声が聞こえてくる。
とっとと作業を終え、早く帰って酒でも飲みたいところだ。
「おいグリム、高い店じゃなくてもいいけど、綺麗（きれい）な姉ちゃんがいるところを頼（たの）むな」

「……？　なに？　一体何の話？」
「あたしは安くてもいいから量が食べられるお店がいいです」
「二人とも何言ってるの!?　ちょっと待って、ひょっとして仕事が終わったら奢(おご)れって言うの!?　これって国から頼まれた仕事なんだからね！」

——と、その時だった。
グリムの大声を聞き付けたのか、ズルズルという這(は)い寄る音が聞こえてきたのは。
辺りを取り囲む気配に気付いたのか、ロゼとグリムが息を呑(の)む。
「まったく、お前ってやつはいつも足を引っ張ってくれやがる。でも安心しろよ、キサラギは仲間を見捨てない。それにダメな部下の尻(しり)ぬぐいは隊長の仕事だからな」

「ちょっと待ちなさいな！　確かに私が騒いだせいでこうなったのかもしれないけど！」
「グリムの後始末をするのにはもう慣れましたよ。ねえグリム、あたし焼き肉超盛り定食五人前がいい」
「分かったわよ、悪かったわよ、いつも守ってくれたり、生き返らせてくれたりしてありがとうね！」
やけくそになったグリムを尻目に、俺は闇夜に目を凝らすと……。
「敵性生物は人型、数は六体だ。俺が三体受け持つから、残りはお前等に任せたぞ！」
腰の後ろからナイフを引き抜き身構える。
ロゼがそんな俺の隣に立つと、拳を握って腰を落とし。
「了解です、二体までこちらが受け持ちます！　残り[illegible]任せてください

「了解です！　二体はあたしが受け持ちます！　戦う事なら任せてください！」

さすがは戦闘キメラ、こういう時には頼りがいのあるヤツだ。

なら残りの一体は……、

「ええ!?　私は直接的な戦闘力は無いんだから、頭数に入れられると困るんだけど！」

……。

「……なんだよもう！　じゃあいいよ、俺が四体受け持つよ！　グリム、やっぱお前は使えねえな！」

「使えないって言わないで！　強大な私の力はもっとここぞという時に使うべきなの！　その辺の雑魚を相手にホイホイと……」

グリムが何かを言いかける中、鼻をヒクつかせていたロゼが顔色を変えた。

ロゼの様子に疑問を覚えるも、俺は小型のライトで敵性生物を照らしてやる。

暗視能力があるとはいえ、明るいに越したことは無い。

こんな所をウロつくのはどんなヤツか拝もうと……。

「アバアアアアアアアアアアアアアア！」

「あいやああああああああああああああ！」

照らし出されたのは腐乱死体だった。

威嚇の声を発した腐乱死体は、思わず悲鳴を上げた俺に向け、虚ろな目付きでズルズルと這い寄ってくる。

「ゾンビ!?　なあこれゾンビ!?　ゾンビじゃん！　アメリカ人が大好きなゾンビじゃん！」

　悪魔やゴーストのいる世界だからゾンビがいてもおかしくはない。

　おかしくはないが……！

「アメリカ人がなんなのかは分かりませんが、落ち着いてください隊長！」

「強さの問題じゃねえ、見た目の問題だよ！　落ち着け、俺はキサラギのエリート戦闘員だ、ここ、怖くなんてねえぞ！　仏さんには申し訳ないが、火炎放射器で火葬させてもらう！」

　虚ろな目付きの死体を前に、火炎放射器を取り寄せるため、端末を……！

《現在武装の転送は停止されております》

　ああああああああ！

「ロゼ、交代！　交代!!　ゾンビの相手は俺じゃ無理、代わって代わって！」

「たた、隊長、押さないでくださいよ！　あ、あたしもゾンビは本当苦手で……！　無駄(むだ)に鼻が良いから、この臭(にお)いだけで倒(たお)れそうで……！」

……と、その時。

「待ちなさい。ここは私に任せてもらうわ」

いつになく真剣な表情のグリムが、車椅子から降りて立ち上がった。

「おいグリム、どうしたんだ。雰囲気(ふんいき)出してみてもお前の強さは変わらないと思うぞ。毎度毎度体を張ったギャグは必要ないからな」

「隊長、グリムの数少ない見せ場ですから邪魔しちゃダメですよ。たまの出番が来たから張り切ってるんです」

「おだまり！　二人とも呪(のろ)われたくなかったら見てなさい！」

そして土の上を裸足(はだし)のままで歩きながら、ふとこちらに振り向くと、寂(さみ)しげな微笑(びしょう)を浮(う)かべ……。

「隊長にはまだ言ってなかったわね。……私。……私ね？　半分、人間を辞(や)めてるの。この身も彼等と同じ、アンデッドみたいなものなのよ……」
「ほーん。だから頭が取れてもひょこっと生えてきたんだな」
「結構重めの告白なんだからもっと大事に受け止めて！　あと、私の頭をトカゲのしっぽみたく言わないで！　とにかく、彼らは私に任せてもらうわ！」
　プンプンと怒(おこ)りながらもグリムはゾンビ達の下(もと)へと近づいていく。
　そして……。
「こんばんは。今日はとてもいい夜ね」
　腐乱死体達を相手に、グリムは優(やさ)しく微笑(ほほえ)みながら、まるで親しい友人に対するかのように語りかける。
……そういえばグリムが崇(あが)めるゼナリスとやらは、不死を司(つかさど)る邪神だと

か。
「隊長、もう大丈夫ですよ。グリムはアンデッドとお友達なんです。今回もきっと説得してくれます」
「ほんとかよ？　アイツが役に立つだなんて信じられないんだけど」
　俺達の会話をよそに、穏やかな笑みを浮かべながら近付いて行ったグリムは……。
「オアッ！」
「はぐうっ⁉」
　一体のゾンビに横っ面を引っ叩かれた。
「あれっ⁉　グ、グリム、どうしたの⁉　あっ！　隊長、その目はやめてくださいよ、あたしは嘘なんて吐きませんから！　いつもは上手く説得してくれるんですよ、本当です！　こんなグリムを見るのは初めてで……」

俺の目にはいつも通りのグリムにしか見えないのだが。
「ま、待って!? 私はあなた達の敵じゃないわ、アンデッドのアイドル、グリムさんよ!? あいたっ! 痛い! あんた達、ゼナリスの大司教になんて事……た、隊長! 隊長、ロゼ、助けて!」
自称アンデッドのアイドルが、ゾンビの群れにたかられながらバシバシと殴られ始める。
「とりあえずアレ焼いとけよ。お前炎を吐けるじゃん」
「ええー……。ゾンビは焼くと、本当に酷い臭いがするんですけど……」
「可憐な乙女が穢れた男達に襲われてるのよ、早く助けなさいよ!」
助けたいのはやまやまなのだが、ゾンビに囲まれているため銃器を使えばグリムにも当たる。
ロゼの炎も広範囲を焼くわけで、このまま攻撃を仕掛けると七体分の焼

死体が出来あがるだけだろう。
「なあ、俺素手であいつら殴りたくねえよ。その辺の棒きれ拾ってくれ」
「分かりました。臭いで近付くのが困難なので、隊長に任せていいですか？　……あっ、変な形のキノコ見っけ。持って帰って煮て食べようっと」
「もういいわよ、自分でなんとかしてみせるから！　刮目なさい、大司教の本気を見せてあげるわ。偉大なるゼナリス様！　この場に満ちた不死の加護を取り払い、あるべき形に戻したまえ！」
　それはこの星に来てから見た中で、最も魔法らしい魔法だった。
　地面から青白い魔法陣が現れると、そこから天に向かって光が奔る。
　一瞬荘厳な何かの気配を感じたかと思えば、それが四散し静まりかえった。
　そして、それまでグリムを袋叩きにしていたゾンビ達が、揃ってパタリと

そして、それまでノームを袋叩きにしていたゾンビ達が、揃ってピタリと動きを止めて……。

操(あやつ)り人形の糸が切れたかのように、七体のアンデッドがその場に倒れた。

「……おい、こいつアンデッドのくせに自殺したぞ」

「……これ、いつもの儀式(ぎしき)で治るのかなあ……？」

――街から少し離(はな)れた場所に、怪(あや)しげな祭壇(さいだん)が置かれた洞窟(どうくつ)がある。

グリムを蘇生(そせい)させるため、俺とロゼはその洞窟にやって来ていた。

「今回は死に方が死に方ですからね。お供えはたくさん持ってきましたが、これで足りるかなあ……」

数々の思い出の品を前に、ロゼが不安そうな表情を浮かべた。
「仕えてる神様の加護を自分で解いたもんな。俺がその邪神（じゃしん）ならこのまま見捨てて無かった事にするぞ」
「グリムが今までバカな事に力を使っても赦（ゆる）されてきたんです。た、多分今回も大丈夫ですよ……」
言葉とは裏腹に、その声には自信が無さそうだ。
洞窟内の空いた中央部分からは月の光が射（さ）し込み、グリムの体を照らし出す。
それと同時に供えられた品々が光に覆（おお）われ消えていった。
「隊長、やっぱりお供えが足りません。グリムが酔（よ）っ払うといつも自慢（じまん）げに見せてきた、子供の頃（ころ）に幼馴染（おさななじみ）から貰（もら）ったっていう、ラブレターまで捧（ささ）げたのに……」

「しゃあない、俺もなんか捧げるか……」

財布の中に入っていた、ギザ十や外国の硬貨、大当たりした時の記念に取っておいたパチンコ玉なんかを置いていく。

それらが光に覆われ消え去ると、グリムの体がビクンと大きく脈動した。

「あっ、なんとかいけそうですね」

「……いや、なんか様子がおかしくないか？」

復活の兆しが見えたのに、目を覚ます気配がない。

「ゼナリス様の名を騙る……不届き者……私は敬虔な信徒にして……」

何かの夢でも見てるのか、グリムがうなされ身悶える。

「こいつ、邪神に怒られてるんじゃないのか？」

「……グリムがバカな死に方をした後は、こんな事がたまにあるんです——」

「……」

6

「それじゃ隊長、あたしはグリムを兵舎に運んでおきます。しばらく復活しないと思うので、明日（あした）からは隊長を手伝いますね」
「おう、頼（たの）むよ。その女が復活したらたっぷり奢（おご）ってもらおうぜ」
白い花を背負ったロゼは、グリムを乗せた車椅子（くるまいす）を押して街の中に消えていった。
ロゼを見送った俺は、その足でアジトへと……。
「……誰（だれ）もいないな」
アジトへと帰る事なく。
辺りを念入りに見回すと、気配を殺して城へと向かった——

「――今年のアンデッド祭りは例年より規模がデカそうだなー」

「魔王軍との戦いが激しかったからな。それより聞いたか？　ティリス様の噂。難しい顔をして、雨を降らせるアーティファクトの前で……」

おそらくは夜勤の者なのだろう。

城の正門の前では二人の兵士が暇潰しがてらに世間話に興じていた。

城壁を回り込み、見張りから見えない位置へと移動する。

城の中に入るのに、何も正門から行く必要はない。

城をぐるりと取り囲む、外壁を乗り越えればいいだけだ。

携帯型のくい打ち機を壁に当て、その上からソッと布を被せる。

完全に音を殺せるとは思わないが、気安め程度にでもなればいい。

外壁にくいを打ち込むと、パシュンという音が鳴る。

だが世間話に夢中な二人はその音には気付かなかったようだ。
打ち込まれたくいを足場に城の外壁を乗り越える。
この先は中庭だ。
確かここの庭には犬が放し飼いにされていた。
だが犬対策なら完璧(かんぺき)だ。
怪人(かいじん)トラ男に頼み込み、『変なヤツなのは知ってたけどよ、お前がここまでのド変態だとは思わなかったわ』と、語尾(ごび)のにゃんを忘れるほどに引かれてまで手に入れた物がある。
瓶(びん)に入ったソレを取り出し振(ふ)り撒(ま)くと……。
「キャンキャン!」
「ヒャン!　ヒャン!」
それほど遠くない所から、犬達の怯(おび)えた声が聞こえてくる。

振り撒いたのはトラ男のオシッコだ。
鼻の良い犬達は、強者の臭いを感じ取り近付く事が出来ないようだ。
俺は犬の警戒網をくぐり抜けると、最後の関門へとたどり着く。
城の最上階へ向かうには、城の壁をよじ登るのが確実だ。
当然ここでもくい打ち機。
俺は周囲を見回すと、くい打ち機を壁に当て――！

――音を立てないように気を付けながら天井部分の板を外し、そっと絨毯の上に降り立った。
幸いな事に高級そうな絨毯が足音を上手く消してくれる。
目的の場所にたどり着いた俺は、久しぶりに高難易度の任務をこなせた事に昂ぶっていた。
《悪行ポイントが大量に加算されます》

ミッションが上手くいった証(あかし)だろうか。
通常とは違(ちが)う、悪行ポイントが『大量に』加算されますのアナウンス。
この猛(たけ)りを発散したいところだが、大変都合が良い事に、目の前には丁度いい相手がいる。

「ん……」
薄暗(うすぐら)い部屋の中、小さな吐息(といき)が漏(も)れ聞こえる。
吐息を漏らしたその人は、この国の王女、ティリスである。
ここはティリスの部屋の中。
深く眠(ねむ)るティリスの前で、俺はおもむろに戦闘(せんとう)服を脱(ぬ)ぎだした。
起こさないように注意を払い、音を立てずに装備を外す。
心臓の鼓動(こどう)が速くなる。

激しく脈打つ胸の鼓動でティリスが起きないかと心配になるが、穏（おだ）やかな吐息の様子から起きる気配は見られない。

あまりにも無防備なティリスの姿に俺は思わずほくそ笑（え）む。

戦闘服や装備を外して身軽になると、俺はティリスの寝顔（ねがお）を見ながら

――

眠っているティリスの横で、スクワットを開始した。

7

ティリスの部屋でいい汗をかき、スニーキングミッションを終えアジトに帰る。

するとこんな時間にも拘わらず、スノウが寝泊まりしている作業部屋は未だに光が灯っていた。

「あいつ、まだ働いてるのか。金に汚いクソ女かと思ってたけど、案外頑張るじゃないか」

そんな俺の呟きに答えるように、背後から聞き慣れた声が掛けられた。

「六号、帰ってきたのか。スノウはバカだが分かりやすくていいぞ。金で動くヤツはなんだかんだで信用できる。誠意だの真心だの正義だのを謳うヤツよ

ツはなんだかんだで信用できる。誠意だの真心だの正義だのを謳うヤツは現実が見えていないのが多いからな」
「お前、身も蓋（ふた）もないなあ……」
　さすがは悪の組織のアンドロイドだ、人の心ってもんは信用に値（あたい）しないらしい。
　こんな夜遅（よるおそ）くに一体どこで何を買ってきたのか、アリスは大きな袋（ふくろ）を抱（かか）えている。
「明日からは防衛能力を持つ本格的な要塞（ようさい）建設に入るからな。計画は今のところ順調だ。要塞が出来たらいよいよ惑星（わくせい）の侵略（しんりゃく）開始だ。気合入れろよ、相棒」
　いつになく上機嫌（じょうきげん）のアリスが赤く輝（かがや）く窓を眺（なが）め、俺に発破を掛けてくる。

ずっと平の戦闘員だった俺だが、これが成功すれば要塞持ちか。
悪の組織に所属している者にとって、敵を待ち構える施設を持つのは憧れだ。
この星の同業者も塔に引き籠もっていたし、この想いはどこでも同じなのかもしれない。
本格的な要塞を持てれば、俺も中ボスと呼ばれ一目置かれる事になる。
「そうなるとこの家ともお別れかぁ……。この星で最初に手に入れたアジトだけに、感慨深いなぁ……」
「まあ、ちっと惜しいが維持するにも金が掛かる。買い叩かれるだろうが売り払っちまおう。そして、難攻不落の要塞を作るぞ」
俺達が明日から始まる本格的な侵略計画に思いを馳せていると――

『お元気ですか？』

　そちらは変わりないですか？
　あなたは昔から無茶をするから心配が絶えません。
　アリスからの報告では、そちらは大変過酷な世界だと聞いています。
　本当は大量の兵器を支援に回してあげたいけれど、ヒーローの本場アメリカで、第二次反抗作戦が始まりそれも難しいです。
　現地人が食べて一見大丈夫そうに見える物でも、地球人にとっては毒となる食べ物があるかもしれません。
　何でも口に入れたりせず、食べる前にはアリスに相談するようにしてください。
　くれぐれも体を大事に。
　あなたの帰還をお祈りしています。

アスタロトより

　ＰＳ：アリスからの報告書に、メイド型キメラが増えたと書いてあったけれど、変な女に騙されないようにしてください。
　あと、以前から思っていましたがやはり女性隊員が多すぎな気がしま——

二章

開拓せよ！

1

アジトを失った俺達は、前回トリスからぶんどった、大森林に隣接するキサラギの領土にテントを張って今夜の寝床を作っていた。

本当は宿屋か王城にでも泊めてもらいたいとこなのだが、ここ最近の俺達の悪評のせいでどこもかしこも断られたのだ。

そして……。

「よし、それじゃあ言い訳を聞こうじゃないか」

仮設アジトのど真ん中。
地面の上で正座させられたスノウの前で、アリスが腕を組んで尋問していた。
「確かに私は火薬を片づけないまま外に出てしまった。新しく買ったフレイムザッパー二世を、職場にまで持ち込んだ事も謝る！　だがアリス、聞いてくれ！」
「借金返し終わるまで、自分の事はなんて呼ぶんだ？」
スノウは下唇を噛みながら、
「……アリスさんです」
「よし。次に呼び方を間違えたなら、六号並みの頭だと認定するからな」
「そ、それだけは許してくれ！」
おい。
「スノウさんよう、まだ随分と余裕があるみたいだなあ……？　俺だってく

ランクさんよお、まだ随分と余裕があるみたいだなあ……？　俺だってリ薬を扱う時は細心の注意を払って作業するぞ。俺達の血と汗と涙の結晶を吹き飛ばしておいて、その態度はどうなんだ？　あーん？」
「あのアジトを買う際に、お前は金出してねえじゃねえか」
アリスがツッコんでくるが今はスルーだ。
慣れない正座がキツいのか、プルプルと膝を震えさせているスノウに。
「おかげで今夜はキャンプだぞ？　秘密結社キサラギ、グレイス支部長である俺がテント暮らしだよ！　部下のお前が屋根のある家で寝て、俺は野外でテントだよ！　オラッ、責任取れ！　具体的には俺をお前の家で寝泊まりさせろ！　そんで体で接待しろよ！」
「お前、責任って言葉が嫌いなんじゃなかったか」
一々ツッコんでくるアリスがうるさい。
と、正座で痺れる足をプルプルさせ、俯いていたスノウが顔を上げ。

「家ならもう追い出された」
「……は？」
　スノウが発したその言葉に。
「家なら家賃が払えなくて追い出された。城の兵舎も空きがない。なのでここ最近は、お前達のアジトのソファーで寝ていたのだ。というわけで、今日からは私も野宿だ」
「お、おう、そうか……」
　真顔で言ってくるスノウに俺は思わず気圧（けお）される。
「ふ、ふふ……。コツコツと貯（た）めた頭金と長期ローンで、ようやく私の下（もと）にきてくれたフレイムザッパー二世は、爆発に巻き込まれて失われ……！」
　スノウはどこかしら壊（こわ）れた泣き笑いの表情を浮（う）かべると、
「……体で接待しろと言ったな？　いいだろう、もう堕（お）ちるところまで堕ち

てやる！　だから私もテントに泊めろ！　お願いします！」
そう言って土下座を始めたスノウに、さすがの俺もドン引いた。
この女は一体どこまで堕ちていくのだろう。
「いつまでもコイツを責めたってしょうがねえ、アジトは爆発するもんだしな。素人に火薬を弄らせた自分も悪い。無事だっただけでも儲けもんだ」
その言葉にスノウが不思議そうにアリスを見上げる。
「ゆ、赦してくれるのか？　お前達の家を吹き飛ばしてしまった私を……？」
そんなスノウにアリスが微笑み。
「当然だ、自分は雇用主としてお前の事は見捨てない。寝泊まりする所や食事も用意してやる。吹っ飛んだアジトの代金も無利子でツケにしといてやろう。それに、フレイムザッパー二世が爆発のせいでダメになったんだろ？　三

世を買うのならいつでも金を貸してやるぞ」
「ア、アリス様……！」
　アリスに向けるスノウの眼差（まなざ）しが神様を見るようなものになった。
　このアンドロイドはダメ女を借金漬（づ）けにする気のようだ。
　アリスは、元々要塞が完成したら引き払う予定だった旧アジトの代金をスノウに押し付け満足したのか、
「まあやっちまったもんは仕方ねえ。おい六号、この非常時だ。新アジトの建設を急がなきゃならなくなった。アンデッド祭りなんてアホな行事は置いといて、先にこっちを手伝ってくれ」
　明るい口調でそう言うと、俺の背中をポンと叩いてきた。
「おう任せろ。俺は出来る子だからな。そこのアホとは違うところを見せてやる」

「あっ、き、貴様！　アリス様に認められるのは私だ！　手柄を立てて時給を上げてもらうのだ！」

　コイツ！

「そんなに金が欲しいなら、そこら辺でそのエロい体でも売ってろ守銭奴が！」

「ユニコーンに乗れるのであれば体ぐらいとっくに売っている！　貴様とキスしてからというもの、愛馬になんとなく避けられているんだぞ！　これからは胸元を見るだけでも金を取るからな！」

　スノウはそう言って、わざと見せ付けるように胸元を強調する。

「アリスの相棒は俺なんだよ！　俺の存在意義を奪うなよ、小遣い貰えなくなるだろ！　なんだこんなもん、ちっとデカいからってバカにしやがって！　つまり金払えば揉んでいいんだな!?」

「おいやめろ、本当に揉もうとするな！　高いぞ！　触ったら高いから
な！　やめろ！　やめっ……！」
　俺が伸ばした手を掴み、必死に抵抗するスノウを見て、アリスがポツリと
呟いた。
「真っ当な部下と相棒が、どっかに落ちてねえかなあ」

2

　地球から転送された大量の資材を前に、アリスとスノウ、そして二体のキ
メラが立ち並ぶ。
　俺は少しだけ高くなっている場所に立ち、拡声器を手に持った。

『おはよう諸君。この俺が秘密結社キサラギ、グレイス支部長の戦闘員六号さんだ。今回の任務は、魔の大森林開拓のため、足掛かりとなる要塞建設が目的となる。環境汚染や人口増加による土地問題、食糧問題。諸君の肩には人類の未来が懸かっており……』

今日から本格的な要塞建設がスタートだ。

ちゃんとした要塞が出来れば、俺は俗に言う中ボスの称号が貰える。

中ボスは、幹部などの役職とはまた別の物。

幹部というのが強さを表す指標なら、中ボスは目に見える成果を挙げた者への称号だ。

当然、ここでその称号が得られれば他の戦闘員にデカい顔が出来るようになる。

――と、そんな事に思いを馳せながら感慨深く挨拶をしていると、心ない部下達が俺に罵声を浴びせてきた。
「これは何の意味があるのだ！　話が長いし何を言っているのかサッパリ分からん！　報酬は出来高制なのだぞ、くだらない挨拶はいいからとっとと始めろ！」
「たいちょー、急に難しい言葉使っても、ちっとも似合わないですよ。さっさと仕事終わらせてご飯食べに行きましょうよー」
　こいつら部下のクセに、ちっとも上下関係の教育がなってない。
『うるせー、アジトが出来たら俺は中ボスだ、偉いんだぞ！　お前らみたいな下っ端社員とは別格の存在になるんだからな！　そこら辺が分かったなら二人とも敬語を使え！』
　拡声器にがなり立てると、スノウとロゼがいきり立つ。

「貴様、誰が下っ端社員だ！　私はあくまでこの国の騎士だ！　ティリス様の命で仕方なく貴様の下に付いてるだけで、怪しげな結社に入った覚えはないぞ！」
「そうですよー、あたしを勝手に社員扱いするのやめてくださいよー！」
　騒ぐ二人をどうやって黙らせてやるかと考えていると、人手不足という事で無理やり引っ張ってきたラッセルが、ため息交じりに口を開いた。
「ねえ、キミってさあ……。前回はボクが操る巨大兵器にやられてたよね。ボクがキミ達に従っているのは、トラ男が理不尽に強いから。ボク達キメラは人よりも野生動物に近いからね。強い相手になら服従するけど、弱っちいキミにあれこれ命令されるいわれはないね」
　……はあああああああ？
『俺に一撃でのされたクセに、言ってくれるじゃねーかクソガキが！　なん

なら今ここで締め上げてやってもいいんだぞ、パンツ覗かれて喜ぶ女装野郎が！』

「あ、あれは後ろからの不意討ちじゃないか！　それにパンツ覗かれて喜んでなんかない！　ボクをお前らみたいな変態と一緒にするな！」

　パンツ覗かれて喜ぶという言葉に、スノウとロゼがラッセルから距離を取る。

「ちょ、ちょっと待てよ同族、アイツの言う事は間違いで……！」

　同じキメラのロゼに引かれる事だけは辛いのか、ラッセルが慌てて言い訳するが、

「すいませんラッセルさん、その格好であたしを同族扱いするのやめてもらっていいですか？　これでも真面目に生きてるんです」

「ロゼ、この女装小僧は完全に六号側の人間だ。関わり合いになるとバカが

感染るぞ」
「待ってよ、本当に待って！　ボクも真面目に生きてるよ！　変な連中に捕らわれてるだけだから！」
　俺を放置して何やら騒ぎ始めた三人に、至近距離から拡声器で呼び掛けた。

『かーっ！　うちの隊はこんなんばっか！　女装キメラに大食いキメラ、おまけに守銭奴のエロ女！　お前らを率いてアジトを建設する身にもなれってんだ！　特に、そこのアジトぶっ壊したヤツは、毎日俺に土下座しろ！』
「貴様、人が聞いていれば誰がエロ女だ！　守銭奴なのは認めるが、エロ女というのはお前らの勝手な感想だ！　あと、私がアジトの外に出たのにも理由があるのだ！　そう、あれは窓の外から何者かが中を覗いていて……」
「隊長、女の子に向かって大食いキメラはあんまりです！　人を大食いキャ

ラ扱いするなら期待に応えて囓りますよ！」
「じょ、女装はお前達が無理やりやらせてるんだろ！」
全員が一斉に喋るため何を言っているのかも分からない。
しかし、上司に対する尊敬の欠片もないその態度に、俺はペッと地面にツバを吐き。
「頭の巡りが悪いアホタレどもめ！　アジトが完成して俺が中ボス様になってから媚びても遅いからな。俺に従順じゃないお前らには、毎日肩揉みとトイレ掃除をさせてやる。それが嫌ならとっとと仕事を始めろ！」
その言葉に三人は、怒りの表情を露わにしていく。
「ロゼ！　水のラッセル！　この男を囲んで森に埋めるぞ！　何が中ボス様だバカにしおって、こんな上司は排除してやれ！」

[illegible]」
「隊長に頭の巡りが悪いって言われるのはショックですよ！」
「キミさあ、ボクが元魔王軍四天王でキメラだって忘れてない？　たかが人間が真正面から喧嘩を売って、勝てるとでも思ってるわけ？」
不穏な気配を漂わせる三人に、俺は手のひらに拳をパンと打ち付けながら、
「おっ？　上等じゃねーか、本気になった俺に三人で勝てるとでも思ってんのか？　掛かって来いよクソ雑魚どもが、もれなく全員泣かせてやる！」
「私は後ろから首を狙う！　三角形を描くように三人で襲い掛かるぞ、陣を取れ！」
「この戦いは、二人がこの世に生まれ落ちた時からの定め。あたしが太古の眠りから目覚めたのは、今この時のために……」
「ハハッ、ここのところ変な格好させられてストレスが溜まってたんだ。キミは

ボクのオモチャにしてあげるから……痛たたたたた！　喋ってる時に攻撃するのは卑怯……、待って！　そっちに腕は曲がらない！」
　スノウとロゼがアホな事を言ってる間にラッセルの腕を掴み取る。
　慌ててフォローに入ろうとする二人を無視し、腕を庇うラッセルの背後に回り、裸絞めで絞め上げた。
「隊長、ラッセルさんが泡吹いてます！　そこまでですよ！」
「こらっ、放せ六号！　貴様のところのメイドが冥土になるぞ！」
　背中や頭を叩かれながらも離そうとしない俺に、放り出された拡声器を拾い上げたアリスがため息交じりに言ってきた。
『おい六号、よーく聞け。アジトが完成しなければ、いつまで経ってもテント暮らしだ。お前は個室が欲しくねえのか？　自分の部屋がなけりゃ安心してエロ本読む事も出来ねえぞ』

アリスの放ったその言葉に、俺はピタリと動きを止めた。

『それに六号が言った事も嘘じゃねえ。アジト建設と開拓任務が上手くいけば多くの問題が解決する。そうすりゃお前らは英雄だ。自分達の星に来れば、莫大なボーナスと豪勢な生活が待ってるからな。……よし、やる気になったな。それじゃあ工事を始めるぞ！』

目の色が変わった俺達は手際よく作業を始めた。

悪行ポイントで手に入れた重機を使い、基礎工事に取り掛かる。

――アジト建設予定地の目と鼻の先には森があり、それ以外はひたすら荒野が広がっている。

魔の大森林と呼ばれるこの森を切り拓く事。

それが地球とこの星における問題の解決策に繋がる一大事業である――

3

大森林前に広がる荒野に悲鳴と爆音が響いた。

「水のラッセルー！」

どうやら女装キメラが何かの爆発に巻き込まれたらしい。

この地にテントを張ってキャンプを始めたその翌日。

俺達は今、魔獣の集団に襲われていた。

「アリス様、ラッセルが！　どうか助けてやってくれ、まだコイツを逝かせるわけにはいかないんだ！」

さっきの悲鳴はスノウの声か。
アイツ、いつの間にラッセルとこんなに親しくなったんだ。
見てくれはまだガキだから流石に良心が痛むのか？
というか、あの守銭奴にも良心があった事に驚きだ。
「大丈夫だ。戦場でメイド服なんていう正気を疑う装備だが、戦闘キメラがあの程度の爆発で死にはしないさ。バハリン飲ませとけばそのうち治る」
「そ、そうか！　私より下の扱いを受けているアイツを見ていると、自分はまだマシな方だと心が安らぐのだ！　ここで死んでもらっては困る！」
ちょっとだけ感心した俺の気持ちを返して欲しい。
俺はクソ女をスルーすると、先ほどの爆心地へ駆け出した。
「目標、敵性生物ムピョコピョコ！　攻撃手段は自爆だそうだ！」
アリスに向けて叫びながら、銃を引き抜き射程圏内に敵を収める。

そんな俺に、ショットガンを構えながら後ろを付いてきていたアリスがツッコんだ。
「六号、アイツらはミピョコピョコだ。大事なとこだから間違(まちが)うな」
「そうですよ、アレは食べちゃダメな危ないヤツです。絶対に間違えないでくださいね」
「どっちでもいいよそんなもん！　突撃(とつげき)だ！　突(つ)っ込め、突っ込めー！」
号令に合わせて皆(みんな)が駆け出す。
標的は目の前で跳(は)ね回る、カエルみたいな顔をした二足歩行の謎(なぞ)の生物。
その内の一匹(いっぴき)に銃弾(じゅうだん)を撃(う)ち込むと、まるで誘爆(ゆうばく)するかのように爆発した。

それを見た連中はこちらを挑発するようにピョコピョコ跳ねて警戒している。
「おいアリス、ここに仮設アジトを構えてからもう七回目の襲撃だぞ！　他に候補地はないのかよ！　もっとマシな場所があるだろ！」
「ぶんどった土地はここしかねえんだ、諦めろ。それが嫌なら魔王軍なりトリスなり、敵地を侵略してきてくれ」
「なんの罰ゲームだよ、ちくしょー！」
　と、俺が叫んだその時だった。
　ピョコピョコと対峙していたスノウとロゼが、焦ったような声を上げる。
「おい六号、大森林からスポポッチが出たぞ！　スポポッチの群れが来た！」
「同じく、モケモケの群れも来てます！　隊長どうしましょう、この量は流

石に食べきれませんよ！」
　次々ともたらされる敵性生物出現の報告に、さすがに異常事態だと気が付いた。
「アリス！　アリース！　ちょっと森の横にアジトを建てようとしただけで、こんなに魔獣に襲われるもんなのか!?」
「六号、やつらの背後をちゃんと見ろ、カチワリ族がちらほら見えるぞ。連中が魔獣を追い立てたんだ。ああして自分達の縄張り(なわばり)を守ってるんだな、興味深い」
「興味深くねえよ、怖えよバカ！　撤退(てったい)だ！　撤退するぞ！」
　俺の撤退の言葉に他(ほか)の連中が即座(そくざ)に下がる。
　なんなら指示を出す前にロゼはラッセルを抱(かか)えて後退していた。
　優秀(ゆうしゅう)な部下だと褒(ほ)めるとこなのか疑問が残る。

そんな中、一部のスポポッチとモケモケが、指示出しのため最後まで残っていた俺に向かって来た。
「なあトラ男さんは⁉　こんな時のための怪人だろ！」
「トリスとの国境で小競り合いが起こってな。トラ男には戦闘員を率いてそっちの収束に行って貰った。その内帰ってくるだろうさ」
と、それまで様子を見ていたスノウが剣を抜き、アリスを守るように背中に庇う。
「はははは！　魔獣退治なら私の専門だ、どこからでも掛かってこいボーナスども！　そして時給の足しになれ！」
絵面だけなら弱者を守る騎士の姿だが、下卑た笑みと言動が残念すぎる。
俺は手近な一匹に銃弾を撃ち込みながら、横から飛び蹴りを放ってきた

ミピョコピョコへ、カウンターで前蹴りを放つ。
「ここじゃあアジトが完成しても、毎日魔獣に襲われちまうぞ！　アリス、候補地を考え直そうぜ！」
「せっかく手に入れた支配地だぞ、簡単に手放せるか。それより六号、顔を庇え。お前が蹴り飛ばしたミピョコピョコを誘爆させる」
　アリスが言い終わるその前に、両腕を顔の前に掲げると……。
「それにここなら向こうから研究対象がやって来る。賢い自分が上と交渉した結果、そいつらをサンプルとして本社に送れば、報奨代わりに悪行ポイントを貰えるようにしてもらった。だから……」
　アリスはショットガンを構えると——
「ここから先はお前の仕事だ。早く地球に帰りたければ、せいぜい体を張って
稼いでくれよ、相棒

稼いでくれ。村様」

「ちくしょう、まただよ！　またジリ貧生活だ！　いいよ、やるよ、やってやるよ！　狩りも悪事もやってやる！　ポイント貯めて地球に帰って、俺をこんな目に遭わせる幹部連中に体で詫びてもらうからな！」

ミピョコピョコピョコの爆発音が広い荒野に響き渡った──

4

──開拓とは原住民との闘争である。

建設途中の要塞の上で森の監視をしていた俺は、警告の声を張り上げた。

「アリス！　また蛮族（ばんぞく）が攻（せ）めてきた！」

翌日。

テント暮らしを一刻も早く抜け出したい俺達が頑強（がんきょう）な要塞を築いていたところ、カチワリ族とは別の蛮族が姿を見せた。

「武器も持ってないみたいだし、あの程度の数ならスノウとロゼだけでどうにかなるだろ。六号はそのまま監視を続けろ。敵襲のたびにいちいち建設を中断してたら、いつまで経っても完成しねえからな」

クレーンに乗り込み建材を積み上げながらアリスが言った。

俺達の前に現れたのは、全身に入れ墨（ずみ）を彫（ほ）り、木の仮面と腰（こし）みのだけを着けた集団だ。

先日女装キメラが爆死した事により、俺達の戦力は四人にまで減ってい

る。
　とはいえ、今回攻めてきた蛮族は武器らしい物を持っていない。
　確かにアリスの言う通り、二人で追い払う事が出来そうだ。
　俺がそんな事を考えていると、ヘルメット姿でツルハシを振るっていたスノウが声を上げる。
「待て、あれはヒイラギ族だ！　自然との調和、共生を旨とする連中だ！　あやつらは魔法とも違った不思議な力を行使する！　人に対しての危険度はそれほど高くないが、森の近くの建設物に対しては攻撃的だ！」
「不思議な力って何だよ、俺からすればこの星の連中は、皆不思議で一杯だよ。……おっ？　なんだなんだ？」
　ヒイラギ族は俺が立っている要塞に攻撃を仕掛けるでもなく、遠巻きに

観察している。

そして太鼓や笛を取り出すと、それらで音楽を奏でながら怪しげな舞を踊り始めた。

「どうするアリス、連中が踊り出したぞ！　俺も空気読んで交ざった方がいいか!?」

「交ざってどうする。いや、本当に何してんだアレ。……ちょっと待て、空から降り注ぐ太陽光の量がおかしいぞ」

要塞が空からの光に照らし出される。

その光の中心に立つ俺は、何だか原住民に崇められているようだ。

それを見たスノウとロゼが重いツルハシを放り出し、なぜか慌てて逃げ出した。

「やべえ、俺、超輝いてる。おいアリス、なんか神様にでもなった気分だ。あい

つらにお言葉を授けてやった方がいいのかな？」
「アホな事言ってんじゃねえ、総員退避（たいひ）だ！　ここから離（はな）れろ！」
それを聞いた俺が、考える前に行動に移し。
建設途中の要塞から慌てて脱出（だっしゅつ）したその瞬間（しゅんかん）──

空から一条の光が降りると共に、要塞上部が吹（ふ）き飛んだ。

「ぶわあああああああ！」
飛んでくる小石から顔を守っていると、ヒイラギ族が森へと引き返しているのが見える。
空を見上げていたアリスが首を傾（かし）げながら呟（つぶや）いた。
「ソーラ・レイ式の光学兵器か？　しかし、この星に降下した時に衛星みたいな物は確認（かくにん）出来なかったがなぁ」

した物に確認出来なかったかなあ……」
「きっと神パワーだよ神パワー！　天罰的なものを落としたんだって！　神様ごめんなさい、もう賽銭盗みません！　神社の巫女さんにセクハラする回数も減らします！」
俺が祈りを捧げている間にアリスが要塞の瓦礫を調べだした。
「天罰なら普通落雷だろ。瓦礫が融けてる事から光の収束攻撃と見ていいな。それなら対抗策はある」
「おい、お前やめとけよ。あれ絶対天罰だって。これ以上逆らって、罰が当たったらどうすんだよ」
と、その時。
「あーっ！　テントの横に寝かしておいたラッセルさんが持ってかれてますよ！」

「こ、こら待てっ！　ソイツはそんな姿でも男だぞ！」

見れば戦利品だとばかりに気絶したラッセルが運ばれている。

ツルハシを拾い上げたロゼとスノウが慌てながら駆け出した。

――数時間後。

森で何があったのかは知らないが、白目を剥（む）いたラッセルとスノウを背負いながら、ロゼが疲（つか）れた顔で帰ってきた。

――開拓とは自然との闘争である。

猛烈（もうれつ）に吹き荒（あ）れる砂嵐（すなあらし）の中で、俺の背中に隠（かく）れながらアリスが叫（さけ）ぶ。

「おい六号、もっと引っ張れ！　テントが持ってかれるぞ！」
　カチワリ族やヒイラギ族、魔獣やモケモケを追い返しながらもコツコツと
アジト建設を進めた俺達は……。
「この星の自然環境はどうなってんだよ！　さっきまで晴れてたクセに、なんでこんな砂嵐が……って、あー！　スノウが！」
　襲い来る暴風に、何とか耐えていたスノウが吹き飛ばされた。
　アジトの建設作業のため、重い鎧を脱いでいたのが災いしたようだ。
「おいアリス、女装キメラが見当たらないけど、どこ行った!?」
「アイツなら真っ先に吹っ飛ばされて大森林の木に引っかかってるよ。そっちはロゼが回収に向かってる。それより六号、テントはもういい、諦めろ。要塞さえ建設出来ればそんな物も必要ないんだ。クソ重い戦闘服を着ていれば、

お前が刑はされる事はねえ　このまま作業を続行するぞ！」
　アリスが重機の中でそんな事を言ってくるが……。
「こんな状況で建設作業なんて出来るのかよ！　って、おい！　アリス、ヤバいのが飛ばされてきてる！」
「ミピョコピョコか。ダメだこりゃ、引き揚げだ」
　アリスが操縦席から飛び出すと同時、建設途中だったアジトと重機が爆発した。
　吹き荒れる爆風と砂嵐。
　俺は残骸と化したアジトと重機を眺めながら呟いた。
「なあアリス。このペースで悪行ポイントを使ってると、俺、アジトが完成する前に逮捕されそうなんだけど」
　現在、アジト建設の重機や資材のみに限り、悪行ポイントの使用が許可されている。

というわけで、仕事が終わった後、毎日街でコツコツと、アジト建設用に悪行ポイントを貯めているのだが……。
「そもそもお前は、一体何をやってこんなにポイント稼いでるんだ？　これだけの建材に重機だなんて、よほどの悪事をやらかしたのか？」
　前から気になっていたのか、アリスが疑問を口にする。
「アリスは意外と心配性だからな。アジトの建設が終われば教えてやるよ。まあ、危ない事だけはしていないと言っとくよ」
「……まあ、お前が大悪事を働けない事ぐらいは理解してるから、その辺は心配してないが……」
　最近のマイブームはスニーキングミッションだ。
　過去の戦場を思い出し、持てる技術をフルに使っている。

悪行ポイントを稼ぐため、夜な夜な城へ忍(しの)び込んでいるのだ。

「こう見えて、俺は潜入(せんにゅう)工作が得意だったんだぜ……」

「ほう？　その口ぶりだと、六号にしては意外に大掛(おおが)かりな悪事に手を染めているみたいだな。後で教えて貰(もら)うのを楽しみにしとくよ」

アリスがしみじみと感心する中、俺は撤退(てったい)の指示を出す。
というか、このままだと完成にどれだけ掛かるのか知れたものではない。

本当なら俺の部隊だけの手柄(てがら)にしたかったが、しょうがない。

「いい加減本気で取り掛かるか。明日(あした)は前線に行ってる戦闘(せんとう)員を何人か借りて、こっちを先に完成させようぜ。なーに、キサラギが本気を出せば楽勝よ」

「お前さんはフラグを立てるのが好きだなあ……」

あき

アリスが呆れ顔でしみじみと呟く中、俺は勝利を確信していた。

5

——開拓とは…………。

「こんな所にいられるか！　もう俺は地球に帰るぞ！」
「気持ちは分かるが六号、落ち着け。悪行ポイントがマイナスのまま帰れば制裁されるぞ。それよりも……」

アリスは俺達を取り囲むソレを見渡すと、
「コレがお前らが言ってたゾンビってヤツか。どういう原理で動いてるんだ。何らかの生物に寄生され死体が操られている、または内部はロボットだと

か……？」
「分析はどうでもいいから、早くあいつら何とかしてぇ！」
完成間近となった俺達のアジトはゾンビの群れに包囲されていた。
今日は他の戦闘員達も呼んだというのに、これでは相手が悪すぎる。
見ればゾンビに怯えているのは俺だけではない。
ロゼとラッセルの鼻の良いキメラ組は悪臭で脂汗を垂らし固まっている。
そして俺以外の戦闘員も、軒並み戦意を喪失していた。
「戦うのはお前ら戦闘員の仕事だろうに、なんでどいつもこいつも怖じ気付いてんだ？」
「ゾンビは悪の天敵だからな。知ってるか？　ゾンビ映画なんかじゃ、俺達みたいなのが真っ先に酷く殺されるんだぜ。しかも調子に乗ってゾンビを数多く倒

したヤツほど酷い死に方するってジンクスがあるんだ。ついでに言うと、銃で撃つと飛び散るじゃん。腐った人の体が飛び散るじゃん。俺はそんなの見たら晩飯食えない自信があるね」

　そんな事を言い合っている間に、ゾンビの群れがフェンスを次々と乗り越えてくる。

　と、そんなゾンビ達と相対するようにスノウが前に立ちはだかった。

「フン、情けないヤツめ。ノロマなゾンビなど我が剣の錆にしてやる！」

日頃はポンコツ騎士のクセに、いつになく頼もしい発言をするスノウ。

　だがその視線はチラチラとアリスに向けられて……。

「分かった分かった、そいつらを撃退したらボーナスだ。ウチの戦闘員達は変なジンクスが怖いらしい。まったく、悪の組織の戦闘員のクセにだらしねえ。このチキンどもが」

その言葉に喜びの奇声を上げながらスノウが駆けた。

「チキンって言うな！　悪の組織の戦闘員だからこそ死ぬのが怖いんだろうが。ゾンビや幽霊がいるって事は死後の世界があるんだぞ。つまり悪い事ばっかしてきた俺達は、死んだら地獄行き確定じゃん。だから俺達戦闘員はしぶといし、今を精一杯生きるんだよ」

「キサラギの戦闘員なら地獄もついでに侵略してやれ。しかし、このままじゃ一向に工事が進まねえなあ……」

そう言ってアリスが見下ろす先では。

ボーナスに目の色を変えたスノウが、腐臭漂うゾンビを相手に返り血に汚れるのも構わず暴れ回っていた。

「アイツ、いよいよ女を辞め始めたなあ……」

「戦闘員ならああでなきゃな。お前等も見習え、現地人に負けてるぞ」

赤く燃え上がる魔剣を手にゾンビ達を土に還すスノウだが、アイツいつの間にフレイムなんとか三世を買ったんだ。
強敵の前では役に立たないスノウだが、腐っても騎士団長を務めただけはあるのか、ゾンビを相手に一方的に力を振るっていた。
滅多にないあの女の活躍の場だ、ここは応援してやるか。
「いいぞスノウ、さすがはグレイス王国一の剣士だ！　俺達にはゾンビは無理だ！　後でティリスに、お前が大活躍してたって言っとくからな！」
「!?　ほ、本当か!?　本当だな!?　ゾンビの数は多少水増しして報告してもらって構わんからな!?」
俺の言葉にやる気を出したスノウが目をキラキラさせながら暴れ回る。
と、動きの鈍いゾンビ相手に鎧はかえって邪魔だと判断したのか、スノウが装備を外して身軽になった。

嬉々として剣を振り回す度、おっぱい女の自己主張が激しくなり、それを目にした同僚(どうりょう)達が口々に応援の声を上げた。

「いいぞ異世界人、あんた最高だ！」

「いい物を見させてもらった！　後で奢(おご)ってやるからな！」

「俺達に、もっとあんたの活躍を見せてくれ！」

日頃俺達と一緒(いっしょ)に行動を共にしキサラギ戦闘員の力を知っているスノウは、そんな連中に褒(ほ)めちぎられた事に驚(おどろ)きの表情を見せた。

やがてその顔がにへらと笑(え)み崩(くず)れ……。

「まったく、ゾンビごときに情けない男達だ！　こいつらは私に任せておけ、お前らはそこで見ていろ！」

「すげー！　揺(ゆ)れてる揺れてる！」

「戦闘力が測定出来ない！　アレはアスタロト様……、いや、ベリアル様級だ！」

た」

　調子に乗ったスノウがやがてゾンビを殲滅し、大満足の表情で帰ってきた。

「普段はあれだけ強いのに情けない連中だな！　いいか、ゾンビが出たらいつでも言ってこい！　強い私がやっつけてやるからな！」

　俺とアリスは浮かれたスノウを出迎えながら、

「おっぱい女、よくやった」

「やるじゃねえかおっぱい女。ボーナス弾んでやるからな」

「その呼び名はやめろ！　……ところで六号、一つ聞きたい事があるのだが。私の活躍に見惚れていた連中が、ベリアル様級だとか言っていたのだがどういう意味だ？」

「ベリアル様は俺の上司で最高幹部の一人だな。キサラギ一の武闘派で、最

強の戦闘能力を保有してる人だよ」
　そして胸のサイズの戦闘力もキサラギ一だ。
「わ、私は、そのような方に匹敵すると言われていたのか？　いささか過大評価だと思うのだが……。ま、まあ、悪い気はしないな！」
　そんな人と並べられたのがよほど嬉しかったのかニヤニヤするおっぱい女。
「いや、過大評価なんかじゃない。お前の年齢を考えれば、今後の伸びしろも含め、充分ベリアル様級だと思うぞ」
「そ、そうか？　貴様がそこまで言うとはな。ま、まあ、これでも近衛騎士団の隊長まで登り詰めた身だ。剣に関しては自信があるからな！」
　意外とチョロいおっぱい女が剣をブンブン振り回す。
　と、その時だった。
「お代わりだ！　おい、森からゾンビのお代わりがやってきたぞ！」

森を見張っていた戦闘員が大声を張り上げる。
　そちらを見れば、数百を超えるゾンビ達がなぜかアジトを目掛けて真っ直ぐに……！
「よし、早速出番だぞ。お前のカッコいいところを見せてやれ！」
「バカを言え、あんな数は流石に無理だ！　おい、私もアジトに入れろ！」
　早々と諦めたスノウはアジトを囲むフェンスをガチャガチャ揺らして喚き出す。
「ちょっと感心したらこれだよ！　やっぱお前はおっぱい女だ！」
「もうおっぱい女でいいから早く入れろ！　いや、本当にヤバいから！」
　泣きそうな顔で訴えかけてくるおっぱい女。
「ほーん？　ようやく自分の取り柄が何なのかが理解出来たようだな。そういう事なら助けてやらんでもないぞ。でもいいか？　これからは俺の事を

ちゃんと上司として扱えよ！　二つ目！　俺の命令は絶対だ、おっぱいアピールしろと言ったら前屈みな！　後は……」

……？

今森の奥に、何か着ぐるみみたいなのが見えた気がする。

というか、猫みたいな人型のぬいぐるみが……。

と、俺が目を凝らして再びそちらに視線を向けた、その時だった。

「おーい六号、置いてくぞー。アジトは放棄だ、早く逃げろー」

スノウをからかっていたせいで未だにアジトにいた俺に、遠くからアリスの声が掛けられた。

遠くから？

……、ス　ス

「おい、もうみんな脱出(だっしゅつ)してるじゃねーか！　スノウ、お前は仮にも騎士の端(はし)くれだろ、ここは殿(しんがり)を任せたぞ！」

「騎士の前に女の端くれだ、先に逃がしてくれても構わんぞ！　貴様が殿をやるべきだ！」

「こんな時だけ女をアピールするんじゃねぇよ！　アリス、助けてぇ！」

6

建設途中(とちゅう)のアジトを放棄し、街に逃げ帰ったその翌日。

なかなか建設が進まない事で、アリスの機嫌(きげん)が斜(なな)めだった。

現在俺達は、街の公園を勝手に占拠(せんきょ)し仮のアジトにしている。

まあ本格的に建物を建てると怒(おこ)られるので、テントを張っただけなのだ

が。
「そんなわけで作戦会議だ。すまんな六号、ちょっとこの星を舐めていた。多数の戦闘員を投入したのに失敗するとは思わなかった。これは自分のミスだ」
　テントを張り終えた俺の横で、アリスがそんな事を言ってきた。
　常に自信たっぷりのこいつが謝るとは珍しい。
　アリスは周辺地図を芝生に広げて屈み込み、
「あの地にキサラギの拠点を建てたかったのは、トリスと商売敵の両方に睨みを利かせ、暇な時にはいつでも大森林からサンプルを取れるからだ。だが、もう欲張るのは止めだ。森からのサンプル採取はほとぼりが冷めた頃にそれ用の部隊を派遣しよう」
「森が傍にあると、いつでもモケモケが食えるかと思って期待してたんだけ

どな。森を諦めるって事はアジトの建設場所を変えるのか？」
だがアリスは俺の言葉に首を振る。
「あの森を焼いちまおう。そうすりゃ原住民や原生生物は大混乱だ。その間にアジト建設を進めちまえばいい」
思い切りが良すぎるだろ。
自然保護団体が聞いたら怒鳴り込んでくるぞ。
確かに放火は悪の華ではあるのだが……。
「あの森は大陸の大部分を占めている。あれだけの広大な森を焼き尽くすには相当な時間が掛かる。大規模な爆撃や火災が起きた後は、大量の塵が上空に巻き上げられて雲が出来、雨が降るんだよ。それも考えればさすがにあの広さの森が更地にはならねえ、ここは盛大に焼いてやれ」

「まあ、ゾンビが出ても火炎放射器があればどうにかなるのかな……？　それに森林火災なら……」
　俺はふと隣に視線をやると。
「いざとなれば、消火作業にはコイツを使えばいいしな」
「……水魔法に関しては得意だから、消火作業ぐらいやるけどさぁ……。さっきからキミ達の話を聞いていると、魔王軍よりよっぽど人類の敵なんじゃないかと思えてくるよ」
　仮設テントの隣にかまどを作り、みんなの食事の用意をしていたラッセルが呆れたように言ってきた。

　――魔の大森林を目の前に、アリスが皆に呼び掛けた。
「野郎ども、用意はいいか？　自分達は悪の組織だ、良心なんか捨てちま

え。ゾンビもモケモケもミピョコピョコも、森と一緒に焼却だ！」

「「「ヒャッハー！」」」

それに応えるように戦闘員達の歓声が響き渡る。

環境破壊が怖くて悪の組織を名乗れはしない。

各々が火炎放射器を手にすると、俺を除く戦闘員達が森に向けて火を放った。

連中に感化されたのか、意外とノリのいいロゼもちゃっかり自前の炎を吐き付けている。

バチバチという木が弾ける音と共に忌ま忌ましい森が焼けていく。

きっと同僚達は、今回の作戦でたくさんの悪行ポイントを稼ぐのだろう。

火炎放射器は悪の華。

俺は同僚達の楽しげな放火活動を眺め呟いた。
「いいなあ、俺も武器の転送許可があればなあ……」
「お前ら戦闘員は、なぜか火炎放射器に妙な執着を見せるよな」
と、盛大に森を焼く同僚を羨ましく思っていたその時だった。
「おいお前達！　大森林に何をしているのだ！」
森を眺める俺とアリスに背後から声が掛けられる。
森から上がる黒煙を見て駆けてきたのだろう、ユニコーンに跨ったスノウが慌てた様子で言ってきた。
俺はそんなスノウに向けて、悪党らしく笑いかける。
「へっ、見ての通り森を焼いているのさ。俺達は悪の組織、目的のためなら手

段は選はねえ！　アジト建設の邪魔をするってんならみんなまとめて焼却よ！」
「お前格好つけてるが、本格的にヤバい作戦だと腰が引けてためらうじゃねえか」
　と、俺とアリスがそんな事を言い合ってると。
「何を暢気な事を言っている！　急いでここから逃げないと、森からの反撃が来るぞ！」
　焦りの表情を浮かべたスノウが、慌てた様子で声を上げた。
……森の反撃？
「ひゃあああああああ!?　た、隊長ー！　隊長ー!!」
　突然の悲鳴にそちらを見れば、足首を根で搦め捕られたロゼが、宙吊りにぶら下げられていた。
それを見た戦闘員達が俺を含めて群がっていく。

それを見た戦闘員達が俺を含めて群がっていく

「ちょっ!?　何してるんですか、見てないで助けてください!」

吊り上げられたロゼの下、仲良く膝を抱えて座り込んだ俺達は、穏やかな気持ちで上を見上げる。

悪行ポイント加算のアナウンスが流れる中、重力に従い捲れていくスカートを押さえながら、ロゼがすうっと息を吸い――

「こ、こら待て!　分かった、今下ろしてやるからブレスはやめろ!」

攻撃態勢に入ったロゼに他の戦闘員達が逃げ散っていく。

俺は持参したRバッソーで、ロゼを捕らえている木の根を切ろうと……、

「た、隊長、後ろ後ろ!」

「ん?　うおおお!　なんじゃこりゃー!」

俺が背後を振り向くと、辺りの地面が蠢いていた。

そこかしこから覗く木の根を見るに、森の反撃というヤツなのだろう。
「おいお前ら、焼け焼け！　離れた場所から火炎放射器で焼いてやれ！」
飛び退きながら指示するも、戦闘員達の足下が爆発するように盛り上がり……！
「あああああああああああ！」
「うおおおお、こ、コイツ俺の戦闘服を引き剝がそうと！　やめろ、俺は六号みたいな露出癖は持ってない！」
「この場には美少女が何人もいるんだぞ！　何で俺のところに来るんだ、空気読めよ！」
有象無象の戦闘員達が飛び出してきた木の根に絡まれ苦戦していた。
戦闘服で強化された力で何とか抵抗しているものの、地中を潜って接近してくる根っこに対しては火炎放射も意味がない。

と、混乱する俺達をあざ笑うかのように、木々の葉先から霧状の何かが噴射される。

　離れた場所から観察していたアリスがその様子を見て呟いた。

「……この星の植物は自分で消火活動を行うのか。興味深いなんてもんじゃねえな」

「感心してる場合か！　こりゃダメだ、撤退しよう！」

　ロゼを捕らえていた根っこをRバッソーで切り裂きながら呼び掛ける。

　と、その時、甲高い悲鳴が上がった。

「うあああああーー！」

　見れば消火要員として付いてきていたラッセルが、木の根に絡まれ捕らわれている。

「うーん、絵面的には触手責めされる囚われの美少女メイドだけど、アイツ、ちんこ付いてんだよなぁ……」

「何をしみじみと悩んでいるのだ貴様は！　森の反撃は始まったばかりだ、ラッセルが捕まっている間に私達だけでも脱出するぞ！」

最低な提案をするスノウだが、それにアリスが待ったを掛けた。

「撤退するのはいいが、木を一本伐採してくれ。ちょっと試したい事がある」

7

森から離れた俺達が地面にへたり込んでいると、アリスが他の戦闘員のポイントを使い、地球から薬品の数々を取り寄せた。

伐採してきた木と薬品を使い、何かの実験をしているようだ。

俺はアリスの隣でそれを覗き込みながら、
「さっきから何してるん？」
「除草剤を試してるんだよ。この星の植物にもちゃんと効果があるみたいだな。これが効かなかったら植物用のウィルスを送ってもらうとこだった」
細菌兵器はダメ、絶対。
「なあアリス、その除草剤は大丈夫なんだろうな？　人体に害があるヤツじゃないだろうな？」
「ベトナム戦争で使われた枯れ葉剤と一緒にすんな。キサラギ社の除草剤は散布しても一月で無害になる上、飲んでも大丈夫な天然素材だ」
それはそれで胡散臭い。
「よし、ドローンで森の上空から散布するぞ。お前らは万が一に備えて避難しとけ」

「なあ、人体に害は無いんだろ？　万が一って何だよ、飲んでも大丈夫なんじゃなかったのかよ」
　俺の疑問を聞き流し、アリスがテキパキと除草剤をドローンに搭載する。
　そして——
「あーっ！　変なのが飛びました！　隊長、アレなんですか!?」
「すっげー！　飛んでる！　飛んでる！」
　何が琴線に触れたのか、ドローンを見て興奮しだした二人のキメラ。
「アレはドローンって言って、アリスが持ってるコントローラーで操れる無人航空機……、こらっ！　お前ら何やってんだ、打ち落とそうとすんな！」
　キメラの本能的にドローンは獲物にでも見えるらしい。
　石を拾って投げ付けだした二人を俺は慌てて取り押さえた。
「六号、その二匹をちゃんと摑まえといてくれ。一度除草剤を散布してみ

て、問題がなければ大量のドローンで一気にいくぞ」
アリスがそんな事を言いながらドローンを森の上空に待機させる。
やがてドローンの下部から除草剤が散布され……。
パンという乾いた音と共にドローンが消し飛んだ。
「変なのがいなくなっちゃいましたね」
「すっげー、一瞬で消えた！　ドローンすげー！」
本当に、何が琴線に触れるのか相変わらずうるさい二人。
「ドローンは突然消えたりしねーよ！　おいアリス、ドローンが狙撃されたぞ！」
「ちょっと待て。これは……」
アリスが言い終わるより早く、突如として森が割れた。

堅いはずの木々がまるで道を空けるように左右にズレると——

俺は声を大にして叫びを上げた。

「美少女だ！　地面から裸の美少女が生えてるぞ！　この星には美少女が生る木があるんだ！　バンザイ！」

「異世界バンザイ！」

「美少女バンザイ！」

茂みから足を生やした裸の美少女が、周囲に蕾を付けた蔓をまとわせ微笑んでいた。

美少女の際どい箇所をツタが申し訳程度に覆っているのが、逆に裸よりエロく感じる。

緑の髪色をした少女は、バンザイバンザイと叫ぶ俺達を指さしていた。

緑の髪色をした少女は、ギャンギャンと叫ぶ俺達を指さした。

「おいバカ共浮かれるな、ソイツは敵性生物だ！　おそらく何らかの飛び道具を使うぞ！」

俺の背中に隠れたアリスが戦闘員達に叫びを上げた。

こちらを指さしていた緑髪少女が薄く嗤うと、蕾の先端が一斉にこちらを向いて――

「あだだだだだだっ！　ちょっと待て、戦闘服越しなのにすげー痛い！　頭に当たったらザクロになるぞ！」

咄嗟に両腕で顔を庇った俺に向け、堅い何かが射出された。
背中のアリスが再び声を上げる。
「撤退だ！　ライオットシールドを呼び出して、身を守りながら撤退するぞ！」
「ちょっと待って、差し押さえのせいで装備呼べない！　誰か俺もシールド入れて！」
顔を庇いながら見回せば、近くにいるのはシールドを構えて後退る同僚のみ。
さっきまで近くにいたはずのスノウとロゼは、森が割れたと同時にとっくに逃走を始めていたようだ。
「重機だ、重機を盾にしろ！　さすがにパワーショベルまでは……」

後退りながら重機に近付く俺の言葉に、緑髪少女は再び微笑を浮かべ。
「きゃああああああああああ！　アリス！　アリース！」
「落ち着け六号、あんなのは怪人二口女みたいなもんだろ」
少女の頭の先が花開くように割れたかと思うと、その先を重機に向けた。
どうやら先ほどまでの蕾と同じ攻撃を行うようだ。
狙いを定められた重機が弾丸を撃ち込まれたような音を立て、車体をひしゃげて横倒しになる。
やがてガソリンに引火したのか、重機が黒煙と共に火を上げた。
それを呆然と眺めながら俺とアリスは呟いた。
「「帰るか」」

８

公園を勝手に占領（せんりょう）し、テントやかまどを設営してアジト（仮）を作った俺達は、戦いで疲（つか）れた体を癒（い）やしていた。

俺がテントから這（は）い出したのは、皆（みんな）が完全に寝静（ねしず）まった深夜だった。

……最初はほんの出来心だった。

切っ掛（か）けはただの思い付き。

寝ているアイツを驚（おどろ）かせたいと、ただそれだけの事だった。

それがいつしかズルズルと、止（や）め時を失ってしまった。

見付かれば大変な事になるのは分かってる。

これまで築き上げてきた信用も一夜にして崩（くず）れ去るだろう。

だがそれでも、俺にはやらなければいけない事がある。

皆が寝ているテントに向けて、俺は小さく呟いた。

（行ってくる……）

――今夜は月が出ているせいで、以前くいを打ち込んだ場所が明るく照らされていた。

これでは前回と同じルートは使えない。

だが、こういう時こそキサラギ製戦闘服の出番だろう。

見張りをしている門番を注視しながら外壁から離れると、俺は思い切り助走をつけてジャンプした。

戦闘服のパワーアシストにより、ギリギリで城を囲う外壁に手が掛かる。

本来であれば安全にくい打ち機でよじ登りたいところだが、臨機応変な対応を求められるのがスニーキングミッションだ。

対応を求められるのだ――キンカミ、シーンだ

　俺は中庭へ侵入（しんにゅう）すると、前回と同じくトラ男のアレを撒（ま）き……。

「ねえ、知ってる？　最近、街でぬいぐるみが暴れてるって噂（うわさ）。今のところ大した被害（ひがい）は無いみたいだけど、何だかいつもと違（ちが）うんだってさ」

「この時期になるとそういった怪談はよく聞くわね。ぬいぐるみが暴れたところで何だって言うのよ。それより聞いた？　掃除（そうじ）係の子が言ってたんだけど、寝室（しんしつ）を掃除してると男の匂（にお）いがするって話。もしかして、ティリス様がこっそり誰かを連れ込んでるとか……！」

　夜番らしきメイド達が談笑（だんしょう）しながら廊下（ろうか）を通り過ぎる中、俺は中庭の茂みに身を隠す。

　このままメイドの後を付いていきたいところだが、本来の目的から外れてしまう。

しまう

俺はメイドさんをやり過ごすと、今夜も城の壁をよじ登る。

当然、行き着くところは――

《悪行ポイントが大量に加算されます》

ポイントの大量ゲットのアナウンスを聞きながら、俺は感慨に耽っていた。

（無防備な寝顔をしやがって……）

いつもの大人びた表情や絶やさない笑みはなりを潜め、俺の目の前では

ティリスが年相応の寝顔を見せている。

政治的駆け引きに長け、この国を一身に背負う少女。

頼りない父に代わり全てを取り仕切る中枢にして、皆に慕われる存在。

俺は、そんな国の至宝の前で、おもむろに戦闘服を脱ぎ捨てると――

ベッドで寝ているティリスの傍で、音を立てないように気を付けながら、持ってきたジェンガを組み立て始めた。

『あたらしい部下ができた！』

　せんとういん六号へ。
　お元気ですか？
　あたしは元気です。
　こっちでは毎日、ヒーローがとても強いです。
　六号のほうこくを読んで、アスタロトがおこったり心配したりしています。
　あたしが動物にこうげきできないのを知って、中国からきたパンダ型ヒーローがとても強いのがズルいです。
　あたしの家に部下がとんできました。
　六号みたいに変なことばかり言う変な部下です。
　きっと六号と気があうやつらだとおもいます。
　地球に帰ってきたらあわせます。
　はやく帰ってきてほしいなあ。

ベリアル

三章　商売せよ！

1

「おっ、いい女じゃねえか。そんな所で一人で飲んでないで、こっち来て酌してくれよ、姉ちゃんよお！」

「な、なんですかあなたは⁉　や、やめてください！」

アジト建設が失敗に終わり暇を持て余した俺は、場末の酒場で飲んだくれる毎日を過ごしていた。

「いいからこっち来いよ！　なーに、大人しくしてれば悪いようにはしねえか

らよお。飯を奢ってやるって言ってんだ！」

「う、嘘です！　そんな事を言っても、私騙されませんから！　ご飯だけで済ませるつもりなんてないくせに！」

　別に本気でナンパしているわけではない。

　これは憂さ晴らしも兼ねての悪行ポイント稼ぎだ。

　そんなわけで、俺は一人で飲んでいた見知らぬ女に絡んでみたのだが……。

「心配するなよ姉ちゃん、なーに、ほんのちょっとばかりコイツを食ってもらうだけさ。特濃ミルクのフワフワソースモケ！　へへっ、コイツを奢ってやるから酌してくれや！　そうら、お代わりもあるぜ！」

「嘘よ！　どうせ食べ終わったら『次は俺様の特濃ミルクを飲ませてやるよ！』とか言って私に酷いことするんでしょう！　騙されないわよ！」

こいつ公衆の面前でなんて事言うんだ。
「い、いや、そんなおっさんみたいな事は言わねえよ……。ちょっと嫌(いや)がりながらモケモケ食ってもらうだけだって。ほら、あーんしろよ」
「嘘よ、絶対嘘！　そんな事言いながら白濁(はくだく)色のソレを私の口に押し込んだあと、白い物で汚(よご)れた私の顔を見てムラムラしたあなたは『さーて、次は違うお口で食べてみようか』とか言って……」
「さっきから何言ってんだ！　あっ、ちょっと待てよ、悪行ポイントが増えてねえ！　ていうかあんたに見覚えあるぞ！」
　どこで見たのかは思い出せないが、俺は確かにこの女に会っている。
「ああっ、このまま散々弄(もてあそ)ばれたあと、私の体を気に入ったこの人に、湖近くの綺麗(きれい)な別荘(べっそう)に監禁(かんきん)されるんだわ……。そして次々に子供達を産まされた私は、やがてたくさんの孫に囲まれながら幸せな最期(さいご)を……！」

「そんな事しないって言ってんだろ！　もういいよ、見逃してやるからどっか行けよ！」
　宥めるように言い聞かせるも、変な女は声を張り上げ、
「いやあああああああ！　期待させるだけさせておいて、そのまま放置だなんていやあああああああ！　暗がりで変な物を見せつけようとしたクセに、また私を置いていくの!?」
「こらっ、なんて事言うんだ、人が見てるだろ！　これまでの会計持ってやるから、もうあっち行けよ！」
　なんてこった、地雷を引いた！
……と、その時。
　変な女の会計をひったくっていると、そんな俺達に突然声が掛けられる。
「随分と探したわよ。隊長ってばこんな所にいたのね……。ほらっ、見ての通

りの女連れよ！　あっちへお行き！」
　変な女を威嚇するかのようにシッシと追い払うのは、狭い店内で車椅子に乗った迷惑女だった。
　舌打ちしながら店から去っていく変な女を見送りながら、グリムがこちらに振り向いた。
「まったく、隊長はちょっと目を離すとすぐ女の知り合いを増やすんだから。たらし？　隊長ってばたらしなの？」
「女に囲まれてるのは否定しないが、さっきのも含めてどいつもこいつも地雷ばっかだぞ」
「隊長も案外大変なのね。奢ってくれるなら、いつでもデートに付き合ってあげるからね」
　お前が一番の地雷女なんだぞ。

「それにしても今回の復活は随分時間がかかったな？」
「それなのよね。私、ゾンビ達を解放してあげたところまでは覚えてるんだけど、何が原因で死んだのか分からないの。しかも死んでる間、ゼナリス様を自称（じしょう）する変な女に説教される夢を見たわ」
それ本当に夢なのか？
あの世的な場所で叱（しか）られてたんじゃないのか？
こいつが大司教ってマジなのか？
「どうしたの、何か言いたそうな変な顔して……。それより隊長、聞いたわよ！　アジト建設が失敗したんですって!?　それで、毎日暇を持て余してるとか！」
何かを期待するかのような明るい顔をするグリム。
「いや、明日（あした）は仲良くなったホームレスのおっさん達と廃材（はいざい）集めに行くんだ

よ。これがそこそこの金になってな。アリスに貰った小遣いも全部使っちゃってさ」
「お願いだからそんな恥ずかしい事しないで！　あっ？　ちょっと待って、お小遣い使っちゃったって、ここの払いはどうする気なの？」
「お前、俺の足の速さを知らないのかよ。酒場のおっさんを撒くぐらいわけねーぜ」
「仮にも軍に所属しているんだし、目の前で食い逃げなんてさせないわよ！　くっ、しょうがないわね……！」
　グリムが財布を取り出し会計を済ませている間に俺はそのまま店を出る。
　あの店は失敗だったな、変な女が居着いてるみたいだし次からは他に行こ

う。
　と、二軒目の店を探して夜道をフラフラしていると、後ろから何かにぶつかられた。
「なんで私を置いていくのよ！　女に払わせといてお礼もなく消えるだなんて！」
　ぶつかってきたのはグリムだった。
「ありがとう、ごちそうさま」
「どういたしまして！　それより隊長、ちょっといい？　結構大事な話があるのよ」
　グリムはいつになく真剣な顔で俺の隣をキイキイと車椅子をこいでいる。
「今から二軒目に行くから、そこでいいなら聞いてやるよ」
「お金も無いのにどうして行くのよ！　……うう、今回の復活で結構出費

ががさんだのに……」
　切なそうに財布の中身を覗きながらグリムが小さく嘆いている。
「お前、普段はカップル狩りとかバカな事やるくせに変なとこで真面目なんだな」
「カップル狩りはゼナリス教徒の義務だからね。ねえ隊長、奢ってあげるから話を聞いて。最近、街の空気が変なのよ」
　そりゃあ、まあ……。
「だってこの星じゃあ今は春だろ？　カップルも盛って浮かれるよ。あんな感じで」
「違うわよ、そういう意味で空気が変って言ってるんじゃないの！　……その二人、往来でイチャイチャしてるんじゃないわよ、呪うわよ！」
　俺が指さしたカップルをひとしきり威嚇したグリムは、

「あの時出くわしたゾンビ達なんだけど……どうも様子がおかしかったのよね」

そう言って、いつになく真剣な顔で眉(まゆ)を顰(ひそ)めた。

2

グリムに案内されたのは、俺一人ではまず来ないような小洒落(こじゃれ)た店。

青白い灯(あか)りが店内をほのかに照らす中、客の前には色鮮(いろあざ)やかなカクテルが置かれていた。

「それでね、隊長。私はアンデッドの友であり仲間なの。それなのに、彼等は私の言葉に耳も傾(かたむ)けなかったわ。まるで何者かに操(あやつ)られているかのように……」

「マスター、ピンクのヤツおかわり。あと、腹に溜(た)まるつまみを持ってきて」

物憂げにカクテルをくゆらせていたグリムの隣で俺は追加を注文する。
店内は女性比率が高く、思わずキョロキョロしてしまう。
運ばれてきたピンク色のカクテルを一気にあおり、スコーンみたいな物を頬張った。
ここで酔った勢いで全裸になったらどれだけの悪行ポイントが稼げるだろうか。
「……これからアンデッド祭りが始まろうとしているのに、この異常事態よ。大司教としての勘だけど、祭りに乗じて何かが起こりそうな気がするわ」
「マスター、ピンクのヤツおかわり。それと、もうちょい強い酒も頼む。こう、渋い男に似合いそうな茶色いヤツな」
俺はそこまで酒は強くないが、改造人間の毒素分解機能のおかげで酔いが覚めるのは早いのだ。

グリムの奢りという事で、高そうな茶色いヤツにも挑戦だ。
「……た、隊長？　あまり頼みすぎないでね？　お財布の中身が心許ないから……。それと、私の話をちゃんと聞いてる？」
「聞いてる聞いてる、金に困ったスノウが自分のおっぱいの型取って、プリンを作って売り始めたんだろ」
「まったく聞いてないじゃない！　それと、その商売の話はスノウに言っちゃダメだからね！　困窮した今のあの子だとやりかねないから！」
自分で言っといてなんだがバカな男に売れそうだな。
今度スノウに持ちかけてみようか。
「マスター、あそこにいるえらい綺麗な姉ちゃんにカクテルを。あちらのお客様からです、ってのをやってくれ」
「そういうのは私のお金じゃなくて自分のお金でやりなさいよ！　こんない小女が隣にいるのにナンパしないで！」

い女が隊にいるのは[illegible]しないで」
　運ばれてきた茶色いヤツの強いアルコールの香りに飲むのをためらっていると、グリムがゆさゆさと揺さぶってくる。
「しょうがねえな、グリムにも奢ってやるよ。ほら、コイツを飲め」
「飲めないのなら最初から頼まないで！　ねえ隊長、真面目に聞いて！　私がこの国でクビにならないのもアンデッド祭りを取り仕切っているからなんだからね、そのお金でこうして奢ってるんだから！」
　必死になって訴えるグリムに向けて、
「まあ落ち着けよ、俺達は悪の組織だぞ？　むしろトラブルは持ってこいだ。揉め事があれば介入し、難癖つけて金に換えるのは基本だ。あと、祭りの方も任せとけ。祭りと言えば屋台。屋台と言えばキサラギ。祭りの仕切りからショバ代の徴収まで、完璧なマニュアルがあるからな」
「ちょっと待って、私は悪の組織とやらに入った覚えはないんだけど　。そ

れと、アンデッド祭りは神聖なものだからね？　お金儲（かねもう）けの場じゃないからね？」

グリムが不安そうな表情を浮かべていると、遠く離（はな）れた席では一人でお酒を飲んでいた綺麗なお姉さんが、マスターからカクテルを手渡（てわた）されこちらをチラチラと覗（うかが）っていた。

どうやら、あちらのお客様からです、をやってくれているらしい。

お姉さんはマスターから何かを囁（ささや）かれ……。

なぜかグリムをジッと見て、ボッと頬を赤らめた。

「……隊長、なんかあの人が私の方を見てるんだけど……」

戻（もど）ってきたマスターに何を言ったのか尋（たず）ねてみる。

「いえ、会計はそちらのお嬢様（じょうさま）が持つとの事らしいので、カクテルを渡し、『あちらのお嬢様からです』と……」

「なんて事言ってくれるの!?　凄い熱視線を感じるんだけど冗談よね？　……ちょっと待って、なんかこっちに来てるんだけど！」

俺はカクテルを飲み干すと、ワタワタと慌てるグリムに向けて。

「色んな意味でごちそうさま」

「何一人で帰ろうとしてるのよ！　隊長、ちょっと待って！　置いてかないで！」

——グリムを置いてアジトに帰ると、こんな時間にも拘わらず出掛ける準備をしていた同僚に出くわした。

同僚の名は戦闘員十号。

この星では俺に次ぐ古参兵で、色んな意味で皆に一目置かれている男だ。

真剣な表情で持ち物を確認する戦闘員十号は、装備を見るに俺と同じ

目的のようだった。

俺と十号は他の連中を起こさぬよう、互いに無言で頷き合う。

今夜はこの星にしては珍しい曇り空。

これなら仕事がやりやすそうだ――

（六号より十号へ。この先に門番が二名、注意されたし。城の外壁にはクライミング用のくいが打たれている。晴れの日は月明かりのせいで使い辛いが、今夜はこのルートで行けそうだ。オーバー）

（十号より六号へ。城を囲う外壁の下に、侵入用の穴を掘ってある。今夜はくい打ちルートを使用するが、晴れの日はそちらのルートを使うといい。オーバー）

集団スニーキングミッションには必須のピンマイク型の無線を使い、俺と十号は互いに有益な情報を送り合う。

ぶっちゃけ互いの距離(きょり)は1メートルも離れていないのでわざわざこんな物を使う必要もないのだが、そこはミッションのための雰囲気(ふんいき)作りだ。

俺は普段使っているくいの下にほふく前進で近付くと、辺りを見回しサインを送った。

壁(かべ)に打ち込まれたくいに手を掛けると、ふと足下(あしもと)が浮き上がり体重が軽くなる。

後ろを見ずとも気配を感じる。

音も無く背後に佇(たたず)んだ十号が、登りやすいように俺の足を持ち上げたのだ。

こういうミッションにおいてはやはり呼吸の合った同僚のサポートに頼もしさを感じてしまう。

しさを隠してしまう。
俺は最上部のくいに右手を掛けると、自らの体を持ち上げながら左手を差し伸べた。
十号がその手を掴み、互いに勢いをつけて一気に外壁をよじ登る。
十号と共に中庭へと侵入した俺は、例によっていつものごとく、懐から瓶を取り出した。
中身が少なくなってきたので、またトラ男にお願いして補充しなければならない。
正直変な目で見られるので、あまりやりたくもないのだが……。
と、それを見ていた十号は瓶の中身は取っておけとばかりにチッチッと口の前で小さく指を振ると、ドヤ顔で紙包みを見せてくる。
それと共に取り出したのは何かの肉。
その色艶から、俺の好物のモケモケである事が見て取れた。

紙包みの中身を肉にかけ始めた十号を見て、眠り薬を使う気なのだと理解する。

高級食材であるモケモケと結構な悪行ポイントを使う即効性の眠り薬。

（ヒューウ）

（ふっ、よせよ……）

その豪快さに小さく口笛を吹いて冷やかす俺に、十号がにやけながら返してきた。

やがて十号は、犬が放たれている方向にビッと鋭い音を立ててモケ肉を投げ込むと、息を殺して身を隠し――

「ギャンギャンギャンッ！」

「ワオーン！　ワオーン！」

「なんだ、何事だ!?」

「犬が吠(ほ)えてるぞ、侵入者か？」
　モケモケ肉はお気に召(め)さなかったのか、犬達が大騒(おおさわ)ぎを始めた。
（バカッ！　十号のバカッ！　さっきまでの自信ありそうなドヤ顔は何だったんだよ！）
（前回は上手(うま)くいったんだ。きっとあの犬達は、今夜はスポポ肉の気分だったのさ。それより急いでこの場を離れる。六号、俺に付いてこい！）
（大丈夫(だいじょうぶ)かなあ。コイツ本当に大丈夫かなあ）
　この期(ご)に及(およ)んで謎(なぞ)の自信を崩(くず)さない十号に、俺は不安を覚えながらも付いていく。
（大体、お前が背負ってるその大荷物は何なんだよ。もっとコンパクトにまとめられないのか？）

すべ

(コレは全て必要な物なんだ。目的地に着けば分かる。それよりほら、コイツを使え)

光学迷彩(めいさい)を使用した十号は、俺にも同じ物を渡してきた。

電磁シールドを張り巡(めぐ)らせて光をねじ曲げ、近くに寄らないと目視出来ない高級装備だ。

こういった物を惜(お)しげも無く使う十号は、一体どうやって悪行ポイントを貯(た)めているのだろう。

(前から思ってたんだけど十号って悪行ポイント長者だよな。どんな事して稼(かせ)いでるの?)

(俺には反抗(はんこう)期の妹がいてな。妹のタンスに収まってみたり妹のパンツを天ぷらにして食(く)ったり妹の部屋でうんこしただけだ)

(そっかあ。俺には参考にならないなあ)

（[illegible]……）

俺は受け取った光学迷彩を起動させると、犬に居場所を探られないよう、トラ男のオシッコを振り撒いた。

——今夜も無事、目的地に到達出来た。

《悪行ポイントが大量に加算されます》

すやすやと眠るティリスを前に、やっぱり流れる大量ゲットのアナウンス。

前々から思っていたが、悪行ポイントの計算は一体どうなっているのだろう。

相手の同意があればポイントが入らなかったり、同じ行為が続くとポイント減ったりと、いまいち基準があやふやだ。

俺は十号と共に頷き合うと、互いに戦闘服を脱ぎだした。

（六号、コイツをそこに置いてくれ）

ティーシャツと短パン姿でくつろいでいる俺の隣で、一糸まとわぬ全裸になった十号は、背負っていた荷物の中から何かを取り出し渡してきた。

それは匂いを吸い取る携帯型の空気吸引器。

本来であれば喫煙のために携帯灰皿と一緒に使う物なのだが。

ティリスの寝顔を見ながらここで一服するのかと思っていると、十号は続いて七輪を取り出した。

ここまでくれば俺にも分かる。

ここで焼き肉パーティーをするつもりなのだ。

（さすがだぜ十号、お前頭おかしいな。寝ている女の子の前で焼き肉とか、脳みそ一体どうなってるんだ）

（おっと、そいつは褒め言葉だと受け止めておくぜ。ほら、光が出ない無光ヒーターだ。モケモケ肉もたくさんあるぞ。この肉は、焼く際に音が鳴らないか

らこういう状況では重宝するんだ）
二度とこういう状況は起こらないと思うが、この配慮が出来る男の違いなのだろう。
静かな寝息を立てるティリスの横で、俺達二人はモケモケ肉を堪能した
―

3

色んな意味で美味しい一夜を過ごした、その翌日の夕暮れ時。
ここ最近は国境線での小競り合いもなく、戦う事しか能が無い俺とロゼが、祭りの屋台を冷やかしていると……。

越えてはいけない一線を、遠慮なく踏み越えている人を見付けた。
「可愛いー！　トラちゃんだ！」
「中には誰が入ってるの？　私のお爺ちゃん？」
「ミーシャのところの婆ちゃんじゃないの？」
　幸せそうな顔をしているトラ男が三人の子供に囲まれていた。
　重度のロリコンであるこの怪人は、祭りに乗じてぬいぐるみのフリをしているようだ。
「ロゼ、行くぞ。キサラギでは色んな悪事が推奨されてるが、子供に性的な意味で手を出す行為だけは死刑だ。ラッセルは年齢的にギリギリセウトといったところだが、アレはアウト。ロゼは正面から気を惹いてくれ。長い間お世話になった怪人だ。せめて最後は俺の手で仕留めてやる」
「家長、どうか落ち着いてください！　どう見ても子供達の方から纏わり

「隊長、どうか落ち着いてください　どう見ても子供達の方から絡み付かれてるだけですよ⁉」
ラッセルと共に普段お菓子を与えられているロゼがトラ男を擁護した。
だが、それこそがロリコンの手段なのだ。
良いロリコンは子供に近付かないロリコンだけだ。
「くたばりやがれ、このペド野郎！」
「うおおおおお⁉　血迷ったのか六号、テメエいきなり何するにゃん！」
ロゼの援護が受けられないと知り、俺はトラ男の背後からRバッソーで斬り掛かった。
だがさすがは怪人なだけはあり、野生の勘で回避される。
「残念っスよトラ男さん。あんたはロリコンだが紳士な人だと思ってました。子供に手を出したヤツは死刑。これはキサラギの鉄の掟です」
「ふざけるな、誰が手を出すか！　俺は近い将来、改造手術でちいちゃくし

て貰う予定の筋金入りだ！　ロリコンとペドフィリアを一緒にするな！」
語尾のにゃんを忘れるぐらいの魂の叫びにトラ男、いやトラ男さんの本気を知った。
「すいませんトラ男さん、俺が間違ってました。そうですよね、トラ男さんが改造手術で怪人になったのは、着ぐるみみたいな外見なら子供に好かれそうだからだ、なんて邪推するヤツがいたもんで、ちょっとだけ疑ってました。すんません」
「お、おう。分かればいいにゃん。ちなみに誰がそんな事言ってたんだ？　怪人になったその理由は、リリス様にしか言ってないはずにゃん」
やっぱりここで仕留めておこうか。
だがまあ今回はワンアウトという事で様子を見よう。

「お前が物騒な物持って騒ぐから、子供達が逃げちまったじゃねえかにゃー。子供達が心配だから陰ながら街を守るにゃん。怪人の野生の勘が、何かが起こると囁いてるにゃあ」

「ガキ共を守るのはいいんスけど、絵面的にヤバいんであまり近寄らないでくださいね」

去って行くトラ男をロゼと共に見送っていると、何かが高速で迫ってくる音がした。

その音に背後を振り向けば、必死の形相を浮かべたグリムの姿が。

「居たあああああああああ！」

グリムは喧しい叫びを上げながら、こちらを目掛けて疾走してきた。

「昨日はやってくれたわね、おかげで散々だったわよ！　情熱的に口説かれて、幸せにしてくれるのならもう女の人でもいいかなって、危うく道を踏み外すところだったわ！」

「なんだよ、モテ自慢かよ。おいロゼ、あっちの屋台に美味そうなのが売ってるぞ。奢ってくれよ」

「あたし、お給料が入ると全部食費に消えちゃうから、お小遣い残ってないですよ。せめて匂いだけでも嗅ぎに行きましょう」

　屋台の前で鼻をヒクつかせる俺達に店主が迷惑そうな顔をする中、グリムが財布を取り出した。

「恥ずかしいからやめなさい、私が奢ってあげるから！　ああ……結婚資金のために大事に貯めてたお金が、隊長と知り合ってから目減りしていく……」

さめざめと泣いているグリムの横で、買ってもらった串焼き(くしや)を頬張(ほおば)っていると……。
「わあ、隊長見てください！　アンデッドパレードですよ！　気が早くてお祭りより先に来ちゃった霊(れい)達が、ああして街を練り歩くんです。あの依り代(よりしろ)達は全部グリムが作ったんですよ」
「そうよ、女子力高いでしょう？　お裁縫(さいほう)だけじゃなく、家事全般(ぜんぱん)も得意だからね！」
　ロゼの言葉で、急に勢い付いたグリムが騒ぐ。
「女子力高いのはいいんだけどさ。依り代がぬいぐるみなのはどうにかならないのか？　アレの中身はおっさんとかおばさんが多いんだろ？」
「確かに年配の人が多いけど言葉を選びなさいな。中には年若いゴーストだ

って……。……まあ、ぬいぐるみに入ったお爺ちゃんとかも可愛いじゃない……」

この場の依り代を見てみた結果、年配の人しかいなかったらしい。

俺達の目の前を、そんな人間大のぬいぐるみ達が通り過ぎていく。

見た目はファンシーな集団なのに、こいつらは全部ゴースト憑きなのか。

わんぱくなガキ共がぬいぐるみ達の後を付いて回り、中には蹴りをくれるヤツもいる。

あっ、アイツ俺を事あるごとにチャックマン呼ばわりするクソガキだ！

俺は公衆の面前でクソガキのパンツを下ろしてやろうと、そろそろと近付いていき……。

——そこにいたぬいぐるみ達に突然襲い掛かられた。
「うおおおっ！　この野郎、何しやがる！　お前らには何もしてねえだろ、俺はこのガキのパンツを下ろそうとしただけで……！」
「隊長、なんでそんなバカな事しようとしたんですか!?　ぬいぐるみの中身は亡くなったこの街の住人達です、その子の関係者じゃないんですか!?」
　俺の言葉にロゼが叫び、ぬいぐるみ達が殴り掛かる。
　一体二体ならどうにかなるが、さすがにこの数は避けきれない。
　俺は攻撃を貰う覚悟を決めて、カウンターを決めようと……！
「隊長、あたし、なんか幸せです。もうちょっとこのままでもいいかもです」
「俺も殺伐としたこの星で初めて癒やされた気がするよ」

ぬいぐるみ達にポンポンと殴られながら、なんだかホンワカした気分になる。
　中にゴーストが詰まっていても、こういうのなら大歓迎だ。
「二人とも気を付けて！　やっぱり様子がおかしいわ！　私の作った依り代には、入る前に生者に危害を加えない事を誓って貰うの。なのに彼らは平気で隊長を攻撃してるわ。となれば、近くにネクロマンサーがいるかもしれない……」
　ぬいぐるみに囲まれる俺達に、一人グリムだけが警戒の声を上げている。
　こんなファンシーなのに殴られても、じゃれつかれてるようにしか思えないんだが。
　と、グリムが突然ぬいぐるみ達を指さした。
「私はゼナリス様に仕える大司教、グリム。今あなた達が使っている、仮初めの体を与えた者よ。直ちに危害を加えるのをやめなさい。さもなくば、不死

の加護を取り上げてゼナリス様の下（もと）に送るわよ……！」
　真剣（しんけん）な表情で宣言するグリムに向けて、ロゼがあっと声を上げた。
「ダメだよグリム、アンデッドの加護を外すなら文言に気を付けて……」
　ロゼが言いかけたその瞬間（しゅんかん）。
「偉大（いだい）なるゼナリス様！　この場にいる愚（おろ）かなる不死者達から、その加護を外したまえ！」
　堂々たる宣言と共に、未（いま）だ殴り掛かるのをやめないぬいぐるみ達が一斉（いっせい）に倒（たお）れ伏（ふ）す。
　そして――
「……もうコイツ、祭りの間は復活させない方がいいんじゃないのか？」
「……また思い出の品が減ってくなあ……」
　車椅子（くるまいす）の上で糸が切れたように動かなくなった愚かなる不死者を、復活

させるべきかどうかでしばらく悩(なや)んだ——

4

ロゼと二人で悩んだ末、グリムを例の洞窟(どうくつ)に運んだその翌日。

「六号、ボクの仕事の邪魔(じゃま)にしかなってないよ。洗い終わった洗濯物(せんたくもの)は、ちゃんとパンッて張って、皺(しわ)を伸(の)ばしてから干してね」

「なんだよ、妙(みょう)なこだわり見せやがって。ちょっとばかし他(ほか)の連中に必要とされてるからって調子に乗るなよ」

俺は仮のアジトである公園で、ラッセルと二人洗濯物を干していた。

さすがは元魔王軍幹部とも言うべきか、この短期間でメイドの仕事を完(かん)

壁にこなしていき、今では戦闘員達のお母さん的存在になりかけている。

「おいラッセル、今晩の飯はカレーって聞いたぞ。肉多めにしてニンジンとジャガイモは抜いとけよ。タマネギはそのまんまでいいからな」

「何バカな事言ってるのさ、そんなワガママは許さないよ。あっ、パンツだけは自分で洗ってね。終わったら籠に入れとけば干しとくから」

こいつすっかり順応しやがって。

キメラだから環境への適応が早いのだろうか。

――自分のパンツを洗い終え、ラッセルに飯の時間まで遊んで来いと追い払われた俺は、暇そうにしていたアリスと二人、街の中をうろついていた。

「おい六号、あそこに普段見ない屋台があるぞ。お前ちょっと行って来い」

辺りを興味深く見ていたアリスが、この国では最も多い屋台である、串焼き店を指さし言ってくる。

祭りと言えば屋台。
　屋台と言えば、そう、俺達の出番である。
「あれは串焼きの屋台だな、任せとけ。……おうおうおう、一体誰に断ってこんな所で店出してんだ！　おら、一本寄越しな！」
「保健所と国に断ってますが……」
　よく分からない事を言ってくる屋台の店主は、串焼きを一本手渡してきた。
　アリスに代金を払って貰い、焼きたての串を頬張った。
「ケッ、コイツは一体何の肉だ？　食った事のねえ味だなあ！　人に言えない肉でも使ってんじゃねえのかあ？」
　まずは挨拶代わりの因縁付け。
　俺達の要求を聞き入れなければこの店の悪評を広めるぞと脅すのだ。

「…………そ、そんな事は……ないですよ？」
　店主は俺の脅しに怯え、汗を垂らしながら目を逸ら……、
「……おいちょっと待てよ。この串焼き何の肉？　そういえば肉の種類が書いてないけど、これって何使ってんの？」
「オ、オーク肉ですよオーク肉！　何の変哲も無いオーク肉です！　ウチに疚しい事なんてありませんって！　ほら、商売の邪魔するなら警察を……呼びはしませんが、人を呼んで大事に……。……クソ、それも困るな……」
…………。
「おっさん、今なんか言ったろ！　警察沙汰になったら困るような肉使ってんだろ!!」
　演技ではなく俺が本気で焦って詰め寄るも、店主はこちらを見ようとし

ない。
「おい六号。この肉、自分の目でも正体の判別がつかねえぞ」
「アリスが何の肉だか分からないって事は相当だぞ！　待ってろ、今警察呼んでやる！」
「ま、待ってください！　分かりました、分かりましたよ！　へへ、旦那も罪作りな人だ。串焼きを五本ほどサービスします。ですので、どうかくれぐれも内密に……」
あくどい顔で串焼きを手に言ってくるが、だからその肉はなんなんだ。
俺は本当に何食わされたんだ。
「この店は営業させたらダメな気がする！　ちょっと来い、お前警察に突き出してやる！」

「旦那、分かった！　分かりましたよ！　なら串焼き七本だ、いや八本！　ええい、十本あげますからこの事は……！」
　と、俺が店主を連行しようとした、その時だった。
「貴様は何をやっているのだ……」
　いつの間にそこに居たのか、呆れ顔のスノウが立っていた。
「あっ！　おい借金女、ちょうどいいところに来たな。このおっさんが正体の知れない謎の肉を売ってんだ。お前一応は騎士なんだろ、このおっさんを連行してくれ」
「ま、待ってください、別に違法な肉を売ってるわけではありませんよ！　ただちょっとクセがあるだけで……」
　俺と店主の言葉を受けて、スノウが串焼きに顔を寄せ……、
「ッ!?　て、店主、貴様はなんて物を……。いや、違法ではない。確かに違法ではないが、しかし……」

だから一体何の肉だよ。
……と、表情を変えたスノウの手に、店主がソッと何かを渡す。
「騎士様、これはほんの気持ちです。ええ、アンデッド祭りの準備がこうして無事に進められているのも、こうして騎士様に巡回していただいているおかげですので……」
「そ、そうか？　う、うん、そうだな。しかしこの肉は……。いやまあ、別に体に害があるわけでもないし、知らずに食べればタダの肉だからな！」
「そうです、タダの肉ですとも！　はははははは！」
賄賂を受け取りご満悦のスノウと笑う店主。
俺は、アリスが近くの派出所から引き連れてきた警官に、そんな二人を指さすと。
「お巡りさん、アイツらです」

5

「……まったく、貴様のおかげで稼ぎ損ねたではないか。人のバイトを邪魔するのであれば私にも考えがあるぞ」
「俺が言うのもなんだけど、アレをバイトと言い張るのか」
　先ほどからこの女は、警察に色々と注意され屋台を畳んだ店主に賄賂を返し、それからずっと機嫌が斜めだ。
　謎肉を見た警官がドン引きしていたが、何の肉だったのか本当に気になる。
「バカめ、巡回中に本当にマズい商売をしていたならちゃんと取り締まる。祭

りの期間中であればグレーゾーンの商売は見逃してやってもいいのだが、野放しにすると調子に乗るからな。適度な締め付けが必要なのだ」
「でもお前、賄賂返す時半泣きになって嫌がってたじゃん。警官に当たり散らしてたじゃん」
「う、うるさい！　少しでも金を稼いでアリス様に早く借金を返すのだ。何かいい商売があれば是非とも教えてくれるがいい。儲かったらちゃんと分け前をやるぞ」
　スノウの言葉に、自らの型を取って作ったおっぱいプリンを提案しようか悩んだが、一応は部下のコイツがそこまで墜ちる姿は見たくない。
　既に手遅れ感はあるのだが……。
　と、スノウに残念な子を見る視線を送っていると、アリスが袖を引っ張ってきた。

「そんな事より六号、あちこちにいるぬいぐるみを襲撃しないか？　グリムいわく、あの中にはゴーストとやらが詰まってるんだろ。どんなペテンか知らないが、科学の力で片っ端から正体を暴いてやろうぜ」

「お前は本当にファンタジーが嫌いなんだな。あの中身ってこの街の元住人なんだろ？　いじめ回すと怒られるぞ」

そんな俺達のやり取りに、スノウが嫌そうな顔で言ってくる。

「お前達、何をする気だ？　いくらアリス様とはいえ、死者を迎える祭りの妨害はやめて欲しいのだが……」

と、その時だった。

俺達の目の前で、やけに機敏なぬいぐるみが辺りをキョロキョロしながら歩いていた。

そのウサ耳が付いたピンク色のぬいぐるみは、俺達が仮のアジトにしている公園の方に向かって行く。

る公園の方に向かって行く

なんとなく不審に思った俺達は、その後を付いていく。

ウサぐるみは俺達に気付く事なく、公園へとやって来た。

そのまま茂みの中に分け入ると、俺達のアジトを遠巻きにジッと観察し……。

——背後からアリスの奇襲を食らい、ウサぐるみは押し倒された。

「六号、挙動のおかしいのを捕らえたぞ。コイツの中身を引きずり出そう」

「でかしたアリス、ちょっと待ってろ、今ロープで縛り上げて……。おっ、なんだコイツ、やけに暴れるな。こらっ、大人しくしろ!」

なコイツ、やけに暴れるな。こら！　大人しくしろ！」

「──ッ！　──ッッ!!」

　ウサぐるみの中からくぐもった声が聞こえてくるが、ゴーストに声帯があるのだろうか。

　アリスに組み付かれたウサぐるみは俺にロープを掛けられると、ジタバタと抵抗してきた。

「お、おいお前達！　その中にはグレイスのために戦った霊が入っているのだ。あまり手荒な真似は……」

　スノウが俺達を止めようとするが、このウサぐるみは思った以上に抵抗が激しい。

「コイツ、ゴーストのくせに力があるな。アリス、ちょっとしばいて分からせて

やれ。このぬいぐるみをサンドバッグ代わりに……」

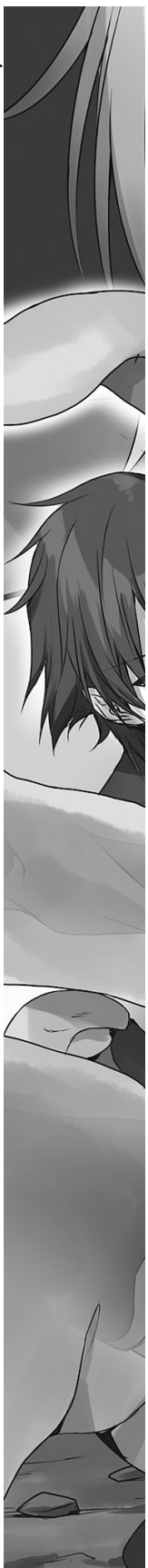
アリスにそう言いながらウサぐるみの体にロープを回すと、何か柔らかい感触が伝わってきた。

ゲシゲシと蹴りつけてくるアリスは無視し、なぜか俺の手を掴み抵抗してくるウサぐるみ。

このウサぐるみもグリムが製作したのだろうか？

やけに抱き心地がいいと言うか、家に一匹欲しいぐらいだ。

《悪行ポイントが加算されます。悪行ポイントが加算されます》

ウサぐるみに触る度、なぜかポイントが加算される。

妙(みょう)に気持ちの良い感触に俺があちこちをいじくり回していた、その時だった。

「――ッ！　――ッッ！　い、いい加減にしなッ！」

ウサぐるみが声を上げたかと思えば立ち上がり、その手に炎(ほのお)を浮(う)かべて見せた。

一瞬(いっしゅん)ゴーストが魔法(まほう)を使うのかと疑問に思うも、その声は聞き覚えがある。

「随分(ずいぶん)といじくり回してくれたもんだね！　舐(な)めやがって、今度こそ決着を――！」

ウサぐるみが何かを言いかけると、手の上にある炎が体に引火した。

「――ッ！　――ッ！　――ッッ!!」

突然燃え上がったウサぐるみが、火を消そうと地面を転がり回る。

元々炎に対して強い耐性があるのだろう。

ウサぐるみを強引に断ち割り、その中から飛び出してきたのは――

「はあっ、はあっ……！　ひ、久しぶりだね六号。中にアタシが入ってる事を見抜いて襲ってくるだなんて流石だね！」

褐色の肌に豊満な体。

申し訳程度に身に着けられた水着みたいなエロ衣装。

「こ、こんな街中で正体を暴かれるとは思わなかったが、バレた以上は仕方ない。さあ六号、どこからでも……！」

自分の炎で死にかけた事を誤魔化すように早口で何かを言いかけていた炎のハイネは、それはもうアッサリ捕らえられた。

6

グレイスの街の公園前。

俺達のアジトから少し離れた芝生の上で、涙目のハイネが上半身をロープで縛られ転がされていた。

「まさかぬいぐるみの中からハイネが飛び出してくるなんてな。おいアリス、ぬいぐるみガチャを引いたらSSRが出たぞ」

「ぬいぐるみガチャってなんだ。バカ、こんな街中を闊歩するぬいぐるみは

こめいくるみガチャってなんだ？　しかし、これで街中を闊歩するめいくるみは中に人が入ってると証明されたな。やっぱりゴーストなんていないだろ」
　そんな事を言い合っている俺達の前では、満面の笑みを浮かべたスノウがハイネの前にかがみ込み……。
「ハハハハハハハ！　まさか魔王軍四天王が一人でこんな所にいるとはなあ！　なんだ貴様は、私のボーナスになりたかったのか？　無様に地面に転がされ、実にいい姿だな！」
　性根の拗くれ曲がったドS女がハイネを見下ろし笑っていた。
　それに対してハイネは目尻に涙を溜めながら、それでも反抗的な目でグッと堪えて黙秘する。
「ククク、この街に一体何しに来たのか、これからたっぷりいたぶり聞き出してやろう。……くふう……っっ！」
　一体何を想像したのか、スノウが上気した額で自らの体を抱いてブルリ

とその身を震(ふる)わせた。
「おい、ハイネの尋問(じんもん)は俺がやる。お前は邪魔(じゃま)にならないようあっちに行ってろ」
クネクネしているスノウを押しのけ前に出る。
ハイネは俺の顔を見ると、途端(とたん)に顔色を青ざめさせた。
「なっ……、バカな！　気の強いこの女を見下しながらいたぶれるのだぞ！　貴様はエロい事がしたいだけだろう、私にやらせろ！」
「バカッ、こんな格好した女幹部を捕らえたんだぞ！　エロい尋問しなくてどうする、世界の法則が乱れるだろうが！」
喧嘩(けんか)を始めた俺達をよそに、アリスが注射器を取り出しかがみ込む。
「尋問なんて面倒(めんどう)くせえ、こういうのは自分に任せとけ。強烈(きょうれつ)な自白剤(ざい)を打

って全ての情報を引き出してやる。それでも耐えたら外科手術で頭を直接弄ってやろう」
「ヒイッ……！」
　アリスの言葉にハイネが思わず悲鳴を漏らす。
「おいアリス、それは廃人コースだろもったいねえ。へへへ、ハイネさんよお、覚悟はいいな？　さあ吐くんだ。街中に潜り込むなんて大体目的は決まってる、破壊活動でも企んでたんだろ！」
「待て、ここはこの女に誰がいいのか選ばせるべきだ！　炎のハイネ、選ぶがいい。痛いのかエロいのか廃人になるのかを！」
　青い顔で震えていたハイネは、縛られたまま俺達三人を見上げながら、
「あ、アタシは、お前らにさらわれたラッセルを取り返しに来たんだよ！　この時期ならぬいぐるみがウロウロしていてもおかしくないから、それ

で……！　だから、別に破壊活動なんて……」
　俺は必死の形相で泣きながら訴えるハイネの胸を思いきりわし掴む。
「嘘を吐くな！　ここんとこ俺達のアジト建設が上手くいかないのはお前が工作しているからだろう！」
「し、知らない知らない、ほんとに知らない！　国境線に目を向けさせるため、オーク共を使って小競り合いはさせたが、それは本当に知らない！」
　悪行ポイントが加算されますのアナウンスを聞きながら、ハイネが隠しているであろう情報を引き出すため、心を鬼にして揉み続ける。
「ははーん、私の愛剣が何度も失われたのも借金まみれになったのも、全ては貴様の工作だな？　おのれ、貴様を使って魔王軍に身代金を要求してやる！」
「それこそ本当になんの事だよ、お前の借金なんて知らないよ、何でもかん

でもアタシのせいにするなよ！　なあ六号、本当にラッセルを取り返しに来ただけだって！　だからそろそろ揉むのをやめ……。……っていうか、お前尋問にかこつけて揉みたいだけだろ！」
　さすがは魔王軍四天王の一人なだけある。
　これぐらいでは本当の目的を吐きはしないか……。

「や、やめろ、それはシャレにならないだろ！　こんな所で剥こうとするな！」
　焦った表情を浮かべながら、縛られた状態で這って逃げようとするハイネだが、俺にそんな演技は通用しない。
　申し訳程度に体を隠しているハイネの布きれを引っ張っていると、そこにアリスが待ったをかけた。

「おい乃与、そのくらいで赦してやれ。どうやら本気でオのラッセルの尊過に来ただけみたいだぞ」
　アリスがこんな事を言い出すなんて珍しいな。
　こいつが情に流されるなんて事は絶対にないし、なにか考えがあるのだろう。
「チッ、アリスがそう言うのならしょうがねえ。今日のところはこのぐらいで勘弁してやらあ！」
「良かったな、炎のハイネ。心優しいアリス様に礼を言え！」
　俺の場合は演技だが、スノウは完全にアリスの下っ端みたいになっている。
「か、感謝するよ……。それより、早くラッセルに会わせてくれ。アイツは力はあるが、まだ子供なんだ。あまり酷い事はしないでやってくれよ……」

「仮にも悪の組織の幹部なんて張ってるんだからガキかどうかは関係ねぇが、それほど酷い待遇(たいぐう)じゃないはずだ。その目で見てみろ」
ハイネはその言葉に幾分(いくぶん)ホッとしながら、縄(なわ)を打たれたまま立ち上がる。
「ラッセルならあそこにいるから話してこいよ。今は仕事中だが会話ぐらいはいいだろう」
「ああ、本当に感謝する！　ラッセル！　ラッセル、アタシだ！　大丈夫(だいじょうぶ)か、元気だったか!?　何か酷い事はされて……」
アリスに促(うなが)されてそちらに目を向けたハイネは、テントが立ち並ぶ仮アジトで洗濯物(せんたくもの)を干していた女装キメラを見て動きを止めた。
元同僚(どうりょう)の呼びかけに、鼻歌交じりに機嫌(きげん)良く洗濯物を干していたラッセルがビクッとしながら振(ふ)り返る。
「ハ、ハイネ……？　えっ、な、なんでハイネがここに……!?」

「……ラ、ラッセル……？　えっ、お、お前、なんでそんな格好を……？」
もちろんその姿はメイド服だ。
最近では仕事にも慣れ、トラ男や戦闘員達の世話をするのも満更でもなさそうな女装キメラ。
「ラッセル、お、お前……」
「ここ、これは違……！　ハイネ、誤解しないでよ、この格好は無理やりやらされてるだけだから！　トラ男ってヤツの趣味だから！」
ドン引きしているハイネにラッセルは必死の形相で言い訳するが、つい先ほど鼻歌まで歌っていたのが説得力を落としていた。
呆然と立ち尽くすハイネの肩にアリスがポンと手を乗せる。
「お前さんのとこのラッセルは、見ての通り充実した毎日を送ってる。戦闘

力だけを買われていた魔王軍より、皆の世話を焼いている方が楽しいんだろう。魔王軍に戻らせるなんて考えず、このままそっとしといてやれ」
「そうだね、あんなに上機嫌なラッセルは初めて見たよ……。ラッセル、正直言ってあんたを失うのは痛手だけど……。あんたはまだ子供なんだ、毎日が楽しいのなら無理に戦場に出る事はない。ここで大事にしてもらうんだよ……」
「ちょっと待って！　ハイネ、ボクを見捨てないでくれ！　いや、確かにちょっとだけ仕事が楽しかったのは認めるよ、必要とされてるのが嬉しかったのも！　でも魔王軍に帰りたいんだ、本当だよ！」
　縋り付くラッセルにハイネは少しだけ悩むそぶりを見せる。
「……アタシはここに残って平穏な暮らしをするのも一つの道だと思うけどね……。でもまあ、あんたがいないと困るのも事実だ」

ハイネはそう言いながらニッと不敵な笑みを浮かべると
「アリスと言ったな。この中じゃあんたが一番話が通じやすそうだ。……なあ、アタシと取引しないか？」
「するわけねーだろ、お前は今の状況考えろ。すっトロく生きてんじゃねーぞエロ女」
　辛辣な物言いにハイネの表情が固まった。
「よし六号、もういいぞ。この女は今日から悪行ポイント生成メイドだ。セクハラだろうが好きにしろ。せいぜいこき使ってやれ」
「やったぜ」
「待て！　分かった、取引なんて言ったのは謝る！　お前らに耳よりの情報があるんだ！」
　手をワキワキさせながら近付くと、ハイネが必死に訴えた。

「バカかお前、この状況なんだから情報なんていくらでも引き出せる。これから六号をけしかけてやるから白状したくなったら勝手に喋れ」

「よーし、張り切っちゃうぞー」

「喋る、喋るから！　情報ってのは明日から始まるアンデッド祭りについてだ！　ここ最近、アンデッド達の動きが変じゃないか？　実はそれにはわけがあってな！」

ハイネの言葉に俺はワキワキさせていたその手を止めた。

そういやグリムがちょこちょこそんな事を言ってたな。

ゾンビが懐かないとかぬいぐるみが危害を加えてくるだとか。

と、詳しく話を聞こうとするも。

「お前もアンデッドだの非科学的な事言い出すのか。もういい、お前はメイドにする価値もねえ。縛り上げたまま荒野に放り出してやる」

「ええ!?　いや、非科学的って何だよ!?　アンデッドだよアンデッド、このまま祭りを開催したらトラブルが……！」

「トラブルは悪の組織の専売だ。世に混乱を起こすのは自分達の仕事で望むところだ。六号、コイツを街の外に連れて行け」

　アリスはハイネの言葉に耳も貸さず、ロープの端を押しつけてきた。

「いいのか？　色々と使い道がありそうだけど」

「そうだぞ、魔王軍と交渉すればこの女は金になる。魔獣の餌は勿体ない！」

　俺達がそう言い募るも……。

「交渉するのも面倒くせえ。いいからとっとと捨ててこい、自分達の方が悪の組織として格上だって事を思い知らせてやる。コイツは見せしめとしてモケモケの餌にしてやれ」

アリスが突き放すように言ってきた。
「――ハイネは荒野に置いてきたぞ。なんか泣き喚いてたけど良かったのか？」
「おう、ご苦労さん。いいんだよアレで。アイツにはちゃんと使い道がある」
　……使い道？
「縛られた状態で荒野に放置されては、いかに魔王軍幹部といえど無事に済まないのではないか？」
「その事なら心配ない。ちゃんとロープの結び目の位置を、炎で焼き切れるようにして縛り上げてやったからな。しかも万が一炎が使えない場合に備え、縛りも甘くしてやった。少し冷静になれば簡単に脱出出来るさ」
　えっ。
「後はアイツがノコノコと魔王城に帰れば、コッソリ取り付けておいた発信機

で場所が分かる。ハイネを尋問して聞き出しても良かったんだが、自力で城に帰らせた方が連中の油断を誘えると判断した。後は隙を突いて城を襲撃してやればいい」

……………………。

「なあアリス。俺、ハイネを捨ててくる際に、アイツが隠し持ってた魔石を取り上げてきたんだけど。あと、縛りが甘かったから、良かれと思ってしっかりキツめに縛り直したんだけど……」

「マジかよ」

……………………。

「まあいいか。仮にも魔王軍幹部だ、そう簡単にやられねえだろ」

「そ、そうだな。大丈夫だよな、幹部だもんな」

「そ、それでいいのかお前達……」

7

翌日。

「ねえ六号、ハイネはあれからどうしたの？　ちゃんと無事なんだろうね？」

ハイネを荒野にリリースした俺は、ラッセルにまとわりつかれていた。

「お前は俺達の捕虜（ほりょ）なんだから、ハイネの心配してる場合じゃないんだぞ。今凄（すご）い事を考えてるんだ。メイドカフェを作ってお前をそこで働かせ、頃合（ころあ）いを見計らって男の子だってバラすんだよ。金と悪行ポイントが大量に稼（かせ）げる、素敵（すてき）な商売だと思わないか？」

「やっぱキミ達って魔王軍よりタチが悪いよね」

と、ラッセルと二人、公園の噴水（ふんすい）でパンツを洗濯していると、アリスが声を掛（か）けてきた。

掛けてきた。

「おう六号、すっかりホームレス生活に慣れたようだがちょっと来てくれ。これから姫さんに会いに行く」

ほう。

「なるほど。城の兵舎を開放させて、この暮らしからおさらばするわけだな。テントは風の音がうるさいんだよ、俺が前使ってた部屋を借りようぜ」

「お前ら戦闘員がいらん事ばかりするせいで、よほどの用がなければ城への立ち入りは禁止になってる。というか、まさにその事で呼び出し食らっているんだよ」

俺はアリスの言葉に首を捻る。

「俺達が悪行を行うのはある程度まで許されてるだろ？　怪我をさせない、凶悪

い凶悪犯罪は行わない、越えてはいけない一線は守るって条件で」

「そうだな、この国を守るための必要経費って事で、軽犯罪はお目こぼしを貰(もら)ってる。つまり……」

アリスはやけに人間臭(くさ)くため息を吐(つ)くと。

「一線を越えたアホが捕(つか)まったんだよ」

面倒(めんどう)臭そうに顔を顰(しか)めてそう言った。

——城に入った俺達は、詳しい事情を聞く間もなく、ティリスの部屋に通される。

そして、そこには部屋の主(あるじ)が複雑な表情を浮かべ座っていた。

「六号様、アリスさん。今までは良い関係を築けていたけれど、此度(こたび)の

……兄様とティリスさんが今まで良い関係を築いてこなかった、此度の事は残念です」

腹黒王女がなんとも言い難(にく)そうな顔で、口元をもにょもにょさせながら言ってくる。

誰(だれ)が何をやらかしたのかは知らないが、怒(おこ)ってはいないように見える。

こういった時の揉(も)め事担当のアリスが口を開いた。

「すまんな姫さん、自分もアホ共に目を光らせていたつもりだったんだが……。まずは何があったのかを聞こうじゃないか。被害者(ひがいしや)への賠償(ばいしよう)やその他の相談はそれからだ」

「そうですね。賠償とは言ってもお金は必要ありません。犯行は未遂(みすい)に終わりましたしね。罪状は、その……。夜這(よば)い、になるのでしょうか？　そして被害者は、この私です」

流暢(りゆうちよう)に喋っていたアリスだったが、ティリスの言葉で固まった。

「……マジか、姫さんにそんな事やらかすクソ度胸を持つヤツが、ウチの戦闘員に居たってのか」

アンドロイドのくせに呆然と呟くアリスに向けて、ティリスは沈痛な面持ちで。

「犯行に及んだのは戦闘員十号様です。現在、地下の牢獄で監禁させていただいております」

戦闘員十号が？

でもおかしいな、アイツは一線級の変態ではあるけど紳士のはずだ。

無防備な美少女の寝顔を見ながら焼き肉パーティー始めるヤツだ。

そんなアイツがティリスに夜這いなんて掛けるかな？

俺の疑問に答えるように、ティリスが若干顔を赤らめながら、語気を強めて言ってくる。
「戦闘員十号様は、キサラギの他の方と違って城内での評判も良く、子供達に気前よく色んな物をくれたりする気さくな方だっただけに、それが王族に対する夜這いだなどと……。非常に、残念です………」
紳士である戦闘員十号は子供達の人気者だ。
それだけにショックだったのか、ティリスが声のトーンを落としていく。
「アイツ、そんなに根性の据わった悪党だったのか……。やるなあ……」
そんな中でただ一人、アリスだけが感心していた。
「やるなあ、ではありません！　夜中目が覚めたら、部屋の中に全裸の十号様がしゃがみ込んでいたのです。それが一体どれだけ怖かったか……！」

「よし分かった。その辺の話はこれからジックリ詰めていこう。もう一度尋ねるが、未遂だったんだな？　で、どこまでの事をされたのか……」

その時の事を思い出したのか、両手で自らを抱き締めて小さく震えるティリスに対し、アリスが事細かに尋ねている。

俺もティリスがどこまでの事をされたのかが気になったが、今やるべき事はそれじゃない。

二人が今後について話し合っている間に、俺は戦闘員十号が捕らえられているであろう、城の地下へと――

8

しばらくして部屋に戻ると、二人はまだやり合っていた。

「――ですから、お金による賠償は必要ありません。それ以外での譲渡をお願いいたします。例えばキサラギの持つ技術だとか……」
「そいつは流石に欲張りすぎだろ姫さん。ウチの技術と姫さんの体が釣り合うかというと悩みどころだ。例えばだ、姫さんが既に経験済みであれば、その価値はさらに下がって――」
「王族の姫がそんなはしたないわけがないでしょう！　私はまだ――」
「凄く気になる話題のところを邪魔したくないが、ちょっといいか？」
俺は何やら言い争っている二人の間に割って入る。
「戦闘員十号から事情を聞いてきたけど、やっぱり夜這いなんて掛けてない

ってさ。夜中に全裸でしゃがんでたのは、単にティリスの部屋でうんこしよう
としただけだってよ」

「…………!?!?!?!?!??　あのすいません分かりません、何を言って
いるのかがまったくもって分かりません！」

　珍しく混乱した顔のティリスが言った。

「……？　ああ、全裸だった理由は、裸じゃないと部屋でくつろげないタイ
プなんだってさ。たまにいるよな、そういうタイプ」

「違います、そこじゃありません！　いえ、そこも大概と言えば大概です
が！　そうではなく、なぜ深夜に、しかもどうして私の寝室でそのような事
をしようとしたのかが分からないのです！　どうしてトイレに行かないので
すか!?」

いつになく取り乱したティリスの言葉に、
「俺だってそんなの知らないよ。マーキング的なもんじゃないのか？　縄張り(なわばり)を主張したかったとか」
「私の寝室は私の物です！　ええ……!?　ちょ、ちょっと待ってください、今心を落ち着けますから……！」
未(いま)だ混乱した様子のティリスだったが、胸に手を当て息を吸うといつも通りの顔になった。
「夜這いしようとしたと言われた方が、まだ納得(なっとく)出来たのですが……。す、すいません、ちょっとお尋ねしますが六号様の国の方々は、女性の寝室でそういった事をするのは一般(いっぱん)的なのですか……？」
「そんなわけないじゃん。何言ってんだお前、大丈夫(だいじょうぶ)か？」
「わ、私だっておかしいとは思ってますよ、念のために聞いただけです！　あ

あもう、こんなのどういった罪で処理すれば……!?」
と、なぜかそれまでフリーズしていたアリスが我に返って再起動する。
「なあ六号、自分はやっぱりまだまだみたいだ。お前達戦闘員の事を理解したと思っていたが、どうしようもなく分からなくなる時がある」
そりゃそうだ、いくら高性能のアンドロイドでも完璧なわけがない。
「しょうがないさ、だってお前はまだ作られてから間もないしな。これから経験を積めばいい。誰だって最初はそんなもんだ」
「……そうか。自分はどれだけ経ってもお前らの事を理解出来る気がしないんだが……」
「もっと自信を持ってもいいぞ。大丈夫、お前は充分上手くやれてる」
アリスは俺の慰めに、なぜか納得いかなそうな顔をする。
アンドロイドのくせに表情豊かなヤツだ。

と、それよりも。

「それで十号はどうなるんだ？　本国からの増援が望めない今、戦闘員は稀少なんだ。アイツがいないと今後の活動に支障が出るんだが……」

「え!?　え、ええ、そうですね、どうしましょうか……、何分こんな事は初めてなもので、何罪を適用すればいいのか……」

ティリスが困惑しているので助け船を出す事に。

「まあその辺で立ちションしようとしたようなもんだし、同じぐらいの刑罰でいいんじゃないか？」

「乙女の寝室をトイレにしようとした事を、立ちションなんかと同列にしないでください！」

ティリスは思わず叫んでから何かに気付いて赤くなる。
「……お前さあ、腹黒い王族とはいえ一応女の子なんだからさあ……。大声で立ちションとか、もうちょっと発言に気を付けた方が……」
「それもこれも一体誰のせいだと！　……もう嫌！　バカな祝詞を言わされそうになったり、寝室にまで侵入されたり……！」
　突然顔を押さえてワッと泣き出したティリスだが、ほぼ一人で国政を担っているためストレスだって溜まるのだろう。
「アリス、アンドロイドのお前にも心があるなら、かわいそうに思ったら慰めの言葉一つも掛けてやれよ」
「……いや、かわいそうだとは思うよ。自分が同じ立場ならもれなく戦闘員達を追放してるよ」
　そんな俺達に、ティリスがキッと表情を引き締める。

そんな俺達に、ティーナがキッと表情を引き締める。

「今回だけは軽罰で済ませておきます。ですが今後このような事があれば、厳しい措置を取らせてもらいますからね。というか、ウチの警備の者は何をやっていたのかしら……」

そう言って悩むティリスにせっかくなのでアドバイスだ。

「いや、この部屋の警備はザルだったぞ。だってドアの前にずっと兵士が立ってるだけで、天井部分が無警戒じゃん。俺が何回この部屋に侵入したと思ってんだよ」

「!?」

俺の言葉に絶句し、驚きの表情を浮かべるティリス。

そう、俺がここのところ、城の外壁にくい打ち機を使ってよじ登り、屋根に穴を開け、天井裏から侵入していたスニーキングミッション。

最近では、ティリスがおらずこの部屋に誰もいない時を見計らって、天井部分の一部をいつでも取り外し出来るよう加工したのだ。

「とまあ、そんな感じで……」

「あなたが元凶(げんきょう)ではないですか！　つまり、六号様は私に夜這いを……」

ティリスは自らの体を抱き締めて、獣(けだもの)でも見るような目を向けてくる。

「いや、そんなつもりは無いよ。なんか、王族の寝室に侵入するだけで悪行ポイントがすげー稼(かせ)げるんだ。最初はティリスが寝(ね)てる間に侵入して、全裸で隣(となり)に寝てティリスが起きたらビックリさせようと思ったんだけどな。でもなんか、侵入する度(たび)にポイントいっぱい稼げるから、本人に気付かれるまで稼ぎ場にしようって事になった」

「事になった、じゃありません！　えっ？　ちょ、ちょっと待ってください、その言い方では六号様や十号様だけじゃなく、他の方まで来ていたみたい

な……」

　ティリスが驚きの表情から恐れの顔へと変わっていく。

「来てたよ。毎晩誰かがお前の傍で、腕立てしたり踊ったりしてポイント稼ぎに勤しんでたな」

「どうして!?　私が寝ている横で、一体何がどうなってそんな事が!?」

　何がどうなってこの状況になったのか、それは俺にも分からない。

「最初は俺のスクワットから始まったんだよ。なんとなく夜中にここに来て、いい汗かいて帰って寝たんだ。その次はティリスが寝ている隣で、暇つぶしに持ってきたジェンガで遊んでみたな。途中からはいつになったら見付かるのか、どこまでいけるのかとワクワクしてきて、最近はティリスの隣で焼き肉パーティーを……」

　俺が最後まで言う前に、ティリスが大きな叫びを上げた。

「衛兵──!!」

『多様性遺伝子集合体、仮称（キメラ）ついて』

六号、元気にしてるかい？

地球では毎日相変わらずの激戦が繰り広げられてるよ。

アリスからの報告ではそちらの方も大変そうだけれど、キミの早い帰還を期待している。

そちらの星から送られてくるサンプルに関してはとても興味深いね。

進化の過程がおかしかったり、遺伝子に手を加えられた跡があったよ。

とは言ってもキミはアホだからボクが懇切丁寧に解説しても理解出来ない事だろう。

なので細かい事は省くけれど、キメラと呼ばれる彼女については、そちらの惑星で自然発生したにしては明らかにおかしいとだけ、心の隅に置いておきたまえ。

一応論文をまとめてみたけど、暇な時間があったら目を通してくれても構わない。

キミは三行以上の文を読むと眠くなると言っていたから、アリスに解説して貰うといい。

ともあれ、キミが現地で無事に活動しているようで何よりだ。

毎日、アスタロトとベリアルがどことなく物足りなさそうな顔をしているよ。

まあその、ボクも早い帰還を期待しているから、どうか元気で……

リリス

四章

アンデッド・パレード

1

「まったく。せっかく警備のアドバイスをしてやったってのに、何だよアイツ。あんなに怒る事ないじゃないか」

「現行犯じゃないからと、罪に問われなかっただけ感謝するべきだと思うけどなあ……」

戦闘員十号はしばらく拘束されるらしい。

アジト建設作戦には一人でも多くの戦闘員が欲しいところだ。

というわけで、戦闘員十号が釈放されるまでは、建設計画は延期しようという事になった。
暇になった俺とアリスは、悪行ポイント稼ぎを兼ねて、グレイスの街をフラフラと散策していた。
「しかし、ここ最近の建設資材やら重機はあれでポイント稼いでいたのか。おい六号、次は王様の部屋に侵入しろよ」
「嫌だよ、何が悲しくておっさんの部屋に侵入しなきゃいけないんだよ。夜中無防備に寝ている美少女の傍で、起こさないように色々やるから楽しいんだぞ。でも安心しろよ、ティリスには指一本触れないってのが暗黙の了解だったからな」
「お前らの妙な拘りはなんなんだ。むしろ本気で夜這う根性見せてみろ」
美少女の見てくれでそういう事言うのはやめて欲しい。

「それより六号、そこいらを歩き回ってるぬいぐるみに、片っ端（ぱし）から火を付けねえか？」

「お前は普段（ふだん）まともなクセに、非科学的な事が絡（から）むとバカになるなあ」

アリスが物騒（ぶっそう）な発言をするのにもわけがある。

かねてから準備をしていたアンデッド祭りが始まり、あちこちを大量のぬいぐるみ達が闊歩（かっぽ）しているのだ。

ファンタジー世界を真っ向から否定するこいつとしては、今の状況が気に食わないのだろう。

「自分としてはグリムの呪（のろ）いのタネもいずれ暴（あば）いてやる予定だ。あんなもん催眠（さいみん）術の類（たぐ）いだからな」

「グリムに言うなよ、また喧嘩（けんか）になるからな」

と、前方に何かが見える。
「……おい六号。あそこにいるのはグリムじゃねえのか」
正に今、話題に上っていたグリムを中心に、人だかりが出来ていた——
「グリム様、兄は何を言っているのですか？　いえ、この中には本当に兄がいるのですか……？」
年は十四、五歳ぐらいだろうか。
内気そうな少女が、グリムに涙声（なみだごえ）で訴（うった）えている。
グリムはその子に優（やさ）しく笑いかけると、隣のぬいぐるみの背をそっと押した。
「あなたのお兄さんかどうかは知りませんが、彼の名はレリウス。あなたに向けて『ただいま、僕がいない間にちゃんと夢を叶（かな）えられたんだね。おめでと

う。一人で生活出来ているかがずっと心配だったけど、安心したよ』と仰っていますよ……」

「兄さんッッ！」

　感極まったかのように少女がぬいぐるみに飛び付いた。

「私、私頑張ったよ！　お父さんお母さんに続いて、兄さんまでいなくなって……。それでも、一人で頑張った！」

　抱きつかれたぬいぐるみは少女を優しく抱きしめる。

「『辛かったね、大変だったね。マリエルは凄いね、僕の自慢の妹だよ』と仰って……」

「わあああああーっ！」

　マリエルと呼ばれた少女はぬいぐるみにしがみついたまま泣き出した。

　そんな二人のやり取りに周囲の人達も涙する。

おそらくは、ぬいぐるみの中の兄の言葉を代弁してやっているのだろう。

普段の姿からかけ離(はな)れたグリムの姿に、俺は良い意味で期待を裏切られた気分だった。

「『内気で体の弱かったマリエルが、将来は拳闘士(けんとうし)になってチヤホヤされながら荒稼(あらかせ)ぎしたいなんて言い出した時は、何を言い出すんだと思って止めたけど……。今思えば僕達が間違(まちが)っていたよ。本当によく頑張ったね』」

「うんっ！　あのね、あのね……！　私、まだ一度も負けた事がなくて、ファンの人から『血塗(ちまみ)れマリエル』なんて二つ名まで貰(もら)っちゃったんだ！　それでね、チャンピオンのレイドッグって人が、私との対戦を避(さ)け続けてて……」

……。

あれっ、これっていい話なのか？

周囲の野次馬(やじうま)が涙目で頷(うなず)いてるけど、兄さんが止めようとしたのも間違

ってないと思うよ。

「そういえば兄さん、お父さんとお母さんは？」

「『あの二人ならとっくに生まれ変わったよ。互いに、来世ではもっといい相手を見つけてやる、次こそは出来婚なんてしないって言い合いながら、最後まで殴り合ってたさ』」

「お父さん、お母さん……。ふふっ、おかしいんだ……。死んだ後まで相変わらず喧嘩ばかりなんだから、もう……」

マリエルはそう言ってクスクス笑い……。

いや、やっぱりいい話じゃねえぞ。

周囲の連中も笑ってないでツッコめよ。

「さあ、後は家に帰ってゆっくりなさい。ぬいぐるみの手じゃちょっと書きにく

いかもしれないけど、筆談なら会話が出来るわ」
「グリム様、ありがとうございました！　兄さん、行こう！　家に帰ったら、血塗れマリエルの名前の元になった、必殺頭蓋砕きを見せてあげる！」
　マリエルは笑顔でそう言うと、ぬいぐるみの手を取って腕を組みながら去っていく。
「グリム様、次は俺！　俺でお願いします！」
「この中に、きっと主人がいるはずなんです！　グリム様、主人の言葉を伝えてください！」
　マリエルが立ち去るとグリムを囲んでいた集団が次々に訴えかけた。
「どうか皆さん落ち着いて、順番に並んでください……。後、そこのあなた。ご主人はもうここにはいないわ。来世で若くて可愛い嫁を貰うんだと言い残し、既に生まれ変わって……痛ッ！　ちょ、ちょっとやめなさい！」

翻訳中にぬいぐるみに叩かれ出したグリムが叫ぶ。
「悪かったわよ、冗談よ！　でも一言だけ言わせなさいな、どうして私が甘ったるい言葉を伝えなくちゃいけないのよ！」
　アイツにこの祭りを仕切らせていいのかと思えてくるが、霊と会話が出来るヤツが他にいないのだから仕方がない。
　俺達は、グリムが遺族とぬいぐるみの通訳を務める姿を尻目に、祭り見物を再開した――
「――アイツ、珍しく聖職者っぽい事やってたな。死者との会話とか凄くねえ？」
　街をブラブラと歩きながら、俺は普段とは違ったグリムを思い出してい

た。
「六号は詐欺に注意しろよ。さっきの事だって説明は付く。あのマリエルとかいった女はサクラだな。事前にグリムと打ち合わせといて一芝居打ったんだろ」
「お前、頑なにファンタジーを信じようとしないのな」
あの子の泣き顔はとても芝居には見えなかったのだが……。
俺は通りすがりのぬいぐるみに目を向けながら、
「しかしファンシーな光景だなあ。そこら中にいるぬいぐるみは全部グリムが作ったんだろ？　アイツ、意外に家庭的なところがあるんだな」
むしろ、結婚願望の強いグリムからすれば別に意外でもないのだろうか。
隣を歩くアリスは同じくぬいぐるみに目をやりながら、
「ウチの八つ裂きミート君の方が可愛いな」
「コ[illegible]らの前[illegible]感性[illegible]ない？」

「でもお前も感性おかしくない？」
　俺は改めて街中を見回して。
「ところでアリス。これがこの星の祭りらしいが、どう思う？」
「テキ屋もなければ揉め事もない。この星の祭りは随分とお上品だな」
　悪の組織であるキサラギにとって、祭りとは原点にして大切なものだ。
　まだ組織が弱小だった頃は、祭りがあれば許可も取らずに屋台を出して、資金を稼いでいた。
　そして当然のように地元の組織と揉め事になり、それを足掛かりに……。
「懐かしいなあ……。大人気カードゲームのパチモンレアカードを、ガキ共に売り付けていたのを思い出すぜ……」
「子供相手になんて事してやがるんだ」
　しかし……。

「それはそうと、こんな大人しい祭りはキサラギとして認められんな。祭りと言えば喧嘩にボッタクリと決まってる。おいアリス、この世界の住人に本物を見せてやろうぜ」
　そんな俺の言葉を受けて、アリスは首を傾げてみせた。

2

「はい、そこのお兄さん！　おっぱいあるよおっぱい！　どう？　今ならおっぱいが四つもあるよ」
「えっ⁉　い、いきなりなんですか⁉」
　ここは街の繁華街。

アリスに借りた金を使い、祭りの間だけ小さな店をレンタルした
「いやだなお兄さん、おっぱいって言ったらおっぱいだよ。プニプニしてて、見てるだけで幸せになれるヤツ。みんな大好きおっぱいです」
「みんな大好き……」
「おっぱいです」
　この街にはキャバクラというものがない。
　もっと直球な風俗店なら一応はあるのだが、綺麗なお姉さんを侍らせてお酒を楽しむという行為は、長期に渡る戦争で男の比率が低いこの国で、あまり需要が無かったのかもしれない。
　俺はニギニギと揉み手をしながら笑みを浮かべた。
「一時間銀貨五枚ポッキリで可愛い女の子と遊べちゃう！　どうです？　美味しいお酒とおっぱいで心も体も癒やされませんか？」
「癒やされます」

癒やされます」
　こういった客引きに耐性(たいせい)が無いのか男はアッサリ承諾(しょうだく)した。
　俺は男の手を取ると、気が変わらないうちに店の中へと案内する。
「お兄さん運が良い(い)！　今なら当店のナンバーワン、スノウちゃんが空いてるよ！　お願いしまーす！」
　薄暗(うすぐら)い店内に案内すると、そこには扇情(せんじょう)的なドレス姿のスノウがソファーに座って待ち構えていた。
「いらっしゃいませお客様、当店のナンバーワンことスノウです。何かお飲み物を頂いても？」
「えっ？　お、お飲み物？　好きにすればいいんじゃないかな……？」
「まあっ、ありがとうございます！　店長、お飲み物入りました！」
　料金システムの説明もしないまま早速(さっそく)お飲み物をたかるナンバーワン。
　ここがどういった店なのかも知らないまま、男はナンバーワンの隣に座ら

された。
　と、考える暇も与えず、当店のナンバーツーがテーブルの上にグラスとボトルを持ってきた。
「おらよ、お客様。お飲み物をお持ちしたぞ」
　ナンバーツーとは、肩の部分が露出したドレスを着ているアリスの事だ。
　当店に在籍している女の子は二人しかいないので、自然とコイツがナンバーツーだ。
「すいませんねお客さん、アリスちゃんは口が悪いのが売りなんで。ささ、他に客もいないんで、特別に女の子を二人付けますからね！」
「あ、ああ……。ていうかさっき、おっぱいが四つって言ってたけど、この店にはどう見ても二つしか……」
　男は最初に俺が言った言葉を覚えていたらしい。

スノウの胸元をガン見した後アリスの胸元に目をやって、どことなく納得いかなそうな顔をしている。
「おっ？　何だお前、自分とキサラギに喧嘩売ってんのか？　このサイズが運動力学的に最高スペックを発揮するんだよ。分かったか？」
「売ってません、すいません。あと何言ってるのかも分かりません」
アリスに絡まれ謝る男にスノウが手際良く酒を注ぐ。
「お客様、ささ、どうぞお飲みになってください」
「おうお客様、お飲み物とご一緒にポテトもいかがですかぁ？　ああん？」
この男で三人目の客とあってか、既に慣れた手付きのスノウの横で、アリスが脅しているのか勧めているのかよく分からない接客をしている。
スノウの胸元をチラ見するものの触ろうという根性はないのか、男はわけ

も分からず奢らされながら、当たり障りのない会話を続けている。
　やがてあっという間に一時間が経過すると、俺は予定通りにテーブル席へ。
「楽しんでますかお客さん。そろそろ一時間経ちますが延長なさいますか？」
「えっ、もう一時間経ったのか。いやあ、これだけ飲んで銀貨五枚は安いね！　それじゃあ、もう一時間ほど……」
　男が上機嫌で笑いながら、銀貨を取り出し――
「冗談言っちゃいけませんよ、銀貨五枚はお客さんの飲み代です。スノウちゃんのお飲み物、女の子二人分の接待費とポテト代。締めて金貨二十枚……」
「高い！　そんな大金持ってないよ！　最初の話と違うじゃないか！」

「高い！　そんな大金持ってないよ！　最初の話と違うじゃないか！」
　俺の言葉に男が急にごねだした。
　祭りと言えばボッタクリ。
　そう、祭りに乗じて、ボッタクリキャバクラで悪行ポイントと侵略(しんりゃく)資金を同時に稼ごうというわけだ。
　ティリスの部屋を使ってのポイント稼ぎが出来なくなった今、新たなシノギが必要とされる。
「大体、スノウちゃんのお飲み物とやらも最初は確かに許可したけれど、後はこの子が勝手に頼(たの)んだだけで……」
「そうなんですか、スノウさん？」
「わかんなーい」
　頭の悪いクソ女を演じるスノウに、男が戦慄(せんりつ)の表情を見せた。

「おらっ、スノウさんは分からないって言ってるぞ！　あと、アリスさんにおっぱいが無いとかセクハラかましやがったな。その分の慰謝料も貰おうか！」

《悪行ポイントが加算されます》

「おう。あれはちょー傷付いた。金貨十枚追加でいいぞ」

《悪行ポイントが加算されます》

「だって子供じゃないか！　どう見たっておっぱいないし！」

《悪行ポイントが加算されます》

　往生際の悪い男の態度に俺とアリスは立ち上がると、

「困りますよお客さん、金が無いならちょっと家まで案内して貰いましょうか」

《悪行ポイントが加算されます》

「自分は目が利くからな。金目の物の鑑定してやる」

《悪行ポ[illegible]》

《悪行ポイントか》
「さっきからうるせーぞアナウンス！」
　脳内のアナウンスに文句を付けると突然男がキレだした。
「ちくしょう、ボッタクリ商売しやがって！　どうせ高い金取られるのなら、スノウちゃんのおっぱい揉んでやる！」
「き、貴様、何をバカな事を、血迷ったか！　おい六号、アリス、止めろ！　こんなはした金で触らせる気はないぞ！」
　開き直った男が元を取ろうと襲い掛かるが、騎士であるスノウが一般男性に負けるわけがない。
　しかし欲望という人の本能は侮れないのか、スノウと組み合った男の力とは意外にも拮抗していた。
「いいぞスノウ、そのまま既成事実を作っとけ」

「おう、そうすりゃ裁判沙汰にされても逆に毟れる。流石だなナンバーワン、今日の稼ぎはぶっちぎりだ」

「言ってる場合か、さっさと止めろ！　……くっ、コイツ平民のクセに、なぜこまで対抗出来るのだ……！」

モブ顔の男が意外な健闘を見せる中、突然店のドアが開けられた。

「全員動くな、警察だ！　この店が違法営業をしているとの通報がありり……」

突入してきた警官が最後まで言うより早く、俺とアリスは裏口に向かって駆け出した。

「ま、待て、せめて金の回収を……！」

スノウが摑み合いをしていた男の手を振りほどき、店の金を慌てて摑む。

「逃げたぞ、裏口に回り込め！」
「いや、まだ一人だけモタついている！　店の金を回収してるぞ、アイツだけでも確保しろ！」
　俺とアリスが裏口から逃げ出すと同時、店の中で罵声が響いた。
「よし、欲の皮が突っ張ったのを捕まえた！　コイツを連れ帰って事情を聞くぞ！」
「貴様ら、私にこのような真似をして後でどうなるか覚えておけよ！　所属と役職、名前を言え！　私は元近衛騎士団隊長で……！」
「こらっ、抵抗するな！　金を腹に隠そうとするな、その手を離せ！」
　逃げ遅れたスノウが時間稼ぎをしている間に、俺達はその場を後にした
――

3

次の日。

無事逃げおおせた俺達は、ボッタクリキャバクラの事は早々に諦め、別の商売に取り掛かっていた。

「昨日は欲の皮が突っ張ったスノウを使ったのが間違いだった。だがこのままじゃ終わらんよ。大丈夫、俺に任せとけ！」

「隊長すいません、嫌な予感しかしないんで、もう帰ってもいいですか？」

あれからスノウは、軽犯罪なのですぐ帰ってくるかと思ったのだが、キャバクラで得た金の返却を拒み、拘留が長引いているらしい。

割の良いバイトがあると持ち掛けたのは俺達だが、仕事内容を聞いて一番乗り気だったスノウは、予想以上にダメかもしれない。

とはいえ、まだ祭りは二日目だ。
いい加減悪行ポイントがマイナス状態なのを、人の出入りが激しい祭りの期間中に何とかしたい。
「つれない事言うなよロゼ、俺達は仲間だろ？」
「そうだ、我々は既に運命共同体で共犯者だ。今さら止めると言ったところでもう遅いぞ」
「アリスさん待ってください、共犯者って何ですか!?　あたし帰ります！　あっあっ、二人とも何ですかこの手は！　止めてください、離してくださ い！」
　俺とアリスは帰ろうとするロゼの肩に手をやると、
「待てよロゼ、俺達はお前を高く買ってるんだ。アリスは共犯者って言ったが大それた事をするわけじゃない。いや、これはむしろ悪事とは言わないから

大それた事をするわけじゃない。いや、これはむしろ悪事とは言われないかもしれないな」
「手を貸してくれれば腹一杯ご馳走を食わせてやる。やる事は簡単だ。このぬいぐるみの中に入って、指定する人物に甘えてくれるだけでいいんだ」
　そう言って指し示したのは犬の形をしたぬいぐるみ。
　ロゼが収まるサイズの小柄なヤツだ。
「そ、そんな事言ったってごまかされませんよ。毎度毎度、食べ物で釣られるあたしじゃありませんから」
　警戒を露わにするロゼの肩を、俺はポンポンと軽く叩くと。
「ロゼ、お前は爺ちゃん子だったただろ？　甘えてやって欲しい人物は、家族を亡くした爺さんだ」
　ロゼの表情が固まった。
　続いてアリスが俺の話を補足する。

続いてユーナが俺の話を補足する

「その爺さんは、毎年家族が会いに来るのを待ってるらしくてな。でも、残念ながらまだ一度も会えていないそうだ。アンデッド祭りで帰ってきた家族のフリをして、爺さんを癒やしてやって欲しい」

「……分かりました、そういう事なら協力します。二人ともズルいですよ、そんなの断れないじゃないですか……」

困ったような顔で苦笑しながら、ロゼはぬいぐるみの中に潜り込んだ。

「ロゼならそう言ってくれると思ってたよ。お前やっぱりいいヤツだな」

そう言いながら笑いかけると、ぬいぐるみは照れ臭さを隠すようにそっぽを向いた——

「——依頼通り連れて来たぞ。爺さんのところのパトラッシュ……、おいパトラッシュ、暴れるな。お座り！　パトラッシュ、お座りしろ！」

「――ッ！　――ッッ！　――ッッッ‼」
ぬいぐるみに入ったロゼを爺さんに引き渡そうとするも、ロゼが激しい抵抗を見せていた。

ぬいぐるみの首に繋がれたロープを握りそれを引き千切ろうとするロゼに、俺はコッソリと囁きかける。

（こらっ、パトラッシュ！　お前爺さんを慰めるんじゃなかったのかよ！）
（亡くなった家族って言うからお孫さんかと思ってたんですよ！　それが何なんですかパトラッシュって！　ペットじゃないですか！　思い切りペットじゃないですか！　そりゃあ家にも帰りませんよ！）
爺さんが亡くしたのはペットの犬だった。
どこでこんな仕事を見付けてきたのか、アリスが犬捜しの依頼を引き受

けてきたのだ。
何でもこの爺さんは街で有数の富豪らしく、爺さんを騙くらかして礼金をせしめようぜとアリスに持ち掛けられたのだが……。
「パトラッシュ――！　パトラッシュなのかい!?　おいでパトラッシュ、私と一緒に散歩しよう！」
「爺さん、パトラッシュが帰ってきて良かったな。早速報酬を払ってくれ」
ロゼを見て喜ぶ爺さんに、アリスが依頼料をたかっている。

オレオレ詐欺みたいで気が引けるが、爺さんは喜び俺達も喜ぶ、ペットのフリをしなければいけないロゼ以外、みんなが幸せになれる素敵な依頼だ。
（隊長、恨みますよ！　お爺さんをガッカリさせたくないので我慢します

が、帰ったら覚えといてくださいね！）
（分かった分かった、帰ったら飛びきり美味いもん食わせてやるから）
（いい加減、あたしに対する腹ぺこキャラみたいな扱い、止めて欲しいです！）
　俺に囁き返したロゼは、その場で四つん這いになって爺さんへと近付いた。
　嫌そうな態度が見え隠れするが、爺さんには罪はないと割り切ったらしい。
「パトラッシュ、どうしたんだい？　四つん這いだがどこか苦しいのかい？」
「おい爺さん、パトラッシュは犬じゃねえのか？」
　アリスの言葉に爺さんは、
「パトラッシュはマウンティングゴリラだよ。とても好戦的でね、強そうな人を見付けると、よくタックルを仕掛けてマウントを取ってはボコボコに――」
「うおおおおおお!?　パトラアアアアアッシュ！」
　俺は忍犬のタックルを仕掛けてきたゴリラから身を躱した。

俺に突然タックルを仕掛けてきたロゼから身を躱した。

諦めずに再度突っ込んでくるロゼを押さえ付け、マウントを取ろうとしてくるのに抵抗する。

「おお、パトラッシュだ！　今のタックルはパトラッシュだ！」

「そうか、良かったな。それじゃあとっとと報酬寄越(よこ)せ」

ぬいぐるみと手四つの体勢になりながら、俺はヒソヒソと囁きかけた。

（何しやがるんだパトラッシュ！）

（お爺さんの目をごまかさないと！　だから隊長、ごめんなさい！　ここはあたしにボコられてください！）

（お前ここぞとばかりに本気になってるだろ！）

　摑み合ったままギリギリと押し合っていると爺さんが嬉しそうに言ってきた。

「さあパトラッシュ、じゃれてないでこっちにおいで。ご馳走をたくさん用意したからね」

（おい、分かってると思うが行くなよ。今のお前はぬいぐるみの中に入ったパ

トラッシュだからな？　何を出されても食うんじゃないぞ？）
（あたしだってそこまで食い意地張ってないですよ。大丈夫です、耐えられます）
耐えられるという表現が既にちょっとヤバいのだが。
「パトラッシュ、お前が好きだったスポポッチの高級リブロースを山ほど用意したからね。せめてこのお祭りの間、たんとお食べ」
「こらパトラッシュ、行くな！　後でバナナやるから行くんじゃない！」
高級リブロースの言葉に一秒も保たないパトラッシュ。
この星のゴリラってのは肉を食うのか？
というかアリスの翻訳は仕事してるんだよな？
「ハッハッ、いい子だパトラッシュ。アリスさん、これは報酬だ。さあ、どうぞ」
「毎度」
ほくほく顔で金を受け取るアリスを尻目に。

アッサリと餌（えさ）に釣られたパトラッシュは、嬉々（きき）として爺さんに付いていった

――

4

――今日はアンデッド祭り、三日目となる。

未（いま）だに金を返そうとせず拘留中のスノウが、弁護士を呼べと騒（さわ）いでいるそうだ。

この国の法律を丸暗記しているアリスが弁護士として名乗り出た。

法整備の穴を突（つ）いてやると意気込んでいたので、あの守銭奴（しゅせんど）もじきに釈放（しゃくほう）されそうだ。

爺さん家の子になったパトラッシュに関しては、もう祭りの期間中は帰ら

ないだろう。

そんなわけで、一人暇を持て余した俺はといえば——

「物好きですねお客さん。あんなやり取りがあったのにウチの串焼きを注文するだなんて、自分が言うのも何ですが驚きですよ」

「なあ、怒らないから何の肉だか教えてくれよ。いい加減気になるんだよ」

スノウが賄賂を要求していた謎肉屋で、俺は串焼きの匂いを嗅いでいた。

嗅いでみた感じヤバそうな匂いはしないが、食べていいのか悩むところだ。

しかし、モケモケやピョコピョコだかいう変な生き物も食うこの星の連中の事だ。

この肉も案外、文化の違いってヤツで俺にとっては大丈夫かも……。

「一応聞いとくけど、これって人の肉とかじゃないよな？」
「なんて事言うんですかお客さん。そんなわけないじゃないですか」
心外だとばかりの店主の態度に、最悪の想定だけは回避出来たようだ。
なら、地球のサバイバル生活で色んな物を食べてきた俺からすれば、今さら何を食べたところで問題ない。

俺は串焼きを頬張ろうと――

「人肉だなんて、そんなぬるい物なわけないじゃないですか……」
「おっさん今何つった」
と、口に運ぶのを止めた、その時だった。
「見付けたわよ隊長！　まったく、ここ最近私の手伝いもせずにどこほっつき歩いてたのよ！」

車椅子をキコキコ鳴らし、不機嫌そうな顔のグリムが、朝早くにも拘わらず活動していた。
グリムは俺の串焼きをチラリと見ると、
「私の手伝いをするって事でご飯を奢ったりしたんだからね！　他に手伝ってくれそうなロゼやスノウは、どれだけ探し回っても見付からないし！」
「あっ！」
グリムは愚痴を零しながら俺の串焼きを奪い取る。
そして……、
「大体、以前も言ったけどアンデッド祭りの管理は国から任された仕事なの！　私個人っていうより、隊長の隊に任されたようなものなんだからね！」
「「おお……」」

俺と店主の目の前で、グリムがそれを頬張った。
得体の知れない謎肉だが、とりあえず毒では無さそうだ。
「……えっと、残りの串焼きもやるからさ。とりあえずコレで機嫌直せよ」
「あら、ありがと。隊長ったらどうしたの？　今頃私の魅力に気が付いた？」

たかが串焼きを奢られたぐらいでコロッと機嫌が良くなるグリム。
男日照りのこの女は、男に奢られたというだけでも嬉しいようだ。
やがて戦略核級の地雷女は、一体何を勘違いしたのかくねくねと奇怪な動きで威嚇を始め。
「ねえ隊長。またデートしてあげるから、そろそろお仕事手伝って！」
そう言って、満面の笑みを浮かべた。
「寝言は寝て言え」

「そうね、今回のデートコースは、まず川沿いの道を散歩して……」
俺の即答をすぐには理解できなかったのか、しばらく寝言を続けたグリムは……、
「なんで⁉　こんないい女がデートしてあげるって言ってるのよ⁉　そこは話の流れ上乗っかっておくべきじゃない！」
「お前はいい女なんかじゃない、男漁りが趣味の処女ビッチだ！　……あっ、何するんだ、やめろ、ベルト引っ張るんじゃねえ！」
——グリムに付き合わされる事になった俺は、川沿いの道を歩きながら車椅子を押していた。
「ねえ隊長。こうして散歩していると、私達って恋人っぽく見えない？」
「顔色の悪い病人とそれを介護する男にしか見えないと思う」

即答する俺に向け、グリムは嫌そうに顔をしかめる。
「隊長ってば前から思ってたんだけど、スノウ並みのツンデレよね。あの子の場合は元々男に対抗意識を持っていたから仕方ないけど、隊長の場合は一体何があってそんなに捻くれたの？」
「俺は捻くれてなんかいないぞ。いい女が相手なら誰にでもホイホイ付いてくし、対価が見合っていれば多少の無茶だって聞いてやるからな。俺に断られるって事は、対価がショボいか女の魅力が足りないって事だ」
　グリムは車椅子のひじ掛けに腕を置き、小首を傾げて微笑んだ。
「やっぱり素直じゃないわね隊長は。それじゃあ言い方を変えようかしら？　ねえ隊長、私の仕事を手助けしてくれませんか？　それで、お仕事が終わったら……。また二人で夜の街に出掛けましょう？」
「俺に断られるって事は、対価がショボいか女の魅力が足りないって事だ」

「こんなにいい女がデートを対価にお願いしてるのに、何が不満だって言うのよ！　分かったわよ、こないだ行ったお店で一番高いシャンパン奢るから！」

半泣きのグリムに泣き付かれ、仕事を手伝わされる事になったのだが……。

「そもそも俺に手伝いを求めるのが間違ってると思うけどなあ。言っとくけど、この国の常識も法律も知らないんだぞ？」

「その辺は期待してないから安心して。隊長には、その腕っぷしを見込んでやって欲しい事があるのよ」

その辺は期待してないというのに引っかかるのだが。

「そういう事なら任せとけ。俺は誰に喧嘩売ればいいんだ？」

「そんな物騒な頼みじゃないわよ！　逆よ逆、隊長には街の治安を守って欲しいの。アンデッド祭りの管理業務には、里帰りしてきた霊達によるイタズラを防いだり取り締まったりって仕事もあるの」

　治安維持活動ならお手の物だ。

　意外に思われるかもしれないが、支配下に置いた侵略地の治安を守るのも戦闘員の仕事なのだ。

　治安を守る事は後の支配へと繋がる。

　治安を維持し経済を活性化させてやれば、大衆にとって支配者が誰であるかなど大した問題では無くなってくるものだ。

「それにね……。ずっと言ってる事だけど、今年のアンデッド祭りは何だか様子がおかしいのよね。普段はこれほどまでにトラブルなんて起きないんだけど……」

グリムが気になる事を呟いた。

「トラブル?」

俺達にとって揉め事は商売のタネでもあるが、ここは残念な事に日本じゃない。

グリムは深刻そうな表情を浮かべると——

「私のところにおかしな報告ばかり上がっているのよ。たとえば、そうね……。みんなの前で突然ぬいぐるみが燃え上がったとか、深夜になると怪しげな黒い人影が城の方へ向かっていっただとか。小さなものでは、繁華街でボッタクリが横行してるだの……」

どれもこれも覚えがあるな。

「あとは都市伝説みたいなものになるけど……。ぬいぐるみの前にお供え物として置いておいたリブロースが、目を離した隙に無くなっていたとか、謎の肉を売る恐怖の屋台があるとかなんとか……」

　その事に関しても覚えがあるな。

「何より、ぬいぐるみが人に危害を加えたって報告が上がっているのよ。私がいるからにはそんな事はあり得ないのよね、ぬいぐるみを与える際にはちゃんと誓約書にサインさせているんだし」

　つい最近、パトラッシュという名のぬいぐるみにタックルを食らわされた事を思い出す。

「グリム、それらの問題は放っておいても大丈夫だ」

「なんでよ!?　ちゃんと私の話を聞いてた!?　どれもこれも冗談みたいに

聞こえるけれど、実際被害が出ているのよ！　嘘言ってるわけじゃないんだから！」
　グリムが嘘を吐いてないのは誰よりも俺が知ってる。
「そうか、今年のアンデッド祭りは大変だな。実は昨日、アリスと一緒にちょっとしたバイトをこなして小遣いを貰ったんだ。普段頑張ってるお前に、今日は隊長として奢ってやるよ」
「どうして急にそんな事言うの⁉　男の人に優しくされると惚れそうになるから止めてくれない⁉」
　慌てるグリムの車椅子を押しながら、
「川沿いを散歩した後はどうしたい？　グリムは行きたいところはあるのかな？」

「口調までちょっと優しくない!?　そ、その、川沿いデートの後は公園でお弁当を広げてみたり……」

公園は現在俺達の仮アジトと化している。

「弁当を用意してないから公園ルートは却下(きゃっか)だな。今は懐(ふところ)が温かいから、ネックレスの一つでも買ってやろう。装飾(そうしょく)品の店でも行くか？」

「行くぅ……」

なぜか大人しくなったグリムと共に、車椅子を押して行った。

5

上機嫌でフワフワしているグリムが言った。

「ねえ隊長？　前から思っていたんだけど、隊長って意外と面倒見(めんどうみ)がいいわ

よね。それに私やロゼみたいな、人を辞(や)めちゃってる部下にも差別しないし。
それってとっても素敵だと思うわ」
「そうか。もっと褒(ほ)めてくれても構わんぞ」
　そんな俺の言葉にも、今のグリムは動じない。
「隊長の、そういう自信家なところも素敵だと思うわ。強くて頼(たよ)りになって、謎(なぞ)が多くてミステリアスで……。あ、ちょっとエッチなのがいただけないけど……。でも仕方ないわよね、男の人なんだし。それにセクハラが多いって事は、それだけ私を魅力的な女だって思っているのよね？」
「あのねーちゃん乳でけーな……、ん？　ああ、そうそう。って、なんの話だっけ？」
　車椅子を押しながらよそ見していると、グリムがクスクスと笑いながら。
「隊長ってば照れてるの？　聞こえないフリなんかしちゃって、そういうウブなところも可愛(かわい)くて素敵よ？」

なところも可愛くて素敵よ？」
「可愛いなんて言われれたのは、この街でチャックマンとして名を馳せた時以来だわ」
　何を指して可愛いと言われれたのかは考えたくない。
「まさか隊長とこんな関係になるだなんてね……。最初に出会った時は、スカートをまくり上げられて。この人、初対面でなんて事するのって憤ったものだったわ……」
「あれはお前がパンツ見せようとしたんじゃん。俺は絶対悪くない」
「ふふっ、本当は見せる気なんて無かったんだけどね。あ、一応言っとくけど、誰にでもパンツ見せようとする軽い女じゃないからね!?　まだ隊長にしか見られてないし！」
　グリムが慌てながら言い訳染みた事を言ってくる。

さっきからコイツはどうしたんだろう。
別に、グリムが誰にパンツ見せようが俺には関係ないのだが……。
「隊長、このお店がいいわ！」
グリムに案内されてやって来たのは、若いカップル向けなのか、あまり高くない品々が並ぶ装飾品店。

これがスノウだったなら、ここぞとばかりに高級品を買い漁るところなのだろうが……。
「もっと高い店でもいいんだぞ？　今の俺は結構な小金持ちだからな」
むしろコイツが受けている苦情の殆ど(ほとん)は俺達が原因だったりするので、借りを返しておきたいところだ。
だがグリムはなぜか顔を赤らめると、

「そ、そんなに甘やかさないでくれる？　だって、お金が掛かる女だって思われたくないし……。それに私、重い女だって自覚はあるから、そんなに優しくされると本当に取り返しが付かなくなるわよ？」
「もうお前は取り返しが付かない女だと思うけど」
　キサラギにも色物枠は多いが、こんな地雷女はそうそういない。
　俺のツッコミを受けたグリムはますます顔を赤らめると、車椅子の上で膝を抱えて体を縮めた。
「店の前でイチャつかれているお客様、そこでそういう事をされると営業妨害になるので、店内にどうぞ！」
　俺達の様子を覗っていた店員さんが突然声を掛けてきた。
　それを聞いたグリムが恥ずかしそうにしながらチラチラとこちらを見上

げてくる。
「うーん、実に憎たらしい！　お客様、今日は何をお買い求めですかー？」
スマイルだけは絶やさない店員が、どうしてこんな店で働いているのか分からないぐらいの毒を吐く。
グリムは顔を俯かせ、消え入るような声で呟いた。
「あ、あの……。ネックレスを買いに来ました……」
「まあまあまあネックレス！　まったく、ゼナリス様に呪われればいいのに！　おっと口が滑りました、良かったですねー、どうかお幸せに！」
今邪神の名前が聞こえたが、グリムの耳には入らない様子だ。
というかそれより気になる事が。
「なあグリム、この人はネックレスぐらいで何をそんなに騒いでるんだ？」
「「……」」

無言になった二人と共に、何となく装飾品を見ていた他の客までもがこちらに注目した。
「…………お客様、こちらのお嬢様とは恋人同士なのでは？」
「ああ？　ただの部下だよ、部下。ちょっとだけ迷惑掛けたから、お詫びにアクセサリーでも買ってやろうかと思ってな。でも指輪だとなんか勘違いされるじゃん。だからネックレスでいいかなって」
それを聞いたグリムの呼吸が止まった。

6

車椅子の上で膝を抱えたままむくれたグリムが、通行人の視線を一身に浴びていた。

「なあグリム。アンデッドだからって急に死にかけるとビックリするから、もうちょっと気を付けて生きてくれよ」
「誰（だれ）のせいで脈が止まったと思ってるのよ！　嬉（うれ）しかったのに……。誰かから好かれるだなんて、子供の頃（ころ）の幼馴染（おさななじみ）にラブレター貰った時以来だったのに……！　そのラブレターなんてね、今でも大事にしまってあるぐらいなのよ？　そのぐらいインパクトのある出来事だったの！」
　そのラブレターとやらはグリムを復活させる際、ロゼが持ち出していた気がするのだが……。
　未（いま）だ興奮冷めやらないグリムは、そんな事を言いながらも首にぶら下げられた物へ事あるごとに触（ふ）れていた。
　その首には安物のネックレスが掛けられており、道行くカップルを見付けては壮絶（そうぜつ）な目付きでガンを飛ばしている。

「いい加減機嫌直せよー。だって俺、この国の法律も常識も知らないって言ったじゃん。お前だってその辺は期待してないって言ったじゃん。何だよ、ネックレスが婚約の証って。知らねーよそんなもん」
「隊長がこれほどアンポンタンだとは思わなかったわ！　ネックレスにはね、あなたに首ったけとか、お前に首輪を付けて永遠に俺の物に、みたいな意味合いがあるの！　たらしよ！　やっぱ隊長は無自覚なたらしだわ！」
　ええ……。
「俺はたらしのつもりはないぞ。お前が惚れ易すぎるだけだろう」
「何言ってるのよ、あんなに優しくしておいて！　それに、ちょっとだけ迷惑掛けたからそのお詫びに、ですって？　確かにバーで散々奢らされたり、よその女をナンパしといて帰ったり、迷惑は掛けられたわね！　でもネックレスを買って貰うほどの事じゃないでしょう？　やっぱり隊長はたらしだわ！責任取れないのなら優しくしないで！」

俺が迷惑を掛けたと言ってるのは、その事ではないのだが……。
「何だよもう、悪かったよ。じゃあそのネックレス寄越せよ、別のアクセサリーと取り替えてきてやるからさ」
「隊長ったら何言ってるの⁉　私をガッカリさせるだけじゃなく、この上ネックレスまで取り上げる気⁉　ネックレスを貰った初めて記念日として今夜はお祝いするつもりだったのに、私にはそんなささやかな想いすら許されないの⁉」
何だよもう、面倒臭い！
「十年後も俺が独身だったらお前を貰ってやるからさ。いい加減こっち向けよ」
車椅子の上でそっぽを向いて拗ねていたグリムが、グルンと首を捻り振り

向いた
「貰ってやるって何よ、何様のつもりよ！　しかも十年ですって⁉　そんなに私が結婚出来ないって言いたいの⁉　十年後にお互い独身だったなら結婚するって、ちゃんと契約書に書きなさいよ！」
「お前本当に面倒臭いな！　そういうところが重いんだよ！」
　どこからともなく紙を出し、そこに何かを書くグリム。
　コイツ、本気で契約書を作る気なのか。
　どこから出したのか気になった俺がよく見てみると、車椅子の横に小物を入れる袋が下げられていた。
　中を覗くと、そこにはサイン済みの婚姻届の書類が――
「……一応言っとくけど、俺には好きな人がいるからな。あんまり期待はするんじゃないぞ」

「そんな人がいるクセにこの私を口説いたの？　隊長は本当にどういう神経してるの？　でも大丈夫よ、隊長ならきっとフラれるから」

　引っぱたいてやろうか。

「はい、ここに血判を押してね。……ねえ、十年後って長過ぎない？　もうちょっとまからないかしら」

「まからない。っていうかお前がモテないのは、何の躊躇も迷いも無く、血判押しちゃうそういうとこだぞ」

　本当に、呪ったり重かったりガツガツしてさえいなければ、普通にいい女だと思うのだけど。

「私だって誰とでも結婚したがるようなお手軽女じゃないわよ。隊長の事は嫌いじゃないから言ってるの。さっきも言ったけど、ロゼをちゃんと人として

扱（あつか）ってくれてるからね。そういうとこはポイント高いわよ。ほら、ここに名前書いて血判押して！」

「ロゼの事になるとそこそこいい女振りを見せるのに、どうしてそれを維持（いじ）出来ないんだろうなあ……」

執拗（しつよう）に血判を押させようとするグリムを無視し、書類にはサインだけを書いておく。

「よし、これで機嫌は直ったな？　それじゃあそろそろ、街の治安維持活動に行くぞ」

「血判を嫌（いや）がるのがいただけないけど、まあいいわ。約束破ったら呪うからね。それじゃあ報告されている案件を一つ一つ解決していきましょうか」

落ち着きを取り戻（もど）したグリムの言葉に、俺はひとまず息を吐（つ）いた。

――グリムに案内されたのは、俺達が寝泊まりしている公園だった。
辺りを見回したグリムは何かを感じ取ったかのようにコクリと頷き。
「まずはここね。この辺りで突然ぬいぐるみが燃え上がったらしいの。普通なら、あり得ない話だけど、アンデッド祭りの期間中なら予想は付くわ。生前、強い魔力を持っていた人が霊になり、それで……」
「それ、ぬいぐるみに入ってたハイネだぞ。魔王軍四天王のハイネがぬいぐるみに入ってこの近くまで来てたんだ。取り押さえようとしたら炎を出して、なんかいきなり燃え上がった」
…………。
「そういう事は早く言いなさいよおおおおお！　真面目な顔して語った私がバカみたいじゃない！」
「知るかよ、勝手に雰囲気出してたのはそっちだろ！　むしろ、街に潜入し

「知るか。勝手に家出してたのはそっちだろ……むしろ街に潜入してきたハイネを止めた事を褒(ほ)め称(たた)えろ！」

車椅子でガシガシと足にぶつかってくるグリムだが、やがて気を取り直すと。

「そ、そうね、言われてみれば、隊長は街を守ってくれたわけだしね……。まあいいわ、次に行くわよ！」

そう言って次の現場へ足を向けた――

――次に案内されたのは……。

「ここよ。このお屋敷(やしき)で、ぬいぐるみの前に置いといたリブロースが、いつの間にか無くなっていたらしいわ」

案の定、ロゼが居候(いそうろう)している爺(じい)さんの家だった。

屋敷の前の門番に、グリムが近付き声を掛けた。

屋敷の前の門番に、グリムが近付き声を掛けた

「アンデッド祭り運営のグリムです。このお屋敷で不可解な心霊現象が起こったと聞き、調査に来ました」

「おお、待ってましたよ！　さあ、中へどうぞ！　旦那様はパトラッシュが食べてるだけだと言って全く気にしていないのですが、常識的に考えて、ぬいぐるみが物を食べるわけがありませんからねえ……」

言われるがままに案内されると、ソファーの上で猫のように丸くなったぬいぐるみが、爺さんに頭を撫でられて機嫌良さそうに甘えていた。

「……ロゼ？」

それを見たグリムが頬を引き攣らせながら小さく呟く。

「ッツ!?」

悪い事をしている現場を見られたかのように、ぬいぐるみがビクリと震(ふる)えた。
その反応でこちらに気付いたのか、ロゼを甘やかしていた爺さんが、
「おや、お客さんかね？　ああ、そちらの方はこないだの……！」
「まさかの知り合い⁉　ねえ隊長、どういう事なの⁉」
「見ての通りだよ」
俺の言葉で即座(そくざ)に事態を把握(はあく)したのか、グリムの表情が険しくなった。
「ロゼよね⁉　長い付き合いなんだから私の目はごまかされないわよ！　……ちょっと、四つん這(ば)いになってペットのフリしてもダメだからね！」
爺さんの横で巧妙(こうみょう)な演技を始めたロゼに向け、
「まったく、こんなところで何やってるの！　これは死者への冒瀆(ぼうとく)よ！　ほ

ら、バカな事やってないで帰るわよ！」
「何だね君は！　突然我が家にやってきて、パトラッシュに何をするか！」
　ロゼに迫ろうとしたグリムの前に、爺さんが立ち塞がった。
「何よパトラッシュって！　そこにいるのはウチのロゼよ！」
「わけの分からない事を言うんじゃない！　パトラッシュでなければこの強さは何だと言うんだ！　パトラッシュの事を疑ったウチの使用人達も、みんな漏れなくタックルを受けて倒されたんだ。誰がなんと言おうとパトラッシュだ。この子はウチのパトラッシュだ！」
　元々が爺ちゃん子だった上、ここのところ散々に甘やかされたらしいロゼがそれを聞いて立ち上がる。
　そしてグリムの方を振り返ると――
「きゃーっ!?　ちょ、ちょっとロゼ、何するつもりよ！　あなたこんな事して

どうなるか……痛っ！　痛い痛い、分かったわパトラッシュ！　あなたはロゼじゃなくパトラッシュ！　何も言わないから手を離して！」
タックルからの絞め技でグリムがパトラッシュに降伏した。
どうやら祭りの期間中はパトラッシュを辞めないようだ。
毎日食っちゃ寝しながら爺さんに甘やかされる生活がよほどお気に召したらしい。
ロゼから解放されたグリムは俺の背中に回り込むと。
「ロゼ、覚えておきなさい！　アンデッド祭りが終わったら、丸一日何も食べられない災いを……冗談よ、嘘よ嘘！　隊長、早く次に行くわよ！」
突然ダッシュしてきたぬいぐるみから逃げるように、グリムが慌てて言ってきた。

——爺さんの屋敷を後にして、城へとやって来た俺達は……、
「深夜になると怪しげな黒い人影が、城の方へと……」
「ああ、それはウチの戦闘員だな。少し前まで、ティリスの部屋に忍び込んで起こさないようにする遊びが流行ってたんだよ」
　グリムが胡乱な目を向けてきた。
「……ねえ隊長？　今のところ全部身内が関わってるんだけど、他の苦情についてはは何か知らない？」
「後はボッタクリキャバクラでスノウが主犯として捕まった事しか知らないな。……おい、こんなところで寝ようとするなよ、せめて車椅子の上で寝ろ」
　車椅子の上から地面へと、グリムが力無く崩れ落ちた。
「何なの？　あちこちを駆け回って事態の収拾に努めていたら、まさかの身内の犯行だなんて！　後は謎の肉を売る怪しげな屋台ぐらい？」

それに関しては既に謎肉を食ってるぞと言いたいとこだが、教えればもっと早く言えと怒られそうだ。

「だからお詫びにネックレス買ってやったんだよ。最初はあれだけ喜んでたんだから、これでチャラって事でいいよな？」

「いいわけないでしょ！　これだけの事をやらかされたって知ってたら、もっと高い物強請ってたわよ！」

と、グリムが俺に食って掛かったその時だった。

周囲にいたぬいぐるみが、俺達を囲むようにして距離を詰めてくる。

「ほら見なさい！　この子達も私と同意みたいね！　抗議の圧力を掛けにきてるわよ！」

「こんなファンシーな抗議は初めて見たな。俺はこんなもんに屈しないぞ。むしろ……」
ぬいぐるみを見回しながら言いかけたその瞬間、さっきまでグリムが座っていた車椅子が、轟音と共に弾け飛ぶ。
何事かとそちらを見れば——
「ねえ隊長。あの中には誰が入ってるの？　怒らないから言ってみて？」
「こ、今度こそ俺は知らねえぞ。あんなファンシーなのに知り合いもいないからな！」
金属製の棍棒を持った、猫型のぬいぐるみがそこにいた。

『中ボスって大変です』

お手紙ありがとうございます。

三人が俺の事をどれだけ好きなのかが分かって嬉しかったです。

この星は色々大変です。

何が大変かと言うと、まず戦争のおかげで女の比率が高いです。

なのでモテます。めっちゃモテます。

グリムという名の行き遅れは俺にメロメロです。婚約しました。

ロゼというロリっ子には砂漠で遭難しかけた時に危うく食われそうになりました。

スノウというおっぱい女はことあるごとにおっぱいをアピールしてきます。

コイツには既にキスされました。

一応中間報告になりますが、アンデッド祭りが始まったからおっぱいキャバクラを開店して、ぬいぐるみが燃え上がってパトラッシュがタックルかましてきたけど勝ちました。

最近の戦闘員達のマイブームは寝ている美少女の隣で焼き肉パーティーです。

ちょっと端折りましたがこんな感じです。分かりましたか？

戦闘員六号

最終章

アンデッド・ナイト！

1

闊歩するぬいぐるみや人々の間を縫って、グレイスの街をひた走る。
「ねえ隊長、ちょっと待って!?　見えちゃう見えちゃう、パンツ見えちゃうわ！」
「この非常事態に何言ってやがる！　大体お前、俺に散々見られたんだからパンツぐらい今さらだろうが！」
謎のぬいぐるみに襲われた俺は、車椅子を破壊されたグリムを背負い、

仮のアジトである公園目指して駆けていた。

「ちくしょう、アイツは何なんだ！　重いし堅いし無駄に強いぞ！　まともな武器も無いこの状況じゃ話にならねえ！」

　相手はたかがぬいぐるみ。

　最初はそう思って、不意に蹴りをくれてやったのだ。

だがあの猫型ぬいぐるみは携えていた金棒で受け流し、他のぬいぐるみと連携しながら反撃してきた。

　組み付いて引き千切ってやろうかと思えば、ぬいぐるみのくせになぜかしっかりした質量があり、戦闘服を着ている俺以上の怪力で危うく背骨を折られそうになった。

　以前、街中でトラ男さんに斬り掛かって以来、メイン武器であるRバッソーはアリス預かりとなっている。

一応街の外に出る際には返して貰えるのだが、酔ってこの国の御神木とやらを斬り倒したり、酔って観光名所となっていた大岩を削り、美少女像に変えようとした事も関係しているかもしれない。

「隊長、せめておんぶじゃなく抱っこにして！　だんだんスカートがめくれ上がってきたのよ、このままじゃほんとに見えちゃう！　そんな姿で街中を駆け回られたら本気で責任取って貰うわよ！」

「お前本当に捨てていいか!?　自分の足で走れるだろうが！」

「城や建物の中ならともかく、裸足の女の子を外で走らせようって言うの!?　小石が落ちてるから痛いのよ！」

いや、ていうか……！

「そもそも何で俺がお前のとこのぬいぐるみに追われなきゃならないんだよ！　お前アンデッドの元締めだろ、何とかしろよ！」

「そ、そんな事言われても！　確かにあのぬいぐるみは私が作った物だけど、中に入ってるのは知らない子よ！　どうせまた中に人が入ってるんじゃないの⁉　どこかで恨みとか買ってない⁉」
　人が入っている可能性は無くもない。
　ハイネだったりロゼだったり、前科が二件もあるわけなのだが、それ以上に……。
「恨まれる心当たりがあり過ぎて、特定が難しいんだけど……」
「ねえ隊長、やっぱり私を置いていって！　これ、どう考えても隊長に巻き込まれてるだけよね⁉」
　ここでグリムを置いていけば軽くなる分逃げやすくなる。
　しかし、グリムを抱えているからこそ猫ぐるみによる攻撃が本気を出せていない可能性もあるのだ。
　そう、先ほどからあの猫ぐるみはなぜか本気を出していない。

そう、気はとたらあの猫くるみになせた気を占していない
というか、まるで何かを警戒(けいかい)しているような……。
「俺達は仲間だろ？　お前だけ置いていくような事はしない、俺を信じろ」
「仲間じゃなくて部下ですぅー！　いつも上司面(づら)してるんだからこんな時だけごまかされないわよ！　それより、お姫様(ひめさま)だっこを！　このまま運んでいくつもりなら、お姫様だっこにして！　じゃないと、街中の男に見られちゃうー！」
グリムに耳元で叫(さけ)ばれるので、仕方なくお姫様だっこの体勢に移行する。
横合いから飛び出してきた豚(ぶた)のぬいぐるみを蹴飛(けと)ばしながら、何か使えそうな物はないかと辺りを見回し、
「……ねえ隊長、どうしよう。自分で言っといてなんだけど、お姫様だっこされるとこんな状況なのにドキドキしてきて……」

追い掛けてきていた猫くるみに、抱えていたクリムを放り投げた

《悪行ポイントが加算されます》

2

戦闘服の汎用迷彩機能を作動させ、両手で顔を隠しながらゴミ箱の陰に身を潜める。

高級装備である光学迷彩ほどの性能はないものの、パッと見た程度では分からないぐらいにはなる。

くそ、置いていけと言うから良かれと思ってやったのに、まさかこんな事態になるとは思わなかった。

「隊長、出てきなさいな！　近くにいるのは分かってるわよ！　十数えるウチに出てきなさい！　さもなくばこの辺り一帯に、今後一年素敵な異性と

出会えない呪いを振りまくわよ！」
　なんという自爆テロ。
　自らに呪いが返ってくるかもしれないというのに、俺に復讐するためだけに、なりふり構わずやる気のようだ。
　だがこんなものは脅しにもならない。
　素敵な異性と出会えないだけなら、既に出会っている異性に関しては問題ない。
　既に俺の周りには、女幹部に部下や同僚、それどころか敵方にまで女がいる。
　俺からすれば、これ以上ヒロインが増えても持て余すだけであり、新たな出会いなんて……。
「俺ならここだ！　ここにいる！　だから一旦頭を冷やせ！」

俺は両手を上げながらゴミ箱の陰から立ち上がった。
出会いは多ければ多いほどいいに決まってる。
当たり前じゃん。
「この男、やってくれたわね！　憧れのお姫様だっこの最中に、まさかゴミ捨て場に放り込まれるとは思わなかったわよ！」
追い掛けてきた猫ぐるみが投擲されたグリムを躱し、事態がややこしくなってしまった。
さすがの俺もそこまでするつもりはなかったのだが……。
「つまり隊長は、世の行き遅れ女は産廃だって言いたいのね？　うふふふ、どうしてくれようかしら。この男、これからどうしてくれようかしら！」
「待て、落ち着け。よし分かった、取引しよう。俺が活きの良い同僚の戦闘員を紹介してやる。若くて強くて浮気しない、将来性のある連中をだ」

ちなみにイケメンであるとは言っていない。
幾ら追い詰められている行き遅れでもさすがにこの状況では苦しいか？
……だがグリムはしばらく無言になり。
「……そんな、結婚紹介所の職員と同じような事言ったって、もう私は騙されないわよ。でも話ぐらいなら聞いてもいいわ。内容によっては、ゴミ箱に投棄してくれた事は赦してあげても……」
裸足で道路に立ち尽くし、葛藤していたグリムが影に覆われた。
俺を追っていた猫ぐるみが、いつの間にかグリムの背後に立っていて……。
――その光景にデジャブを覚えた。
考えるより先に手が動く。

俺は腰から抜いた拳銃で、猫ぐるみの頭を撃ち抜いていた。
「ひゅい!?　ちょ、ちょっと隊長、いきなり何を……」
怯えた表情のグリムの後ろで、金属製の棍棒を振り上げたまま、撃たれた頭を押さえる猫ぐるみ。
背後を振り向きソイツを見たグリムは、無言で俺の下へと駆け出した。
「助けて隊長！　何か嫌な記憶がフラッシュバックしたわ！」
「俺も一瞬何かを思い出しかけた！　なんかヤバいぞ、アイツの武器にも見覚えがある！」
そうだ、あの重量感のある棍棒は覚えている。
人の顔や言われた事はすぐ忘れるが、戦いに関しての記憶だけは自信が

あるのだ。

ああ……、間違いない！

「思い出した！　アイツは撲殺ヒーロー金色バットだ！　プロ野球選手を目指していたが、靭帯を損傷してプロの道を断念したヒーローで、とある有名ヒーローと名前が被る事からパチモンバットの異名で知られる……」

「隊長、違うわ！　絶対違う！　だって私もあの猫ぐるみの中身にデジャブを覚えるもの！」

グリムが俺の背中に回り込み、猫ぐるみへと指を突きつけた。

「そこのあなた、名乗りなさい！　アンデッドであるのなら、何者もゼナリス様の支配からは逃れられないわよ！　それにそのぬいぐるみは自信作なの！　お気に入りなんだから傷付けないで……って、ああ！」

猫ぐるみはグリムの言葉に耳を貸さず、撃たれた箇所からはみ出る綿を指で押し込んでいた。

「隊長、私の結晶に何してくれるの！　これだけの量のぬいぐるみ達を作り上げるのに、一体どれだけの時間が掛かったと……！」

「そんな事言ってる場合かよ、他のぬいぐるみも集まってきてるぞ！　お前本当に何とか教の司教なのかよ！」

猫ぐるみの周りには、近くにいたぬいぐるみ達が、まるで盾になるかのように集まってくる。

中心にいる猫ぐるみ以外はどこか動きが緩慢で、まるで操られた人形のような……。

「大司教グリムの名において、偉大なるゼナリス様に願います！　この場に

満ちた不死の加護を取り払い、あるべき形に……」
「止めろこら、お前何度自殺したら気が済むんだ！　お前を生き返らせるためのお供えストックはもう残ってないんだぞ！」
　これで何度目かになるグリムの自殺宣言に、これ以上はマズいとさすがに止める。

　だがグリムは不思議そうな表情で首を傾げ、
「隊長ってば何言ってるの？　アンデッドが自殺なんて出来るわけないじゃない。彼等から不死の加護を取り上げるだけよ」
「お前ここ最近の自分の死因を覚えてないのか？　他のアンデッドと一緒に毎回動かなくなってんだぞ」
　どうやらこのポンコツは、毎度自分で自分の加護を解いている事を覚えていないらしい。

グリムは納得いかなそうな顔になりながら、
「このグリムさんがそんな間抜けな事をするとは思えないんだけど……。それにしても、やっぱりこの子達の様子は変ね。ゼナリス様の名を聞いてもピクリとも反応しないわ。あそこにいる猫ぐるみには、ネクロマンサーが入っているのかも……」
ネクロマンサー。
死霊を操る魔法使いの総称で、陰気で根暗なイメージが付きまとうヤツだ。
しかし目の前の猫ぐるみはどう見ても武闘派だ。
「いや、ちょっと戦った感じ、アイツ絶対脳筋タイプだって。ネクロマンサーって賢そうなヤツじゃん。猫ぐるみに入るような頭の痛いのだぞ？」

「声が大きいわよ、聞こえてるから止めなさいよ。……ねえ隊長、何だかプルプル震えてるんだけど……」

怒りを堪えるかのように震えだした猫ぐるみは、金棒を持つのとは反対の手を地に向けて……、

《魔王軍四天王、チノ、ガダルカンド、が、テメエラに命ずる！》

声帯が無いせいだろうか。

俺の脳内に棲んでいるアナウンスさんに似た感覚で、

《この街ノ、生者をコロセ――!!》

猫ぐるみが声にならない声を放った――

3

　グレイスの街をなりふり構わず逃げながら、ピンマイクに向けて呼び掛けた。
「こちら戦闘員六号！　変なのに追われてる！　誰か助けて、武器をちょうだい！　今、胸が大きい子がバイトしてる本屋の前！　強い武器を持ってきて！　オーバー！」
「ああああ！　足がチクチクするうう！　隊長抱っこ！　なんならもう、おんぶでもいいからお願い、運んで！」
　救援を呼ぶ俺に向け、後ろのグリムが悲鳴を上げた。
「この際だから裸足で足裏鍛えとけ！　どうすんだよこの状況、街中にア

ンデッドが溢れてるぞ！」
「私にそんな事言われても！　ねえ隊長どうしよう、これ絶対私の仕業だと思われてるわ！」
　裸足で逃げ回ったからなのか、もしくは今の状況のせいなのか、グリムが泣きそうな表情で訴えかけてくる。

——チノガダル何とかさんが変な事をした結果、地面から大量のゾンビが生えてきた。
　喩え話ではなく、冗談抜きで生えてきたのだ。

当然ながら、街の人達は突如現れたゾンビの群れにパニックに陥った。
ゾンビを相手に抗戦する者、逃げる者。
お爺ちゃん、お隣のお爺ちゃんよねとゾンビに呼び掛け、連れて帰ろうとするおばさんまで。
「そこら辺は俺に任せとけ。今から司令塔のアリスに状況を報告すれば、後は何とかしてくれるだろう。俺達は援軍を待ちながら、アイツをおびき寄せていればいい。周囲の住人を襲っているのは今のところゾンビだけだ。ゾンビは見た目は強烈だけど、それほど強くも無さそうだ、住人が虐殺される事はない！　……と、思う！」
「そこは断言しなさいな、隊長はこの国を守るために雇われてるんでしょう!?　……それにしても、まさか魔王軍四天王、地のガダルカンドが復活

するだなんて……。私とした事が迂闊だったわ。最初に対峙した時に、ゴーレムを操っていた時点で気付くべきだったのに……！」

グリムが、『クッ……！』とかシリアスぶって嘆いているが、俺にはいまいち状況が見えてこない。

「チノガダルさんはお前の知り合いなのか？　アイツは一体何なんだよ、明らかに俺を狙って追い掛けてるぞ」

「ちゃんと自己紹介してたじゃないの、地のガダルカンドって！　以前隊長がやっつけた、魔王軍四天王の一人よ！　地属性の魔法が得意な魔族はね、不浄な大地と繋がりのあるアンデッド達と親和性が高いの。仮にも魔王軍の四天王の一人。ただの武闘派じゃなかったみたいね……！」

地属性はアンデッド。

なるほど、確かにその辺は地球でもお約束だな。

「言われて段々思い出してきたな。アイツ、お前の頭を飛ばしたヤツじゃん。グリムの後ろに金棒持って立った時、どっかで見た光景だなとは思ったんだよ」

「頭を飛ばしたとか言わないで！　そういう事言われると、なんかちょっと複雑だから！」

裸足ながらに俺と併走してくるグリムは案外余裕がありそうだ。

夜型の司教という事でもっとインドア派なのかと思っていたが、これなら逃げ切る事も難しくは——

「……あれっ？　俺達を追い掛けてたアイツ、どこ行った？」

一体どれだけ逃げたのだろう。

いつの間にか俺達を追っていた猫ぐるみがいなくなっていた。

と、グリムが何かに気付いたようにハッとする。

ニマスしれ！　坂よ！　坂に向かったのよ！　坂に併設されている神殿に
は……」
それと同時に、俺達の足止めをするかのように一体のゾンビが立ち塞が
った。
「アガアアアアアアア！」
「昼間ならゾンビなんて怖くねえぞ！　おうこら、掛かってこいや！　……
嘘吐きました、怖い怖い！　グリム、コイツらどうにかしてえ！」
「今日の隊長はビックリするぐらいに役立たないわね！　ゼナリスの大司
教、グリムの名において……」
明るいところで見るゾンビは細部まで見えて怖さ増大だ。
グリムは大きく息を吸い、街に響く大声で。
「冥界より里帰り中の王国民にお願いします！　この街で苦しみさまよう
同胞よ、[illegible]

同胞を土に還す手伝いをしてください！　この場にいるアンデッドよ！　セナリス様の力により……！」

「あっ！　おいよせグリム！」

お守りのような何かを取り出し握り締めたグリムは、辺りの里帰り中のアンデッドに協力を呼び掛けると。

握り締めた物はよほど大切な物だったのか。

「あるべき心を取り戻し、思うがままに！　振る舞い賜え！」

ほんの一瞬だけ握り締めた物に視線を落とすと、悲しげな表情で言葉を発した――

4

グリムが言葉を発したその瞬間、お守りが消えると共に強烈な光が迸

った。
　それまで騒（さわ）がしかったグリムの周りがシンと静まり返る。
　それまで暴れていたぬいぐるみが途端（とたん）に大人しくなり、やがて、俺達に迫（せま）っていたゾンビの一体が、突然（とつぜん）辺りをキョロキョロ見回し……、
「あ、あああえ!?　あ、あんらこりゃーー！　ひったいらりが、ろうらってやがひゅ……」
　もう声帯がヤバいのか、呂律（ろれつ）の回らない口調で口を開いた。
　それが自らの発した言葉だと気付き、そのゾンビが自らの両手に視線を落とす。
「…………おお、おれはゾンヒ化ひてるのか……」
　現状を把握（はあく）したらしいゾンビは、困り果てたように辺りを見回し……。

やがてグリムに目を留めた。
「れなりふのらい司教、フリムはま……。その……」
多分、ゼナリスの大司教グリム様と言いたかったのだろう、そのゾンビは、何も言わずに頷いたグリムを見て、凄惨なゾンビ面で微笑んだ。
「ゼナリス様の名において、許可無く冥界からさまよい出たあなたを赦し、ここに再び眠りに就く事を許可します」
「あ、ありはとうごらいまふ……」
普段のポンコツ振りは一体どこへ逃げたのか、ゾンビを安心させるように、グリムがまるで聖女のように微笑みかけた。
「さあ、安心してお休みなさい……」
グリムは、悪臭漂うゾンビの体を気にもせず、腐りきったその手を両手で握り締める。

ゾンビは安心したように目を閉じると、そのまま音もなく崩れ去った。

そんな、一連のグリムの姿を目にした俺は――

「緊急事態、緊急事態！　こちら戦闘員六号！　グリムが変な物に取り憑かれた！　至急腕のいい医者を頼む、オーバー！」

「お待ち！　聖女もかくやという今の姿に、ケチ付けるのなら考えがあるわよ！」

――五分後。

《おう、どうした六号、応答しろ。一体何が起こってる？》

アリスからインカムに無線が入る。

「やるっす隊長、まさかこの切り札を使う羽目になるとは思わなかったっす。

ーやるわね隊長、まさかこの切り札を使う羽目になるとは思わなかったわ。これは私がずっとずっと祈りを捧げ続けた凶悪な……、いいえ、神聖な呪いの媒体。さあ決着を付けるわよ。今から最高難度の災いを……！」

盛り上がっているグリムを前に、俺はふと我に返った。

「こんな事やってる場合じゃねえ！　おいグリム、何ボケてんだ、しっかりしろよ！　今はアンデッド共が暴走してるんだろ、祭りを仕切ってるお前がこんなとこで遊んでどうする！」

「……!?　そ、そうよ、私ってば何やってるの!?　いえ、ちょっと待って！　元はと言えば隊長が……！　それに、そっちだってノリノリで応戦してたじゃない！」

俺はグリムを正気に返すと、アリスに現状を報告した。

「アリス、街がえらい事になってる！　グリムに泣き付かれてネックレスを買ってやったら、突然猫ぐるみが襲ってきて実はソイツがチノガダルで、ゾンビ

カパーッて消えてグリムの頭がおかしくなった！」
《さっぱり分からんからグリムに代われ》
　グリムに小型マイクを手渡しながらインカムの使い方を説明する。
　とはいえこのインカムの受信は戦闘員の脳内に直接聞こえるようになっている。
　なのでアリスからの言葉は俺の通訳だ。
「相変わらず変わった物を持ってるわね。これに話し掛ければいいのね？」
「そういう事だ、今の状態をアリスに説明してやって」
　グリムの説明で現状がようやく伝わり、アリスからの指示が飛ぶ。
《とりあえず事態は把握した。街中でテロが行われていると思えばいいんだな。暴走中のぬいぐるみ共は、スノウに指揮を執らせ、手の空いている騎士団と戦闘員は施設の治安維持に努めさせろ。グリムとアリスは戦闘の手段を間違え

と戦闘員を使って治安維持に努めよう。ガダルカンドに城の神殿で間違いないんだな？》

「ぬいぐるみにはスノウと騎士団をぶつけるってさ。ガダルカンドが向かったのは神殿で間違いないのか？　ってよ」

「間違いないわ。あそこにはガダルカンドの首が安置されてるの。アイツがこうして動けているのは、今がアンデッド祭りの時期だからよ」

真剣な面持ちのグリムの言葉に、インカムの向こうのアリスが黙り込む。

「四天王なんて大物だったものだから、万が一にもガダルカンドが復活しないよう、神殿で首の浄化を行っていたの。でもガダルカンドの恨みが強くて、未だに浄化出来なかったのよ。アンデッド祭りの期間中はゼナリス様のお力が最も強まる時期よ。おそらくは今回の祭りに乗じて、浄化される前に神殿から首を取り返し、本格的な上位アンデッドとして復活する気だわ」

難しい話になってきたので既に思考を放棄していた俺は、アリスにまとめてもらう事にした。
「つまりどういう事だ？」
《神殿に行けばヤツがいる。自分が武器を持っていくから、今度こそトドメを刺してやれ》
やはりアリスの言う事は分かりやすい。
「何だよ、やる事はいつもと変わらないな。小難しい事並べやがって、アリスみたいに簡単に言え」
「かなり分かりやすく言ったはずだけど！　アリスは一体何言ったのよ！」
騒ぐグリムをそのままに、俺は城へと視線を向ける。
「目標、敵性アンデッド、ガダルカンド。今日は他に戦えるヤツは誰もいないからな。グリム、後ろは任せたぞ」
「城まで裸足で歩かせる気⁉　おんぶか抱っこで運んでよ！」

この騒動が終わったら、コイツを簡単に運ぶ方法を考えよう。

5

城へと向かう道中は地獄絵図と化していた。
そこかしこに倒れ伏す騎士の姿に、グリムが悲痛な声を上げる。
「なんて事……！　体は仮初めのぬいぐるみにも拘わらず、まさかここまでの力を発揮するだなんて……」
　これだけの騎士を相手に一方的に圧倒するとは、なるほど、確かに凄まじい。
「グリム、これちょっと無理臭くないか？　俺がアイツに勝てた頃より、なんかパフーアップしてる惑があるぞ。今のアイツの体はぬいぐるみじゃん。どう

やって致命傷与えればいいのか分かんないし、ぬいぐるみだから弱いのかと思えば見ての通りの有様で……」

と、俺が撤退を模索していると、倒れ伏す騎士の一人が顔を上げた。

「ち、違います……」

……？

「我々を戦闘不能にしたのは、怪人トラ男殿です……。スノウ殿が、猫型のぬいぐるみが大将首、ソイツを優先的に仕留めるのだと指示を出し、騎士をあちこちに分け探索させたのです……。それで、トラ男殿の事を知らない騎士達が猫型ぬいぐるみと勘違いして攻撃を仕掛け逆襲を……」

「指示を出した張本人はどこ行った」

騎士は城の方を指さすと、そこで気力が尽きたのか力無く崩れ落ちる。

……と、その時だった。
街中に響く大音量で、アリスの声が響き渡(わた)る。
《街にいる戦闘員及(およ)び騎士団は直ちに城へ。猫型のぬいぐるみを見付け次第攻撃しろ。猫型だ、トラ型じゃないぞ。繰(く)り返す、戦闘員及び騎士団は城へ向かえ！》
特殊(とくしゅ)な拡声器でも使ったのだろうか、街中の窓がビリビリ震(ふる)え、誰もが声のした方に目を向けた。
「……ねえ、今回のアンデッド祭りで起こってる大半のトラブルって、大体全部隊長の関係者……」
「よし、城へ向かうぞ。こんな事をやらかしたのはスノウだ。手柄(てがら)を焦(あせ)り、アリ

スの言う事聞かずに勝手な指示を出したスノウが悪い。いいな?」

「分かったわ。今回の事はスノウのせい。アンデッド祭りで起こった事は全部、スノウのせい……」

グリムも自己保身に入ったようで何よりだ。

さて、後は――

「――マリエルだ! 血塗(ちまみ)れマリエルがゾンビを狩(か)ってる!」

「さすがマリエル! お前こそが真のチャンプだ!」

遠くからのそんなよく分からない声を聞きながら、グリムを背負って駆(か)け抜(ぬ)ける。

「隊長、あっちにもゾンビがいるわ! 私が正気に戻(もど)すからちょっと寄って!」

「任せとけ! ……なあグリム、今日の俺達ってちょっとだけ輝(かがや)いてない

か？　何だか街を救うヒーローみたいだ」

俺は元々ヒーローに成りたかったのだ。

ヒーロー適性が壊滅的に無かった上に、今の上司にスカウトされて悪の道に走ったのだが、それでも子供の頃の憧れが叶ったようで、ちょっとだけテンションが上がる。

グリムはそんな俺に楽しげな視線を向けながら、

「あなたって、たまに純粋な子供みたいな時があるわね。おねーさん、隊長のそういうところ、嫌いじゃないわよ」

「ケツ丸出しでおんぶされてなきゃ、もうちょっと締まるセリフなんだがなあ……」

「ケ、ケツって言わない！　見えてないわよね⁉　まだ完全にまくれてない

もの……。あっあっ、ちょっと待って！　もうすぐ城に着くからスカートの裾を直させて！」

道中でさまようゾンビを正気に戻し、説得した上で地に還しながら、俺とグリムは城へと向かった。

移動の際には俺がグリムを背負うわけだが、戦闘服を着ているせいで背中に当たる役得感は感じられない。

まあそもそも、スノウとグリムを比べると……。

「ううん……。性格はアレだが、背負うのならスノウが良いなあ……」

「ちょっと、今スノウとどこを比較したのよ！　言っとくけど私は標準よ。何なら平均より上かもね。それに私は好きになった男に勿体ぶったりしないわよ。ほら、よく言うじゃない？　付き合い始めた頃に大人の関係になった際、毎日求められていると体目当てみたいで不安になる……みたいな。私は

そういう面倒臭い事言ったりしないからね？」
　変な対抗意識が刺激されたのか、グリムが早口で捲し立てる。
「聞いてもないのにそういうアピールしてくるとこが面倒臭い」
「!?」
　何やらショックを受けているグリムを背負い、次のゾンビの下へと向かう。
　グリムは何か言いたげな顔をしながらも、文句を言わず仕事をこなす。
　……しかし、移動中はケツ丸出しでおぶわれる痴女だが、ゾンビを地に還す瞬間だけは一端の聖職者の姿に見えるな。
「お前って、いつもそういう聖職者オーラ出してれば、とっくに嫁入り出来てると思うんだけどな」
「ど、どうしたの隊長？　急にそういう事言われると動揺するから止めてくれない？　いい加減私を弄ぶのはどうかと思うわよ」

長い独り身生活の弊害で、褒め言葉を素直に受け取めるという事が出来ないらしい。

手がゾンビ汁で汚れても嫌な顔一つせず、安心させるように相手の手を優しく握りながら地に還っていくのを見送るグリム。

逃走中にあちこちが薄汚れ、裸足姿も相まってパッと見は路頭に迷ったホームレス女みたいだが……。

「口を開かず常にキリッとしてれば、多分数年以内に結婚出来るぞ」

「そんな生活お断りよ。私はゼナリス教徒であっても自分を受け入れてくれる、優しい旦那様を見付けるわ。たとえ独り身が続いたって、十年後には嫁入り先の当てが出来たし問題ないわ」

コイツ、俺と交わした契約を本気にしてやがるのか。

本当に、[illegible]が男に避けられるのは[illegible]、小一時間程説

本当に、お前た男に退けられるのはそういうことだぞと、小一時間ほど説教したい。
しかし……。
「城に近付くほど酷い有様になってるな」

「ええ……。ね、ねえ隊長。魔王軍四天王なだけあって、ガダルカンドの力が予想以上なんだけど、万が一があったら守ってくれる？　もしかしたら、死者を操るネクロマンサーとしての力は私以上かもしれないの」
あちこちに転がっている傷だらけのぬいぐるみ。
それらは昔、この国のために散っていったご先祖様。
そして今もまた、里帰り中にこの国の危機を知り、再び散っていった者達だ。

城へ向かうガダルカンドの前に立ち塞(ふさ)がり、ボロボロになるまで蹴散(けち)らされたのだろう。

グリムはそれらのぬいぐるみを抱き締めて、何かを呟(つぶや)きそっと置く。

「本当に、普段(ふだん)からそういう姿を見せとけば……」

「……？　なに？　どうかした？」

男という生き物はこういうギャップに弱いものなのだが、コイツの場合それを教えてやると四六時中アンデッドの浄化を始めかねない。

たまにそういう姿を見せるから良いのであって、しつこいぐらいに聖女様へ変貌(へんぼう)するのが目に見えている。

「何でもない。それより、そろそろ城だけど準備はいいか？　ゾンビやぬいぐるみの数も減ってきたし、ここからが本番だぞ」

「分かってるわ。イザとなったら取って置きを使うから」
グリムはそう言って、胸元から何かを取り出した。
それは、先ほど俺と対峙した際に使おうとしていた、子供用のネックレス。
成長し、身に着けるのが憚られたため、こうして胸元に入れ持ち歩いているのだろう。
「人を呪うのならそれに対する代価が要るわ。当然代価となる物は価値があればあるほど良い。コレはね、子供の頃に幼馴染みがくれた物なの」
…………嫌な予感がする。
「そんなに大事な物なら仕舞っとけよ。アリスが来てくれれば多分なんとかなるだろうし」
むしろこれからもずっと大事にしてくれ。

そんな　最近代わりのネックレスを手に入れたから　もう大丈夫みたいな……、
「ううん、隊長から代わりのネックレスを貰ったから、もう大丈夫。子供の頃の想い出は想い出のままに。いつまでも過去に縛られていないで、私も前に踏み出すわ！」
「なあ、俺が言った事覚えてるか？　十年後に独り身だったら貰ってやるって言ったんだからな？　いい人が見付かったら食い付けよ？」
　必死になって説得するが、グリムはちっとも聞いてない。
「まだ五つの頃、大人になったら結婚しようねって言ってくれたあなたは今、どうしてますか？　思春期になったら胸の大きい女にアッサリ捕まったあなたは今、幸せに暮らしてますか……？」
「なあ、私は新しい人を見付けたからあなたを忘れて生きていけます、みた

いなの止めてくれない？」

6

「――ここからは自分の足で歩いて行くわ。戦いの予感がするのよ。背負われたままじゃ隊長の足手まといになるからね」

「そういった、私手が掛からない女ですアピールは今さらだぞ。……誰かいるな？」

城の正門に近付くと、何者かが戦っている。

「ふはははははっ！　ここから先は誰も通さぬ！　我がフレイムザッパ――三世の錆となれ！」

門に近付くぬいぐるみやゾンビ達をスノウが景気よく燃やしていた。
「グリム、この騒動の黒幕を見付けたぞ。ゾンビとぬいぐるみは任せたぞ。俺は黒幕の確保に移る」
「ええ、任せといて。黒幕の逮捕はお願いね」
グリムが何かを呟きながらゾンビ達へと近付いて行く。
「二人とも遅かったな、手柄は私が貰ったぞ！　ふはははは、これを見ろ、大戦果だ！　しかもこれだけではないぞ。敵指揮官は猫型のぬいぐるみだそうだ。私の指示で！　現在、私の指示で騎士団が敵指揮官を捜索している。指揮官が倒されるのも後は時間の問題だろうな！」
浮かれきっているスノウを前に、俺とグリムは頷き合うと。
「おらあああああ！　観念しろ、この黒幕が！」
「なっ⁉　六号、貴様何をするか！」

俺は高笑いを上げていたスノウを確保した。
「隊長、そのまま捕まえといて！　さあ、あなた達、もう大丈夫よ。無理やり戦わされる必要はもう無いの。後は私に任せて安らかに眠り（ねむ）なさい」
スノウが取り押さえられたのを見届けると、グリムはアンデッド達を正気に返す。
そのまま地に還すための作業を終えると、ジタバタともがくスノウの下へ。
「おのれ貴様ら、血迷ったか！　まさか私の手柄を欲（ほっ）するあまり、このような手段に出るとは恥（はじ）を知れ！」
「な、なぜかしら、スノウにそういう事を言われると凄（すご）く傷付くのだけど……」
胸を押さえるグリムに代わり、俺が罪状を伝えてやろう。
「おいスノウ。お前やらかしやがったな」

「は？　一体何を言っている。私は何もしていない……ハッ⁉　き、貴様……ッ！」

　自分のやった事に今さらになって気付いたのか、スノウが悔(くや)しげな顔をする。

「例のボッタクリキャバクラの事を引き合いに出すつもりだな？　なるほど、今回の手柄(てがら)の報酬(ほうしゅう)を山分けにする代わりに、ボッタクリキャバクラの件は内密にする、と。つまりはそういう取引か。良いだろう、それではお互(たが)いの取り分だが……」

「そんな事一言も言ってねえ。……お前、口止めや報酬の山分けの流れがスムーズ過ぎやしないか？　ひょっとしてこういう事をしょっちゅうやってるんじゃないだろうな？」

　俺の言葉にスノウが黙(だま)る。

「……口止めや報酬の山分けでないとするなら、これは一体何の真似だ？」

「お前、アリスからは治安維持を命令されていたのに、騎士団使って勝手に猫ぐるみ狩りを指示したろ。騎士団が猫ぐるみとトラ男さんを間違えて、攻撃仕掛けて壊滅したぞ。おかげで街の治安は乱れるわ猫ぐるみは見失うわで大変な事になってるぞ」

…………。

「違うんだ、私の話を聞いてくれ」

「分かった、後で聞いてやる。地下牢でゆっくりな」

　取り押さえているスノウが暴れ出した。

「だって仕方ないだろう！　最近まで取り調べを受けていた事で、ティリス様からの私への信頼低下は免れない！　なら、手柄を挙げて名誉挽回するしかないではないか！」

コイツとうとう開き直りやがった。

「お前は指揮官としては普通程度なんだから余計な事をしなくていいんだよ！　おかげで街中のぬいぐるみやゾンビは俺達だけで収拾するハメになったんだ。おい、お前はずっとここに居たのか？　ぬいぐるみは通してないだろうな⁉」

「ちゃんと門番していたから問題ない。城への侵入経路は現在この正門しか無いからな。ずっとここに立ちはだかっていたから大丈夫だ」

　取り押さえられたままのスノウの言葉に、俺とグリムは息を吐く。

　どうやらガダルカンドに城内へ侵入されるという最悪の事態は免れたようだ。

　となれば後は唯一の出入り口であるここの守りを固め、ウチの戦闘員達がぬいぐるみを狩り出すのを待てばいい。

……と、抵抗を諦めたらしいスノウが柔らかい口調で語りかけてきた。
「なあ六号、取引しないか？　私は、猫型のぬいぐるみが暴走し、街で暴れているとしか聞いていない。これはひょっとして魔王軍の仕業なのでは？」
……コイツ、事情を知らされてないクセに案外勘が働くな。
　そういえば以前、まだ初対面に近かった俺の事を、スパイだとも言い当てた。
　ただの守銭奴かと思えば、コイツ意外とバカには出来ない……、
「うん、これは魔王軍の仕業だな。いいや、そうに違いないとも。ほら、荒野に放り出した炎のハイネが魔獣どもの餌になり、無念を晴らすためにアンデッド祭りに乗じて復活したのだ。魔王軍幹部ともなれば死者を操る法を知っているヤツがいてもおかしくない。となれば、今回の全ての騒動は魔王軍による破壊工作！　落としどころはこんなところでどうだろうか？　こ

の取引に応じてくれるなら、コレクションの中から綺麗な剣を一本譲ろう。
な？　悪くない取引だろう？」
ちょっとでも感心した俺に謝って欲しい。

――と、その時。

城の中からけたたましい鐘の音が鳴り響いた。
それと同時に中庭の辺りから何かがぶつかる激しい音も聞こえてくる。
「……誰も通してないんだよな？」
「何だその目は、私を信じろ！　本当だ、私はずっとここにいたし、他に侵入経路はないはずだ！」
俺に疑いの目を向けられて、スノウが必死に弁解する。
と、グリムがそんなスノウに首を傾げ。

「でもこれ、悪魔(あくま)やアンデッドみたいな、不浄(ふじょう)な存在が城に侵入した時に鳴る警報よ？　……ちょっと、そんな目で私を見るのは止(や)めなさいな！　私は不浄な存在ではないわ！　まだ完全なアンデッドには成っていないんですうー！」
……となると、中で暴れているのは……。

7

正門を開けて中を覗(のぞ)くと、そこには二匹(ひき)のぬいぐるみが対峙していた。
「おい」
「ちち、違う、私はちゃんと見張りをしていた！　きっと他の場所から侵入

したのだ！　……しかし、外壁にグルリと囲われたこの城に、一体どこから潜り込んだのか……」

　スノウの言葉で思い出す。

ティリスの部屋に侵入した際、外壁に打ち込んだくいの事を。

そういや俺、壁に刺さったくいを回収してない。

「まったく、スノウはこの状況をどうしてくれるの⁉　騎士団を率いても街の治安は守れないわ、アッサリと侵入者を見逃すわで……」

「待てグリム、そこまでだ。今はスノウのミスを責めている場合じゃない。なぜか睨み合っているあのぬいぐるみを、どうにかするのが先決だろう」

　正論を吐いた俺に向け、グリムとスノウの表情が変わる。

「これもお前が関わっているのか？」

「隊長、後で説明してよね！」

「俺、まだ何も言ってないのに

二人の疑惑の視線を無視し、ぬいぐるみ達を観察する。
一匹は、特徴のある金属製の棒を持った猫型のぬいぐるみ。
コイツの中身はガダルカンドだろう。
問題はそれに対峙するもう片方だ。
あの犬型のぬいぐるみは、どこかで見覚えがあるような……。
「ああっ！　ねえ隊長、あれってパトラッシュじゃないの!?」
そうだ、あれはパトラッシュだ！
飼い主の爺さんに街を救えと命じられたのか、なぜかパトラッシュがそこにいた。
「おい六号、パトラッシュとは誰の事だ!?」
「パトラッシュはパトラッシュだ、マウンティングゴリラのパトラッシュだよ！」
「あ、あの子一体何やってるの……」

ガダルカンドと対峙していたパトラッシュは俺達の姿に気が付くと、これで自分がやられたとしても後を託せるとばかりにガダルカンドへ突っ込んで行った。
体勢を低くしてのタックルに、ガダルカンドが足を取られる。
そのままマウントの体勢に移行すると、パトラッシュは遠慮無くぶん殴った。
「いいぞパトラッシュ！　そのままそのまま！」
「出来れば寝技で拘束して！　そうしたら後は任せなさい！」
「だからパトラッシュとは誰なんだ！」
応援を飛ばす俺達外野に、パトラッシュがチラリと視線を向けた。
何か困っているような視線だが……。
と、マウントを取られ殴られていたガダルカンドが、手にしていたリーチの

長い金棒を手放しながら、パトラッシュに拳（こぶし）を打ち込んだ。
　あれだけ殴られたのに全く効いていない風のガダルカンドに、ふと気付く。
「体はぬいぐるみなんだから、殴られたって効くわけねーじゃん！」
「そういえば！　ロゼ、今助けるわよ！」
　優勢だったため傍観（ぼうかん）していた俺達はパトラッシュの下（もと）へ駆（か）け出した。
「ロゼ⁉　なぜここでロゼの名が出てくるんだ⁉」
　一人事情を把握（はあく）出来ていないスノウも付いてくる。
《ガアアアアアアア！》
「ッ⁉」
　腹部に強烈（きょうれつ）な蹴（け）りを受け、パトラッシュがその場から撥（は）ね飛ばされた。
「おいロゼ、もうパトラッシュはやらなくていいんだぞ！　痛かったら声を出

せ！」
「い、痛いです……！　思いっきりお腹蹴られました、何なんですかこの人は！」
遠くに撥ね飛ばされたパトラッシュことロゼが腹を押さえながら立ち上がる。
それを見たスノウがここぞとばかりに前に出た。
「どうしてロゼがそんな格好でここにいるのか知らないが、相手が燃えやすいぬいぐるみなら、ここは私の出番だな」
どうやら、相手はたかがぬいぐるみと舐めきっているようだ。
炎を上げるフレイム何とかを携えて、大物感を漂わせながらスノウが吠えた。
「どこの誰だか知らないが、私の前に立った事をあの世で後悔するがいい！」

―ソイツの中身はガダルカンドだ。以前ロゼやグリムと戦った、魔王軍四天王のガダルカンドだよ。その、あの世とやらから戻ってきたんだ」

　スノウが無言で固まった。

《ケヒッ、ケハハハハハハッ！　よう、久しぶりダナア、クソ共よぉ。見覚えがあるヤツばかりデ嬉しいゼエ！》

　地面の金棒を拾い上げ、耳障りな念波で語りかけてくるガダルカンド。

　ようやく相手の正体に気付いたスノウが冷や汗を垂らして後退る。

　俺は警戒する皆の前に、一歩足を踏み出した。

「おうおうおう、随分と変わり果てた姿になったなあ、ガダル何とかさんよお！　前の姿より今の方が良いと思うぞ？　以前の鬼面じゃあ女も寄って来なかっただろ。こっちの方が絶対モテるぞ」

　俺の挑発的な言葉を受けて、ガダルカンドがピクリと動く。

コイツの性格は知っている。
強気で傲慢、短気で凶暴。
キサラギにはよく居るオーソドックスタイプな性格だ。
《……誰のせいでこんな姿にナッタト思ってやガル。待ったぞ？　いやあ、散々待たされたゼエ！　お前に、お前ラに、どうやって復讐してヤロウカって考えながらナ！　アンデッド祭りが無かったら、そろそろ自我がホウカイするとこだった。そうだ、オレはツイテル。祭りに乗じて現世にモドリ、この体を得て力も手に入れタ……》
「お前結構喋るんだな。前はもっとこう、人の話聞かない系だったじゃん」
余計な茶々を入れてやるとシンと黙り込むガダルカンド。
金棒を持つ手が震えている事から、怒りを抑え、冷静になろうとしているようだ。

《……ヘッ。ヘッヘッ、フヘヘヘヘッ！　ヒャハハハ、お前、そうやって時間稼ぎしてんのかァ？　そうすりゃここに助けがクルって？　なあ、そう思ってんのカァ？》

　おっ、何だコイツ、急に余裕出してきたな。

「お前、何か企んでるよな。切り札を隠し持ってるか仲間が来るか、まだ俺は変身を残してる、本気出してないだけってパターンだ。なあ、この内のどれ？　この中に正解があるんだろ？　他のパターンだったら新しいって褒めてやるよ」

　図星だったのかガダルカンドの動きが止まる。

《……余裕持っていられるのも今のウチだ》

「おっ、見ろ見ろ当たりだ！　動揺してるぞ！　何だよ、よくあるヤツかよつまんねえな。ガッカリだよ！　お前にはガッカリだ！」

コイツは挑発に強いタイプじゃ無い。
煽(あお)りに煽ってやると案の定、ガダルカンドが苛つき始めた。
「隊長、あまり煽るのもどうかと思うのだけど……。でも安心して。私はアンデッドのスペシャリスト。もしアンデッドを呼ぼうとしたら、今度こそは防いでみせるわ」
「よし、そっち方面は任せた。なら後は、この俺が弱っちいコイツを仕留めるだけだな」
　グリムに触発(しょくはつ)されたのか、ロゼとスノウも一歩踏み出し前に出る。
「隊長、格闘(かくとう)戦なら任せてください。ぬいぐるみを着てるから炎を吐(は)く事は出来ませんが、攻撃(こうげき)を防ぐぐらいはどうにかなります！」
「私は全体の戦況(せんきょう)を見極めて、いつでも撤退(てったい)の合図を送れるようにしてお

こう」
一人だけ腰が引けた事を言うのがいるな。
この状況に業を煮やしたのか、ガダルカンドが金棒をフラフラと動かしながら、
《弱っちいのが集まっても雑魚は雑魚ダ。よく見りゃそこにいるヤツらハ、弱いクセに噛み付いてきたキメラのガキに、かなわないからと逃げた騎士、一度オレサマに殺されたアンデッド女じゃネエカ》
「おっ、そうだな。その弱っちい三人の上司の、俺にぶっ殺されたのがお前だったな。コイツらは俺とそこそこ渡り合える連中なんだ。何も出来ずに俺にやられたお前と違うんだよ。……あれっ？　じゃあお前ってさらに雑魚じゃん。俺の部下よりさらに雑魚じゃん！」
我慢の限界に近付いてきたのかガダルカンドが戦闘態勢に移行する。

「おっ、やるのか？　お前状況分かってる？　こっちは四人、お前は一人。しかもそっちはぬいぐるみで、俺達にはスノウの魔剣もある。しかも俺達は時間を稼いでいるだけで、アリスのアナウンスを聞いた連中が救援に来るだろう。それでもいいなら掛かって来いよ。ほら、逃げなくていいのか？　おっ？　おっ？」

　挑発を続ける俺の後ろでスノウがポソリと呟いた。

「貴様の、人を煽る事に関してだけは本当に感心する。たまに相手が気の毒になる……」

　俺だって意味も無く挑発しているわけではない。

　確かに実際のところは楽しくて挑発している部分が大半だが、ガダルカンドをキレさせるのが目的なのだ。

　コイツは一見脳筋だが、意外と知恵も働くし警戒心も強い。

ここで一番困るのがぬいぐるみを捨てて逃げられる事だ。
霊体になって他の体を手に入れられると、初見でコイツだと見抜けなくなる。
どうにかコイツを取り押さえ、ぬいぐるみに閉じ込めたままお祓いしないと……。
《そろそろダナ》
――ガダルカンドが呟いた。
何が、と尋ねる前に。
城のどこからか、窓が割れる音と悲鳴が聞こえてきた。
コイツの目的は自らの首を取り戻す事。
なら今の悲鳴は――

ま ぞく

「六号、見ろ！　アンデッドじゃない、アレは魔族だ！　コイツの部下だ！」
ソレは以前ガダルカンドと戦った時、周囲を飛んでいた魔族だった。
コウモリのような翼を持った二足歩行の悪魔像。
俗にガーゴイルとか呼ばれる魔族が、何かを抱えて滞空していた。
それを見たガダルカンドが脇目も振らずに駆け出した。
「お、おのれ、やらせるか、手柄首！　前回の雪辱戦だ、これでも食らえ！」
背中を見せたガダルカンドにスノウが迷いも無く斬り掛かる。
相変わらず不意討ちに関しては高いスキルを持つヤツだ。
ちゃんと斬り付けてから口上を述べるところは評価が高い。
《どこでもいいから首を置け！　地面に面していればそれでいい！》

「くっ、こっちを見ろ、ガダルカンド！」
スノウがぬいぐるみの腹に灼熱剣をねじ込むが、ガダルカンドは意にも介さず地面に向けて手をかざした。
それと同時にグリムが叫ぶ。
《魔王軍四天王、地のガダルカンドがテメエラに命ずる！》
「ゼナリスに仕える大司教、グリム＝グリモワールが命じます」
ガダルカンドは一瞬だけ、忌ま忌ましそうにグリムを見ると。
《起きやがれ！》
「眠りなさい！」
二人が同時に叫んだが、何事も起こらなかった。
「ガダルカンド様、こちらに首を置いていきます！」
部下のガーゴイルが抱えていた何かを落とそうとする。

ガーゴイルに向けて腰から抜いた銃を発砲すると、頭を撃たれたガーゴイルはそのまま墜落し、首も一緒に落下していく。
それが地面に着く寸前。

「おりゃー！」

宙に舞っていたガダルカンドの首に、ロゼが飛び蹴りを食らわせた――
――炎に包まれたガダルカンドは途方に暮れたように立ち尽くすと、力無く項垂れた。
ロゼが空中で蹴り飛ばした事でガダルカンドの頭は城壁に激突した。
神殿で長く保管されていたせいか、思ったよりも耐久力が落ちていたら

しく――
《あーあ、嫌になるゼ。首が砕けちまってるじゃねえカ》
ガダルカンドが投げやりな口調で独りごちた。
俺はまだ警戒は解かないまま、肩を落とすガダルカンドに、
「配下はアンデッドだけかと思ってたら、ちゃんと生きている部下も潜ませてたんだな」
《へっ、アンデッド共を城の要所に侵入させると警報が鳴り響くからナ。俺がこの城に入った時の、あの鐘ダ》
もはやガダルカンドが乗り移っていたぬいぐるみは完全に炎に包まれ、人型の火の精霊みたいになっている。
《大体、オカシイと思わなかったのかよ？　オレが持ってるこの武器は、どこ

から調達したと思ってヤガるんだ》
「言われてみればそりゃそうか。ところで今のお前、炎の魔人みたいになってんぞ。なんかちょっとカッコイイな」
俺の軽口を聞いたガダルカンドはふとこちらを振り向いた。
燃え盛る炎で表情は見えないものの、俺の意図は見透かされているらしい。
《最期に良い感じにシテ、このまま終わらせようって魂胆か？　お前みたいな姑息なヤツのカンガエはよく分かるゼ。何せ、オレも同類だからな》
やはりこのまま終わらせてはくれないらしい。
「そんな事ないですよ！　今のあなたは凄くカッコイイです！　炎の魔人、ピッタリです！　魔王軍の火の四天王を名乗るべきですよ！」

本気で琴線に触れたらしいロゼが拳を握って叫んでいる。
キメラの感性だけはよく分からない。
「それじゃ、時間が無さそうだし始めるか？」
《いいや、この体は捨てる。時間が無いのは確かダガ、魔王軍四天王ともナレバこういう事ぐらいデキルんだよ》
地面の土が盛り上がり、人型を成していく。
それは、以前グリムがその辺の悪霊を閉じ込めた、土で作った仮の依り代にソックリだった。
あの時は土くれの依り代では耐えられず、あっという間に爆散した。
時間が無いというのは、つまりそういう事なのだろう。
《本の一部でも残ってりゃあ、土くれをその辺の死体と入れ替えて、少し

《俺の一部を残しといてあそこ、それをこの辺の死体から、その都度少しずつ回復出来たんだろうがなあ……。まあ、この体でも、テメエらを道連れにスルぐらいは充分よ》

土くれとはいえ、言ってしまえばその体はゴーレムみたいなものだ。

生前の巨体を取り戻したガダルカンドに殴られれば、首ぐらい簡単にへし折れるだろう。

「今回はメイン武器が無いんだよ。ハンデとしてコイツらと一緒に戦っていい？」

《構わねえぜ。どうせ一人も逃がすつもりはナイからな》

さすがは俺達の同業者、それでこそ悪の幹部だ。

「それじゃあ改めて名乗るとするか。……秘密結社キサラギ社員、戦闘員六号だ！」

《魔王軍四天王が一人、土のガダルカンド様ダ！　テメエラは四人とも、地獄

獄の底まで付き合ってもらうぜ！》
俺の後ろで皆が身構えたのが気配で分かる。
Ｒバッソーが無い現状、どう考えても俺が不利だ。
だがこういう時こそ、仲間達との友情パワーってヤツで――

「お前らそんなところで何やってんだ？」

それは聞き慣れた相棒の声。
ここに来たって事は、当然アレを持ってきているはずだ。
俺はガダルカンドから目を離さずに、未知数の友情パワーではなく、頼れる相棒へと手を伸ばす。
「アリス、コイツがガダルカンドの成れの果てだ！　俺達にやられたのを逆

恨みして、復讐に来たんだよ！　当然持ってきてるんだろ⁉　Rバッソーちょうだい！」
《テッ⁉　テメエ待てコラ、ハンデはどうした！　それとさっきまでのあの流れは……》
　悪の組織の幹部として最期を看取ってやりたいが、そういうのは命があってこそ成り立つものだ。
「うるせえバーカ！　俺達は悪の秘密結社キサラギだ！　良い感じの空気に流されやがって、あんなもん時間稼ぎの演技に決まってるだろうが！」
《こ、この野郎、ぶっ殺してヤル！》
「「ちょっ……！」」
　突然仲違いを始めた俺達に、アリスを除いた三人が何かをツッコみかけたその瞬間。

「悪の組織は二つも要らねえ！　同業者は八つ裂きだ――！」

《クソガアアアアアアアアアアアアアア！》

　俺達の勝敗は決していた――

8

　バラバラになったガダルカンドが、崩(くず)れ去りそうな土くれを何とか維持(いじ)し、俺を睨(にら)み付けてきた。

《コレデ終わりだと思うなヨ。本来なら最期に戦って終わると思っていたが、これだけの怒(いか)りがアレバ来年の祭りまで自我が持つ。覚えておけ、次はテメーが》

「次は無いわよ」

　ガダルカンドの最期の言葉をグリムが無情に遮(さえぎ)った。

《……邪魔（じゃま）すんじゃねぇヨ、ゼナリス教徒。お前も人間辞めた口だろ？　一体なにするツモリだよ》

「不死はゼナリス様の専売特許よ？　やる事と言ったら決まってるでしょう？」

　ガダルカンドの成れの果てに、グリムがふっと微笑（ほほえ）んだ。

《ゼナリスを正しく知らないのか？　呪（のろ）いを使うつもりなら止めておけ。ゼナリスは公平ダ。意味も無く相手に大きな呪いを行使するほど、呪いが返ってくる確率は高くナル。俺を呪えばお前の方が死ぬだろうヨ》

「ええ、ゼナリス様は公平よ？　私は昔、一度あなたに殺されてるわ。きっと公平に裁いてくれるでしょうね」

　ガダルカンドの成れの果てはグリムの言葉に黙（だま）り込む。

「……安心なさい。私はゼナリスの大司教。アンデッドを土に還す（かえ）のは最も大切な役目なのよ？　呪いなんて使わないわ」

　グリムは静かに微笑みながらガダルカンドに歩み寄る。

《今のオレは強烈（きょうれつ）な怒りを覚えている。浄化（じょうか）するのは大変ダゾ》

　俺達が何も言えずに見守る中、二人の不死者はお互（たが）いに牽制（けんせい）し合っていた。

「もう一度言うわ。私はゼナリスの大司教。不死の女神ゼナリス様からどれほど寵愛（ちょうあい）を受けた者でも、必ずその加護を取り払（はら）ってみせるわ」

《ソウカ……、そんなに自信があるならやってミロ。上手（うま）くいったら大人しく眠りに就（つ）いてやるカラヨ》

ガダルカンドのその言葉に、グリムは優しく微笑むと。
「もし生まれ変わったら、次は人間になりなさい。いい男に生まれたら、デー

トしてあげるから」

《俺の好みには細すぎるナ。もっと筋肉がネエと物足りねえヨ。次もオーガ種に生まれるとするゼ》

皮肉げなその言葉に、グリムは苦笑を浮かべると――

「偉大なる女神、ゼナリスよ。敬虔なる信徒である、グリム＝グリモワールが願います。この場に満ちたる不死の加護を取り払い、永遠の眠りに就かせたまえ――」

まるで聖女のように両手を組んで、目を閉じ念じるグリムの祈りは――

この日、二人の不死者を地に還した――

エピローグ

あれだけシリアスな流れの中で、まさか自ら諸共ガダルカンドを浄化するという荒業に、その場にいた全員が呆然と立ち尽くした。
グリムが天に召されたあの日から、数日が経った今。
俺はある場所で跪き、小さく祈りを捧げていた。
ここは、天井の一部から月の光が差し込む小さな洞窟。
洞窟の最奥には、邪神ゼナリスが奉られている小さな祭壇がある。
そしてその祭壇前の台座には、グリムの遺体が安置されていた。
アンデッド祭りや街の事後処理はアリスに任せ、俺はグリムを復活させるべく、こうして遺体を運んで毎日祈りを捧げていたのだが――。

「これはもうダメかも分からんね」

贄として捧げている品々が消滅する様子がない。

これはつまりグリム復活に必要な想いの品が足りてないという事だった。

アンデッド祭りの功労者でもあるグリムの下に、今回助けられた人々から、たくさんの品々が届けられたのだが――

本気で祈りを捧げた自殺行為に、とうとうグリムが召される時が来てしまったようだ。

お互いに十年後も独身だったら結婚する約束をした以上、コイツは俺の婚約者みたいなものなのだろうか？

「これも死亡フラグってヤツなのか……」

俺がサインした書類を大切そうに仕舞っていたが、アレがグリムの敗因なのだろう。
……と、俺はグリムの胸元にある何かに気が付いた。
それは求婚(きゅうこん)の意味があると知り、グリムから取り上げようとしたネックレス。
そういえばコイツ、このネックレスをやった時は引くぐらいに喜んでたなあ……。
このネックレスも一緒(いっしょ)に埋葬(まいそう)してやろう。
そう思い、ネックレスをグリムから外したその瞬間(しゅんかん)——
ネックレスが光に包まれ消失した。

「…………………………俺のせいじゃないよな？　俺、別に悪い事してないよな？」

思わず誰にともなく言い訳するが、勿論返事はこない。

と、それを切っ掛けにしたかのように、辺りに置かれていた想いの籠もった品々も光に包まれ消えていく。

ああ、これは――

「おうグリム、目が覚めたか」

「…………目が覚めたら隊長が傍に居る、このシチュエーションは二回目ね……」

そういえば、グリムと会ってから初めての復活の際も俺が一人で残ってたんだっけ。

「あの時みたいにデートでもするか？」
　そんな俺の軽口に、グリムは楽しげに笑みを浮かべ。
「遠慮しとくわ。なぜか、変な女にヒステリックに喚き散らされる夢を見てね……。いい加減に学習しろだの、祭りはどうにか無事に終わったものの、ちゃんとしろだの……」
「それ、絶対ゼナリスって神様だろ。お前、アンデッドのくせに何度も自殺するから怒られたんだよ」
　俺の言葉の何がツボに入ったのか、グリムが笑いを噛み殺す。
「ふふっ、アンデッドが自殺なんて出来るわけないでしょう？　隊長ってばおかしな事ばかり言うんだから……。それにしても、ガダルカンドを浄化した際に力を使いすぎて気を失っていたみたいね。だからって、ここに運ばなくても良かったのよ？　別に死んでたわけじゃないんだから」
「いや、お前は死んでたよ。何都合良く勘違いしてるんだ。お供えが軒並み

消えるぐらい危険水域だったんだぞ」
　それを聞いたグリムはとうとう堪（こら）えきれなくなったかのように笑い出す。
「はいはい、そういう事にしといてあげるわ。まったく、隊長ったら面白（おもしろ）い事ばっかり言うんだから……　……あれっ」
　俺の言う事をちっとも信用しようとしないグリムは、ふと胸元に手をやると。
「えっ？　ちょ、ちょっと待って、無い！　無いわ!!」
「いや、お前はある方だよ。スノウが大きすぎるだけだ」
「お黙（だま）り、そっちじゃないわよ！　いや確かに、私は結構あるんだけど！　そうじゃなくって、隊長から貰（もら）ったネックレスが！」
　泣き出しそうな表情で必死にあちこちを探すグリムに、
「それならさっき、お前が復活する際に消えてったぞ」

「うそおおおおおお！　ちょっと待って、私本当に死んでたの⁉」
　だからさっきからそう言ってんじゃん。
「え、ちょっと待って……？　私って本当に、自分で自分の加護を解いたの？　あれだけ格好付けておいて？」
「そうだよ。あれだけ大仰な事して自殺したんだよ」
「いやああああああああああああああ！」
　グリムが突然泣き出した。
「アンデッド祭りもトラブル続きで大概だったのに、最後の最後に皆の前で大恥晒して……っ！　ああっ、ゼナリス様、ネックレス！　私のネックレス、お願い返して！」
「こ、こらっ、それってお前が崇めてる神様なんだろ⁉　バチ当たってまた死

ぬぞ！」
　ゼナリスを奉る小さな祭壇を、ポカポカと殴りだしたグリムを慌てて止める。
「だ、だってだって、隊長から貰った婚約ネックレスが……！」
「また今後、別の何かを買ってやるから諦めろよ。ちなみに俺の国じゃ、指輪が婚約の証なんだぞ」
　涙を溜めたグリムが顔を上げ。
「じゃあ指輪を……」
「イヤリングな」
　俺の腕に纏わり付き、いい年した大人のクセに、やだやだと駄々を捏ね出すグリム。
「何だよ、分かったよもう……。じゃあ今度な今度。でもアレだ、ネックレス無

くなったんだから、十年後に独身だったら結婚するってのは無しな」
「はああああああー!?　何言ってるの、呪われたいの？　こっちには正式な書類による証拠まであるんだから訴えるわよ！　……あれえ!?　無い！　書類も無い！」
　ああ、そういえば……。
「ネックレスと一緒に書類も消えたぞ。お前、ネックレスとあの紙切れによっぽど想いが籠もってたんだなあ」
「やあああああああああああああーっ！」
　――それからしばらくして。
「おう六号、グリムはやっと起きたのか」
　例の婚約話をもう一度約束させられ、ようやく泣き止んだグリムを連れ出すと、そこにはアリスを始めとしたキサラギの戦闘員達が勢揃いしてい

た。
「アリスと、隊長のところの……。っていうか、ロゼとスノウはいないのね?」
　グリムの疑問にアリスが答える。
「スノウなら色々あって地下牢だ。今頃こってり搾られてるぞ。ロゼは……。この家の子になるとか言い出して、とある爺さんの家に住み着いた」
「ごめん、ちっとも分からないわ。詳しい説明をしてくれない?」

　――騎士団を任せたスノウは、治安維持を放り出して手柄を追い求めた結果、現在、ティリスに地下牢で詰められている。
　トラ男が敵に間違われたのもスノウの連絡不足だとして、ただでさえ少ない給料が更に減額されるらしい。

ない給料が更に減額されるらしい
　そしてロゼはといえば、あの爺さんの家で食っちゃ寝するだけの生活にすっかり馴染み、これからはパトラッシュとして生きていくそうだ。
「二人の事はほっておけ。どうせその内帰ってくる。それより先に、忌ま忌ましいこの森だ」
　アリスはそう言うと、ある物に搭乗するためその場を離れた。
　時刻はそろそろ夜明け前。
　これから始まるのは俺達キサラギの全力をもってのアジト建設だ。
「な、何々？　一体何を始める気？」
「俺達のアジトを造るんだよ。これまでは散々この星の連中に舐められてきたからな。今度こそ俺達の本気ってヤツを見せてやる」
　夜明けと共に建設計画が開始される予定だったのだが、その前にグリムが目覚めたのは好都合だ。

どうせなら俺達の力ってヤツを見せ付けてやろう。
目を丸くしているグリムの前で、大森林を遠巻きにしながら戦闘員の誰かが叫んだ。
「デストロイヤー起こせー！」
その言葉を切っ掛けに、重いエンジン音が鳴り響く。
キサラギが誇る巨大多脚型戦闘車両、通称デストロイヤー。
ヒーローが操る謎の巨大ロボに対抗するため、リリスの手で生み出された主力兵器だ。
前回の戦闘であちこち壊れたデストロイヤーをアリスがコツコツ修理し

ていたのだが、先日ようやく修理が終わり、こうして現場に復帰した。

コイツさえいればゾンビだろうがモケモケだろうが怖くない。

森から生えてくる美少女だろうが、デストロイヤーの装甲までは貫けない。

『目標、魔の大森林！　野郎共、この星を蹂躙するぞ！』

デストロイヤーに搭乗したアリスが叫ぶ。

それに伴い戦闘員達が歓声を上げ、大森林の開拓とアジト建設を開始した――

「――あなた達って、たまに凄いわね……」

呆れたようなグリムの声に、アジトを見上げて言葉を返す。

「お前らの隊長だからな。どうよ、少しは見直したか？」
「あなたは何もしてないじゃないの。……でもまあ私は、ずっと前から隊長の事、見直してるわよ？」
　からかうようなグリムの言葉に俺は不敵な笑みを浮かべる。
「見とけよグリム。ここから俺達の伝説ってヤツが始まるんだ。ここが俺達の拠点になる、秘密結社キサラギ、グレイス方面侵略アジトだ！」
　戦闘員達の歓声が辺りに響く。
　夜明けの光がアジトを照らし、そんな俺達の歓声に応えるように──
　アジトが盛大に爆発した──

【現地派遣戦闘員への命令書】

地球におけるヒーロー達の大規模な反撃は互いに大きな被害を出し、現在では睨み合いの状態が続いている。

ついては、戦闘員六号が派遣されている惑星に最高幹部を一名送り、速やかに惑星制圧。

その後、現地戦力を回収し、全力をもってヒーローに当たる事を決定した。

これまでの報告によれば、現地の同業者の戦力は最高幹部が当たれば問題なく解決出来ると判断。

最高幹部受け入れのため、早期のアジト建設を要請する。

アリスが提出した計画書にあった、デストロイヤーを使っての大森林開拓、及びアジト建設に期待する。

派遣予定の最高幹部については追って連絡。以降、定期報告の必要無し。

命令書発行者　アスタロト

ＰＳ：最終報告書の最後にあった、戦闘員六号に将来を誓い合う相手が出来たというのはどういう事なのか、詳しい説明を（以下省略）

あとがき

このたびは、『戦闘員、派遣します！』3巻をお買い上げ頂き、ありがとうございます！

２巻発売から随分間が空きましたが、やっと3巻を出す事ができました。

３巻を待っていてくれた読者様には本当に頭が上がりません。

次はできるだけ早く出しますと一応言ってみますが、話半分に聞いておいてください。

今回は、普段寝てるか男を漁るか喚いてばかりのグリム巻です。

とはいっても、戦闘員はヒロインの魅力を引き出し掘り下げていくという

作品でもないので、今後『○○巻』とあってもあまり期待はしないでください。

お盆をモチーフにした今巻ですが、実はグリムはこのメンバーの中で一番の常識人という設定になっております。

お金に忠実でスラム育ちの特性を活かし体を使う事も辞さないスノウ。

生存のためなら場合によっては主人公すら食べようとするロゼ。

科学絶対主義者でリアリスト、悪のアンドロイドアリス。

そんなメンツの中、惚れた相手に一途で尽くすタイプ、家事全般もこなし結婚資金も貯め込んでいるグリムは、最もヒロイン度が高いと言えるのではないでしょうか。

この作品はラブコメ展開にはならないので、全く意味の無い長所ですが……。

ちなみに凄くどうでもいい裏設定ですが、著者の別作品、『この素晴らしい世界に祝福を!』に、『復讐と傀儡の女神レジーナ』というのが登場します。

このキャラクターが当作品内の、『不死と災いの女神ゼナリス』の姉妹神という設定だったりしますが、姉妹ともにそれぞれ別世界の担当者なので、特に作品内には出てこないかと思います。

もしかするとそういった世界観を匂わせる話も出るかもしれませんが、その際にはあとがきで触れるかもしれません。

というわけで今巻も、イラストレーターのカカオ・ランタン先生、担当者のIさん、そして編集部の皆さんにいろいろな関係者の皆さんのおかげで、こうして出版出来た事を感謝しつつ、締めの言葉とさせて頂きたいと思いま

す。

そして、もう恒例（こうれい）となりつつありますが——

この本を手に取ってくれた全（すべ）ての読者の皆様（みなさま）に。深く、感謝を！

暁（あかつき）　なつめ

電子書籍特典　書き下ろし短編

『モブにも選ぶ権利がある』

神妙な顔で拳を握り、スノウが身を乗り出した。
「そ、それではその、儲かる話とやらを！」
「おいおい、せっかち過ぎるだろ。まずは落ち着いてお茶でもどうだ——」

アジトにスノウがやって来た。
というのも、この守銭奴はここ最近、度重なる失態続きで減俸され、ローンやなんやと金が無いらしい。
そこで、金が無くともなぜか楽しく生きてる俺に、何か悪い商売でもやってるのだろうと因縁を付けられたのだが……。
「本当は適当に絡んで金を借りるつもりだったのだが、まさか本当に商売をやってるとは思わなかったな……」
「お前今凄い事言ったろ。俺って一応悪の組織の戦闘員だよ？　そんなの相手にゆすりたかりとか、ある意味人生終わってるぞ」

まさかのカミングアウトにいきなり心を揺さぶられるが、今はコイツとの商売だ。

「そうは言うが、私とて追い詰められてるのだ。ここ最近教会の炊き出しと野草しか食べてない。食に関してはまだ我慢出来るが、そろそろローンの支払いがある。コレを無視すると愛剣を持っていかれてしまう」

「一体何をどうすれば、一国の騎士隊長からそこまで落ちぶれられるんだ」

　スノウは愛おしそうに腰の剣に手を当てる。

「私の暮らしはどうなってもいい。だが、この子達は……。私の可愛い子供達だけは、どうあっても生活水準を落とすわけにはいかんのだ。刀剣の保存には万全を期しているつもりだが、それでも念には念を入れねばな」

「お前の事を単なる刀剣マニアだと思ってたけど訂正する。お前は世界一の刀剣蒐集家だ」

それを聞いたスノウはなぜか途端にモジモジしだし、
「そ、そんなに褒めても何も出ないぞ。なんだ急に、どうしたのだ。貴様がこんなにも女を口説くのが上手いとは意外だった……。ちょっとだけなら私の剣に触らせてやってもいいぞ。や、優しくだぞ？　柄のところは敏感な部分だから、本当に優しくな！」
「俺もちょっと皮肉っただけでこんなになるだなんて予想外だよ。あと、その剣はさっさと仕舞え」
というか刀剣の話なんてどうでもいいのだ。
「何でそんな話になってるんだよ。一緒に商売するんだろ？」
「はっ、そうだった！　この子達のために稼がなくては……！」
何だろう、この、子供のために必死で働こうとするバツイチ女感は。
「じゃあ肝心の儲かる話だ。いいか、コレはお前の容姿を使った商売で……」

――繁華街を行く男の前に、一枚のハンカチがひらりと落ちた。
ハンカチを拾ったその男は、落とし主とおぼしき女を追い掛ける。
「なああんた、今、コレを落としたよ。ほら、そこの銀髪のお嬢さん！」
と、ハンカチの落とし主であるスノウが振り向き、男の腕を摑まえた。
「ほう、ナンパか？　ハンカチを落としましたとは、また古典的な……」
「えっ⁉　い、いや違う！　ナンパじゃなくて本当に拾い物で……！」
男が必死に弁解するが、スノウは怪しく微笑むと。
「別にナンパでも構わないのだが？　ちょうど暇を持て余していてな。そこにあなたが現れ、ハンカチを落としたと声を掛けた。なら、これ以上はもう語るべき事はあるまい？」
「え……？　い、いや、その……」
まさかの展開に男が混乱する中で、スノウが悪女の笑みを浮かべた。

——そう、美人局である。

スノウが人の良さそうな男に声を掛けさせ、良い雰囲気になったところで俺登場。

後はお約束の流れってヤツだ。

俺は街角の陰に隠れ、ワクワクしながら成り行きを見守ると——

「いえ、自分は本当にそういうんじゃないんで。これ、あなたのハンカチでしょう？　はい、ちゃんと返しましたよ」

「えっ」

アッサリとハンカチを突き返されて、スノウが驚きの声を上げる。

これは予想外だ、アイツ見てくれだけは悪くないのに。

「じゃあ、ボクはこれで。ああ、男が欲しいのならもう少し身なりを整えた方

が良いですよ。もっと清楚な方がグッときます。最初見た時は水商売の人かと思いましたよ」
「えっ……」
　立ち去っていく男を見送り、スノウが呆然と呟いた。
　俺はスノウに近付くと、その肩をポンと叩きながら。
「……人には好みってもんがあるからな。実は、他にキャバクラって商売があってだな。安心しろ、客引きは俺がやるから……」
「……今は優しくしないでくれ。ちょっとだけ折れそうだ……」
　――俺が言うのも何だけど。
　悪い事はするもんじゃない――

著者　暁なつめ

福井県、越前市出身のホテルソムリエ。
角川本社ビルがある飯田橋駅近辺のホテルに泊まり飽き、最近では隣駅のホテルにまで足を延ばす。
朝ご飯の美味しいホテル、チェックアウトが遅くゆっくり寝ていられるホテルなど、ホテルの事ならお任せください。
ちなみに副業で小説書きをしています。

イラスト　カカオ・ランタン

原稿は優雅にカフェで読むのが理想なのですが、戦闘員を読んでいると、突然タブレットに向かって壮大に吹き出してしまいます。奇人変人扱いは嫌なので、最近ではひっそり自分の部屋で読むことにしています。

カバーイラスト／カカオ・ランタン
カバーデザイン／岩井美沙(バナナグローブスタジオ)

あ-6
5-3
戦闘員、派遣します！3
暁なつめ
角川スニーカー文庫

　キサラギ本社からアジト建設を早く進めろと指令が入り、六号たちは作業に追われていた。しかし、先の戦いでデストロイヤーを転送してもらい、悪行ポイントはマイナス。建設に必要な重機や物資を取り寄せるために彼らがとった行動は——お城に住むティリスの部屋へ毎晩侵入すること!?　そこでは宴会芸秘技**【チョンマゲ】**を凌ぐ〇〇が行われていて!?
　一方、アンデッド祭りを取り仕切るグリムは悪霊の依り代となる人形を作り、真面目に準備を進めていた。その祭りを逆手にとり、再び魔王軍が襲いかかろうとしているともしらず……。
　バカとマジメが交差するとき物語は——な、第３巻！

戦闘員、派遣します!3

【電子特別版】

暁 なつめ

角川スニーカー文庫

2019年4月1日　発行

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『戦闘員、派遣します!3』
2019年4月1日　初版発行

発行者　三坂泰二
発行　株式会社KADOKAWA

KADOKAWA　カスタマーサポート
［WEB］https://www.kadokawa.co.jp/
（「お問い合わせ」へお進みください）